0002118000

0002118-000

304-Si567t

東洋民族論

白柳秀湖・著

千倉書房

1940

AAC

白柳秀湖著

東洋民族論

千倉書房版

304
Si567t

32078

序

滿洲はエウロツパでいふと、ちやうど今のフランスの南部、いにしへのいはゆるガリの平野にあたつて居る。中央アジアの境から、沙漠の北を緣づけて居る、天山・アルタイ・サヤン・ヤブロノイ・大興安嶺・と續く大山脈が、渤海灣へ今一息といふところで切れて、そこに山海關の隘路がひらけて居る。アジアの北種、すなはちウラル・アルタイ系（ツラン系）に屬する諸民族と、アジアの南種、すなはち崑崙系に屬する諸民族とは、この山海關の隘路に民族興廢の運命をかけて、押しつ、押されつ、悠々四千年の久しきに亙る血の取引を競合つて來た。それはちやうどエウロツパで、フランスのサヴオイとイタリアのロンバルヂア平野との間に、纔に越えることの出來るアルプスの褶襞があつて、エウロツパの北種、すなはちチユウトン系に屬する諸民族と、エウロツパの南種、すなはちラテン系に屬する諸民族とが、その嶮隘を押しつ、押されつ、大陸の支配權を目標に、アジアの約半分ほどにあたる歲月を、はげしく爭つて來たのとよく似て居る。

エウロツパでフランスの平野が南北あらゆる民種の血液と文化とを渾融同化する大ボイラアで

あつたと同じやうに、アジアに於ける滿洲の平野は、南北有らゆる民種の血液と文化とを渾融同化する大ボイラアであつた。しかも、エウロッパに於いて、フランスがガリ人、もしくはゴス人の故郷であつたことが儼然たる事實であると同じく、アジアに於ける滿洲も、もとツングウス人、若しくは蒙古人の本國であつたことが、儼然たる事實だ。さうして、滿洲は今日でも依然、ウラル・アルタイ系民族のものだ。

著者は昨、昭和十四年九月、南滿洲鐵道株式會社と、滿洲帝國協和會との懇篤なる招請に應じ、同月二十五日を以て程を東京驛に發し、十月三十日を以て、無事大井町の自宅に旅裝を解いた。この旅行の目的は發程に臨み著者がその單行本戰の機關として發行して居る月刊『日本民族』紙上に聲明した如く、その多年の念願にかゝる『民族東洋史』著述の準備行動の一つであつた。その滿洲の視察を以て最初の業程としたのは、前記の理由に基き、滿洲の人文及び地理の實際からうける印象の深刻さと、新鮮さとが、その志業を達成する上に、最も效果的と信じたからである。

本書はすなはち、その旅行の前後に、退引させぬ筋合の需めに應じて慌しく執筆したものゝ編纂で滿洲をその緩衝地帶として、押しつ、押されつした南北兩民族の悠々四千年に亙る血統と文化とに關する記述が多い。よつてこれに『東洋民族論』といふ、豫め企畫して體系的に書卸したものらしい、大袈裟な題名を冠したが、その僭稱の甚しきものであることは申すまでもない。

たゞ『民族日本歴史』五部編を世に問ふ前に、『日本民族論』一卷を以てその豫告篇として居たことを想起し、『民族東洋史』の爲にその緣起を祝ふ心持からこの僭稱を敢てしたものと、情狀を酌量して戴くことが出來れば、その罪も幾分は輕減されてよい筈だ。

滿洲では滿鐵と協和會との到らざるなき御配慮により、著者は大興安嶺越北の一區劃、すなはち蒙疆の地を除く、南北の主要地域に就き、人文・地文・天然物・等の廣汎な範圍に亙り、熱心に觀察の眼を光らせ、その土地の草分或はその方面の權威者とある人々に就いて、具さに教を乞ふことが出來た。なかんづく東邊道地方は、豫て著者が、日本民族の核心となつて建國の大業を成し遂げたウラル・アルタイ系に屬する或る優秀な種族の故郷として囑目して居たところとて、その視察には最も多くの力を注いだ。

それとて、著者のこの地方からうけた實際の印象と、豐富な資料とは、この書物にはその五十分の一も、或は百分の一も、收載されて居るわけではない。今の清津・雄基・羅津・を咽喉とする

長白山南北の『日高見』が二千幾百年の國史に重大な、關係を持つたことが三回ある。すなはち伊奘諾・伊奘冊・男女兩柱の神が、天浮橋に乘つて滄溟に泛び、いはゆる大八洲の島々を探檢遊ばされてから、素盞嗚尊の弁・辰・韓（新羅）御經略、大國主命の出雲御建國、天孫－瓊々杵尊以降神祖三代の葦原中國御統一を經て、神武天皇の御東遷に至るいはゆる神代の交通がその第一期、聖武天皇の神龜四年（西紀七二七年）九月から、醍醐天皇の延喜十九年（西紀九二〇年）十一月に至る約二百年間、前後三十四回（三十五回目は東丹國としての入朝）に亙る渤海國使節の來朝がその第二期、滿洲事變と相前後して開通された新京・奉天・吉林・の三大都市と、清津・雄基・羅津・の三大港灣とを繋ぐ京・圖・線の開通による昭和の民族ラッシュ（本書第一七六――一九〇ページ參照）がその第三期である。この日本海航路による前後三回の日・滿・交通史に於いて、聖武天皇の天平中、遣唐使－平群朝臣廣成が、歸朝の途、東支那海を航行中、暴風に遭つて安南近海のコンドル島に押流され、陸路一たび長安に引返し、そこから唐朝の諒解を得て山東の登州を經由、渤海國第二次の遣日使節に送られて出羽に著船してからは、難破率の多い寧波航路の外に、日本海から渤海國を經由して、山東の登州に至り、そこから唐都－長安に赴く陸路をえらぶ傾向の頗に著しくなつて居る如き、東洋史の上で最も注意すべき事實である。現に清和天皇の貞觀三年（西紀八六一年）六月十六日を以て新に採用公布されてから、靈元天皇の貞享元年（西紀一六八四年）德川五代將軍綱吉が、保井算哲の建議を容れて更に元の新曆を採用するまで、八百二十三年間、日本に通用した唐の長慶曆は、渤海國の使節－烏孝愼が、初めて日本に傳へたものである。

又、この本では、ウラル－アルタイ系諸民族の間に弘通するシャアマンのことにもちよい〳〵觸れて居るが、それにしてもわが崇神天皇の御代に始まつて、垂仁天皇の御代を經、雄略天皇の御代に至り、それ〴〵その欲りし給ふところに鎭まらせた天照大御神・大物主神・倭大國魂神・三柱の御魂の御遷座に際し、選ばれて『齋宮』となり、しきりに神慮を享けて聖地御治定の上に獻替輔翼するところのあつた豐鍬入姫命の御事蹟にしても、淳名城入姫命の御事蹟にしても、倭姫命の御事蹟にしても、これをアジアの北種、すなはちウラル－アルタイ系諸民族の間に弘通する祭祀の特徴から推究して、大に考へてよいものゝあることはいふまでもない。

この旅行中、著者は旅順の戰跡を巡禮して、折ふし眞盛りであつた野菊の美しさに眼を奪はれ、

ふと菊花がエウロツパ・アメリカ・兩大陸に原種を存せず、アジア大陸に於いても、太平洋諸島に於いても、すべて暖・熱・帶地域には、原種を見出し得ないことに想到つた。さうして聯想は直に長きあたりの御紋章にまで及んだが、更に深く考へて、『萬葉集』に一首も野菊の美しさをよんだ歌のないことに溯り、菊の和名が何であつたかといふことから、『神代記』に見える菊理姫(くくりひめ)のことに及び、『きく』と『くゝ』と、音に多少のひらきはあつても、支那と日本と同音同訓であつたことを發見して居る。（本書第二〇九——二一八ページ參照）祖光-濱名寛祐先生は、その著『大東古族言語史鑑』で、支那の古文の中には、日本と同音同訓のことばが頗る多い。先生によると支那の文化が、漢民族のものとなりかけたのは、少くとも夏・殷・以後のことで、それまでの古代文化、すなはち三皇・五帝・時代の文化はもとウラル-アルタイ系（先生のいはゆる大東古族）のものであつた。そこへ夏・殷・頃から漢民族の勢力が漸く伸びて來て、ウラル-アルタイ系民族の言語及び文法の上に、崑崙系の言語及び文法を押冠せてしまつた。古文の解き難いのは、全く系統及び構成を異にする南北兩種の言語が相交錯して居るからだといふにある。先生はその例として日本の『へび』（蛇）と支那の『反鼻』（蝮）とが同音同訓であり、同樣に日本の『よど』（淀）と支那の『雍奴』と、日本の『去る』と支那の『參蠡』と、日本の『散る』と支那の『罔』と、日本の『さかのぼる』と支那の『泝洄』と、日本の『なみ』と支那の『瀾漪』と、日本の『なんだ』（涙）と支那の『漣如』と、日本の『くも』（蜘蛛）と支那の『結網』『罟罔』及び『蜘蛛』と、日本の『ささがに』の『さゝ』と支那の『蠨蛸』（足の長い小蜘蛛の一種）とがそれ〴〵同音同訓であることを博引旁證して居られる。著者はかねて濱名先生の學問識見に深く傾倒して居たものであるが、滿洲で美しい野菊の花を見た時の實感から、偶然、先生の研究に『菊』の一例を加へ得たことを、この上もなく、うれしく感じたのであつた。

かやうに著者が滿洲で實際に見たり、聞いたりして學び得たことは、まだ旅行鞄の中にぎつしりと詰つたまゝ整理もされずに居るのだ。本書を以て著者の滿洲土產であるかに思はれることさへ、著者にとつては心外千萬であるのだ。たゞ滿洲の遊歷を了へて歸ると、そこには思ひも設けぬ二千六百年記念の各社の特別編輯企畫が著者を待ちかまへて居たし、いよ〴〵皇紀二千六百年に入つて見ると、著者は官界・財界・敎學界・軍部・その他民間各種團體から申込まれる歷史講演の包圍攻擊で、目下は單騎奮迅、一條の血路を切開いて、『民族東洋史』の完成に專念し得べき閑

靜の地を見出すことに血眼となつて居る。本來なれば、筆も口も著作以外の仕事は一切これをおことはりして、讀者と支援者とに負ふ義務を果すべきが當然であるのに、そこは凡夫の淺猿しさだ。退引ならぬ筋合から、是非とも賴むといはれては、商賣冥利といふことも考へないわけには行かぬし、皇紀二千六百年は著者の生涯にもうこれ限り、再び來ぬと思へば、多少の色氣も動いて來る。天外孤立の一老野乘子、今日ぞ、一期の御奉公と自分勝手な理くつをつけて、可哀さうに女房と子供とを祕書役代りに驅立て、正眞正銘、懸値なしの一騎駈で大童になつて奮迅して居る次第だ。これは全國各地の讀者諸君と、秀湖支援の諸先輩とに差出す詫證文の意味で、書肆の慫慂に應じ、思切つて出版したものだ。

昭和十五年五月十一日

白柳秀湖

本書に對する讀後の御感想、若しくは御氣付の記述上・印刷上・の誤謬は、遠慮なく東京市品川區大井瀧王子町四五〇三番地、著者宛に御教示を願上げます。それは著者として最も大きい仕合せの一つであります。

目次

アジア及び太平洋の曉闇を破る民族ラッシュ

アジア諸民族解放戰の三段展開……三
滿洲國創業の歷史的意義……三
中世期の世界は東西とも大陸的封建ブロック制であつた……九
天孫御降臨以前に於ける漢・魏・のわが一部北九州に對する封建的支配……一三
朝鮮半島に對する中華政權の支配力弛緩と天孫民種の九州從遷……一六
神祖三代の九州御經略と朝鮮半島の情勢一變……一八
黎明期日本の中華政權に對する國交調整……二〇
神代から開けて居たらしい寧波航路……二四
雄略天皇、漢民族招撫の宏遠な御規模……二六
春秋戰國と五胡の亂の本質的相違……二八
支那に於ける大帝國主義思想の興起……三一

超非常時對策としての大化革新……三四
唐物の輸入超過と外國貨幣流通の弊……三七
遣唐使停止以後に於ける密貿易……三九
外貨の資援で增長した武門政權……四二
近代民族國家としての日本の興隆……四四
歐・米・資本主義インタアナショナルの東洋諸民族殘害……四八
非軍國主義の擬裝に蔽はれた資本主義先進國の殘忍性……四九
明治維新と對歐・米・不平等屈辱條約の改正……五二
第一次世界戰役から第二次世界戰役へ……五四

東亞聯盟結成の民種的・文化的・熔礦爐としての大滿洲……五七

初めて滿洲に御目見えする天外風來の一野乘子……五七
正月の燒餅を聯想させる大アジアの雄大な陸屋根……五八
陸屋根の南の緣と北の緣……六〇
血統と文化との上で截然と岐れたアジアの南北兩種……六一
陸屋根の北方平野に於けるツラン系五族……六四
滿洲に於けるツングウス・蒙古・及びトルコ族の血統並に文化……六八

シベリアの校倉式建築は北歐スエーデンまで喰込んで居る……六九
日本に於けるジプシイの足跡……七一
手品・曲藝・舞踊・三部曲の旅藝人……七二
現代に痕跡をとゞめるジプシイ・ダンス……七四
『散樂』卽ち『猿樂』……七五
崑崙・カラコルム・ヒマラヤ・以南に分布されて居るアジアの南種……七八
民族文化の特徵は太陽の熱と光とで決る……八〇
ケッペン氏の氣候帶說と人類文化の段帶……八二
常世國から常闇國まで……八二
朝日を禮拜する北種と夕日に跪伏する南種……八五
衣・食・住・に心を勞することの少い熱帶人……八七
熱帶に於ける戰爭と巫呪……八八
逆境こそ文化の母……九〇
冬を知る世界の農業に發した强烈なる國家意識……九一
狩獵生活が生んだ寄合評定制度……九三
東西同時に花咲ける世界最初の亞熱帶文化……九五
南北兩文化の緩衝地帶としての滿洲及びフランス……九八

康熙帝の北方文化主義に國策を統一せよ……一〇〇
語法・發音・の全く相違する崑崙系とツラン系……一〇一
純鐵は北方民族にのみ惠まれたものだ……一〇二
鐵器を投棄てつゝ生蕃の殺戮から免かる……一〇四
細矛千足國……一〇六
出雲のおろし金と月山の刀匠……一〇八
漢民族は青銅文化……一〇九
世界の三大宗教は皆亞熱帶の產物……一一〇
東西ともに北種は宗教を改造した……一一一
康熙帝の滿洲封禁政策……一一三
シャアマンの本質は宗教でない……一一五
佐藤信淵の『宇內混同祕策』……一一七
北支那も太古はツングウス族の世界……一二〇
滿洲はツングウス・土耳古・蒙古・三種族の血統的熔礦爐……一二一
滿洲帝國建國の理想……一二二

『五族協和』の最大難關としての漢系滿洲人の包容及び同化……一二九

祕境熱河が示現する南北文化の對照……一三五
ツングウス・蒙古・トルコ・三大種族の熔礦爐が滿洲……一二七
韃靼人すなはち原滿洲人……一三一
北種の精神を堅持した康熙帝の偉業……一三四
南方崑崙系文化を代表するラマ廟の偉觀……一三六
ラマ教は寧ろシャアマン蒙古の擬裝……一三九
滿洲封禁政策に現はれた康熙帝の政治理念……一四一
滿洲に於ける漢系滿洲人の蕃衍……一四三
漢系滿洲人の感孕は東亞聯盟成否の鍵……一四五

海洋文化の特質から觀た日本民族の優越性……一四八

混血種としての日・支・兩民族……一四八
諸民族興亡の岐るゝ海洋文化……一五四
北種の釘着船と南種の刳船……一六一
海洋に怯懦で港灣に執着のない漢民族……一六三
歐洲で日本民族に比較すべき混血種……一六六

人類の文化史に類例のない民族ラッシュ……一六九
東京は何も知らんでゐる……一七六
民族ラッシュの無風帶……一七六
京・圖・線の吸引力……一七六
信淵先生と京・圖・線……一八〇
血の枕木に聽く……一八二
滿洲建國史を光被する東北人の殊勳……一八六
一八八

大陸の地勢及び天然物

日本日高見から推定される大陸日高見の位置及び地形……一九三
何故に大和國を選定されたか……一九三
九州に於ける三種の米作地……一九五
天孫民族の第二日高見建設……一九七
『第二日高見』が『大和』と呼ばれた理由……一九九
第二日高見の周圍に移された九州の地名……二〇一
大陸日高見を決定する十項目……二〇三
大陸日高見の探檢旅行……二〇五

寒菊譜

米と熊、眞菰とかつみ……二〇九
主要食物を中心とする民族の研究……二一九
九州に於ける南北諸民種の渾一と民族文化の複雜性……二二一
高天原に於いて米は明かに輸入品であつた……二二四
保食神は元來の米食人で原日本人ではなかつた……二二七
熊襲は『精悍なる襲人』でなく『米を食ふ襲人』である……二三一
筑後・肥後・薩摩・の六大河川とそれ〴〵の米作地……二三四
熊田・熊野・熊川・熊谷・熊町及び熊之平の研究……二四〇
原日本人の常用食は米でなく眞菰の實であつた……二四四
眞菰は一部アメリカ・インデアンの常食……二六八
支那の烏啼山と日本の萬葉名所……二五一

小說・講談・からさへ名所は生れる……二五一
地名は幾つ同じものがあつてもよい……二五三
坐らにして名所を知つた古今時代の歌人……二五五
遠江國の曳馬野と三河國の曳馬野……二五六
萩を詠まぬ曳馬野の歌は概して秀作だ……二五七
上代は國郡の制が大に後世と異つて居た……二五九
吾跡川柳の舊跡……二六〇
夜泊の夢は驚き易い……二六一

ストーリイ映畫の中に織込まれた文化的要素……二六二

誤られた『文化』の意義……二六二
人種と文化とその起源……二六四
試にたどる西半球亞熱帶の一線……二六六
フロリダ及びミシツピイの天然物……二六八
ペツパア・ツリイとセイジ・ブラッシュ……二六九
仙人掌とカリフオルニア・ポピイ……二七一

人類の故郷を語る……二七三

——映畫ダアクーコンゴを觀て——

畏し白國皇帝陛下の親囑……二七三
人類の故郷、文化の源泉……二七五
『文化映畫』の嚴密な意義……二七八
日本の土俗學にも大きい示唆……二八〇
日本でも八幡樣の元の神體は牛に乘つて御座る……二八一

和戰兩面の日本民族

南北兩民種聯立提携の建國理念を一貫の條理とする日本の神代史……二八七

歴史の新らしさと民族の若さ……二八七
正史的記述と童話的記述との交錯……二九〇

黄泉國と八雷神……二九三
天安河原に於ける和平盟約……一九六
素盞嗚尊及び大國主命の聯立主義的國家理念……一九九
天孫民種を中心とする『おほわだつみ族』と『おほやまづみ族』との對立……二〇三

戰爭に現はれたる日本民族の特質……二〇七

武器と産業器械との職能は何時から分裂したか……二〇七
戰爭は人生の或る日に於ける産業、産業は人生の或る日に於ける戰爭……二〇九
民族の特質は最もよく戰爭と産業とに實現される……二一〇
熱帶・亞熱帶・民族の間に發達した大器械戰並に火藥戰……二一二
溫・寒・帶民族の間に發達した騎戰と步戰……二一三
海軍の戰術から考察した諸民族文化の帶……二一四
西洋の戰爭道德とキリスト教との關係……二一六
日本民族の持つて來た戰爭道德は自然發生のものである……二一八
日本の萬國赤十字條約加盟……二二一
餘五將軍・平維茂が兵燹の裡に敵將の妻を保護した話……二二二
貴族は貴族と鬪ひ奴隸は奴隸と鬪つた古代かばね制度の下に於ける戰場の約束……二二四
『こき』の時代から『うき』の時代へ……二二八
名馬の爭奪から破裂した源・平・戰……二三〇
完全にスポーツ化した平安朝時代の騎馬戰……二三二
命の遺取を徹頭徹尾嚴しい行儀・作法・で行つた
源・平・合戰の繪卷物……二三五
源・平・戰の彌次を聯想させた『我は海の子』の懸合……二三七
一語一語下司張つて行つた源・平・の彌次合戰……二三九
日本民族の戰爭道德を無慙に蹂躙した元軍の殘虐……二四一
元寇を一期として急角度轉換をした日本の戰術及び陣法……二四四
異民種と戈を交べる毎に繰返され勝ちな日本軍の非戰鬪員に對する失措……二四五
民族性の特質を語り得て餘りある城壁のない日本の都市……二四七
首府の占領と征服者の掠奪行爲……二五一
都市の占領と驕兵の掠奪行爲について……二五四
信玄の駿・遠・二州に兵を出すのは必ず米の收穫期であつた……二五八
武田氏二代の努力によつて經略された榛原・小笠・二郡の地……二六二
苗代を踏荒し、青田を刈取つて敵の糧道を斷つた德川方の
ゲリラ戰術並に清野作戰……二六四

目次

富士の裾野に移住した農民の大集團……三六六
農民は武田氏の指導の下に秩序整然と裾野に避難したのだ……三六九

東洋民族論　目次終

アジア及び太平洋の曉闇を破る
民族ラツシユ

アジア諸民族解放戰の三段展開

滿洲國創業の歷史的意義

滿洲國創業の目的がどこに在るか。又、その將來の針路をいづれの方向に定むべきかについて識るには、二千幾百年の久しきに亙り、日本と支那との間に引きりなしに續けられて來た政治的・經濟的・竝に文化的交渉の根本について識ることが何よりの近路だ。

アジア大陸では、中世以降、インドを除く一切の國家、一切の民族が、黃河・揚子江・の流域に治を置いたいはゆる中華政權を核心として、一圓の封建的ブロックを形成して來た。アジア大陸では有らゆる國家、有らゆる民族が、この大陸的封建ブロックの盟主に朝貢し、その封冊をうけることによつて、國土の安全と、民族の福祉とを保障されるに汲々日もまた足らざりし間に、ひとり日本だけが毅然としてこれに追隨せず、二千幾百年の久しき、立派に獨立國の體面と、自主

外交の威嚴とを保ち得て現代に及んで居る。

日本二千幾百年の歴史は、畢竟するにその中華政權を盟主とするアジア大陸の封建ブロックに對する自主外交竝に自主經濟確保の爲の奮鬪史であつたのだ。清朝の末に及び、東洋諸國が、歐・米・資本主義の爲に殘賊せられ、十數億の生靈を擧げて、貪婪飽くを知らざるかれらの經濟的搾取に委ねようとした時、日本がひとりかれらの羈囚から東洋諸民族を解放する爲に奮然として起上つた。日本は東洋諸國に率先して、神速に國内改革（明治維新）を斷行し、封建制度の殘殼を清掃することに成功したのであるが、その仕事の未だ完成するかせぬかに、安政五年、歐・米・から無理往生に押冠せられた不平等屈辱條約改正の仕事に乘出してゐる。それは清朝・支那が、日本より一歩早く歐・米・から押冠せられた宗主權無視の沒義道條約と、殆ど同じ性質のもので、民國・支那が今日に至つても、尙ほ平然としてその拘束に甘んじて居るところのものだ。しかるに日本はその不平等屈辱條約を改正する爲に、西南戰役の如き、慘澹たる同胞相尅の犧牲を拂つてまでも、その目的貫徹の一路に邁進し、日清戰役の初期から、日露戰役の破裂前までに、イギリスを始めとして、訂盟十六箇國との不平等屈辱條約を改締し、國際的にも立派な近代的民族國家としての體面を整へて居る。

不平等屈辱條約の改締は、日本が歐・米・の資本主義的羈束を打切つて先づその通商貿易（國際商業）の自主權を恢宏したものであつたが、日露戰役の前後から、第一次世界大戰役の發破を見るに至る約十箇年間に、日本は更に彙に恢宏した商業自主權を土臺として、工業資本主義的發展の基礎と準備とを固め、英・米・佛・三大先進國が嚴重に張りめぐらした繩張をくぐつて、世界市場に乘出す陣容を整へることに成功した。さうしてその陣容が第一次世界大戰役の進行とともに押寄せた物資需要の大颶風によつて更に畫化されたことはいふまでもない。

第一次歐洲大戰役の末期から、昭和の初期にかけて、日本の商品は、あたかも堤防を決潰した洪水の如き勢で支那市場から南洋へ、南洋からインドへ、インドから東部アフリカへ、東部アフリカから地中海へ、さうして最後には、紡績工業のメッカといはれるイギリスのランカシヤイアにまで、日本商品の宗を以て稱せられる綿製品が、その姿を現はすやうになつた。これには歐洲も、アメリカも、濠洲も、一齊に錯愕狼狽した。

これより先、北米合衆國カリフオルニア州の一角に炎々として燃上つた日本移民排斥の猛烈な

火の手は、忽ちにしてカナダに飛火し、濠洲に燃移り、メキシコにも、ブラジルにも、凡そ英・米・佛・三大先進國を以てその指導者とする資本主義インタアナショナルによつて打込まれた留釘の利いて居るところには、東西兩洋一齊に黄臭い煙を漲らせて來た。それなら英・米・佛・三大先進國を以てその主盟とする資本主義インタアナショナルは、新興日本の爲にアジア大陸及び太平洋に於ける日本の特殊權益を認める上に吝かでないかといふに、その決してさうでないことが、ヴエルサイユに於ける媾和條約會議から始めて、ワシントンに於ける四國軍縮會議・九箇國條約會議・と矢繼早に上程された新興日本の根を斷ち、枝を矯め、梢を剪り、葉を摘む諸種の無慙な提案によつて確められた。かれらは支那本土及び太平洋諸島はもとより、滿洲・蒙古・でさへも、これを駸々として伸びゆく日本の國富・國力・の爲に委讓することを懌ばぬのであつた。さうしてその日本を目の敵とする國際會議の席上には必ず民國・支那の代表者が、英・米・資本主義インタアナショナルのロボットとして、惡魔に身いられたもののやうに踊り且つ吼へるのであつた。しかもその物狂はしい地ただらと咆哮とにつれて、本國支那に於ける抗日・侮日・の火の手はいやが上に煽揚され、支那本土でも、滿洲でも、甚しきは滿鐵の附屬地内に於いてさへ、日本の男女は理由なき無慙な侮辱と凌犯とを受けねばならぬのであつた。

さうして支那及び滿洲に於ける抗日・侮日・の劫火がいよ〳〵その勢焰を高め、治安は日に日に危殆に瀕しつつあつたところへ、世界の市場は申合せたやうに、一齊にその關税の墻壁を高め、日本商品に對してその進出を妨げるのであつた。しかし日本人の工業的能力の優秀なる、あの手で來ればこの手と、隨分叡智の限りをつくして、理不盡に結ひめぐらされた墻壁の下をくぐつて居たのであるが、それも禁止同樣の高率となつては、もうどうすることも出來なくなつて來た。

さうして竟に來るべきものが來た。滿洲事變がそれである。支那事變がそれである。

之を要するに中世期アジアに於ける日本の支那に對する國策は、この東大陸を打つて一圓の封建的ブロックとしようとする中華政權の壓倒的勢力に對し、日本がどうすれば、獨立國家としての地歩を確保し得るかの外交戰であり、近世期アジアに於ける日本の支那に對する國策は、アジア十幾億の人類を擧げて久劫にその商品の消費者とし、その廣大なる國土を盡して、永遠にその安い工業原料の生産地として保留しようとして乘出して來た歐・米・資本主義インタアナショナルの支配から、どうすれば自家民族を救ひ、併せてその隣邦民族を救ひ、そこに共存共榮の途を見

出すことにより、すでに完全にかれらの俘囚となり果せて居る他のアジア諸民族を解放することが出來るかの經綸であつたわけだ。

滿洲帝國は、日本が後段の目的を具現する爲に、大アジア聯盟結成の素地として、その創業を扶翼したものだ。すなはち昔は支那に武力による大帝國主義を基調として建設された大アジア封建ブロックの中心があり、今は滿洲に、日本のアジア及びアジアの諸民族を歐・米・の資本主義的搾取から解放する王道主義的經綸を具現する爲の素地、すなはち滿洲帝國がある。滿洲帝國創業の目的とその針路とに關しては、抽象的に幾千萬言の美辭麗句を聯ねてこれを解說せんよりも、二千幾百年の久しきに亙り、中華政權の武力を基礎として建設された大アジア封建ブロックの壓迫に對し、有らゆる苦心と努力とを以て、毅然、獨立國としての體面と實質とを保持して來た日本の政治的・經濟的・竝に外交的國策の根本を說明するに越したことはない。それが分れば日本が歐・米・資本主義インタアナショナルの俘囚から、アジア及びアジア人を救助解放しようとして續けて來た、過去半世紀に亙る苦心と努力との由來するところも直に分るわけだ。ここに本篇のある所以である。

先づ大アジア封建ブロックの本質と、その由來とから說明してかかることとしよう。

中世期の世界は東西とも大陸的封建ブロック制であつた

ブロック經濟といふと何か事新らしく考へる人があるかも知れぬが、封建制度といふものは、東洋でも西洋でも一種の大陸的ブロック經濟であつたといふことを知つて置かねばならぬ。封建制度が崩壞して、近代國家が起り、各國家がそれ〴〵の經濟を立てるやうになつたが、この近代國家の經濟的慾望は、工業資本主義の發達につれ、自然に世界支配に向つて發展して來た。さうして世界で最も早く工業資本主義的態勢を整へ、海外貿易に最も有利な地位を占めた先進國家が、巧みにその世界支配の慾望を文飾したものが、自由主義的國際倫理であつた。

工業資本主義國家が、幾十億人類の經濟的支配を目標として、すばらしい自由主義行進譜につれ、その堂々たる武步を發する前の世界は、土地を經濟の基本とする封建制度の時代であつた。ところが、この封建制度の慾望も、權勢慾の自然の歸趨として、世界支配にまで發展してよい筈であつた。しかし、原始的封建制度の時代には交通も、運輸も極めて幼稚な狀態にあり、從つて

貨幣はあつても、その流通の範圍が、極めて狹い範圍に限られて居たので、その慾望も勢ひ大陸的ブロック支配に限られざるを得なかつた。

すなはち、世界は初め封建制度に基く大陸的ブロック經濟であつたが、近代國家の興起するに及び、それが資本主義制度に基く國際的自由主義經濟に進展して來たのだ。しかし、世界の經濟的發展は、この二段階を經由したのみであつたかといふに決してさうではなかつた。封建ブロック經濟から、資本主義的世界經濟に發展する過渡期に、今一段階、マアカンタリズムと稱へる重金主義的貿易時代があつた。この經濟的の過渡期が歷史でいふと中世紀に當る。

西洋は封建制度が、何ほどでもその原形をとどめて居た間、歐洲大陸を一箇國とするブロック經濟で發展して來た。東洋もその通りであつた。西洋と幾分の相違はあつたが、インドを除くアジア大陸を打つて一箇國とするブロック經濟で發展して來て居る。

西洋で封建的ブロック經濟の核心となつて働いたのは、何ものであつたかといふに、それはローマ法王であつた。ローマ法王が核心であり、その爪ともなり、牙ともなつて働いたものに、シヤアレマンとか、オツトーとか、チヤールス五世（フイリツプ二世）とかいふ全歐に君臨した偉大な帝王があつた。これはローマ法王から征夷大將軍の職權を委ねられたもので、シヤアレマンは西ローマ皇帝の榮冠を授けられ、オツトーは神聖ローマ皇帝として、ロンバルヂアの鐵冠を授けられたが、その全歐洲に征夷大將軍として臨んだ職權及び使命は同じであつた。

一體、歐洲でローマ帝國が滅亡し、ローマ法王を中核とする封建制度が起つといふことを經濟的にいふと、古代歐洲の奴隷經濟が崩壞して、新しい土地（莊園）經濟が起つたといふことに當るのだ。さうしてこの新しい土地經濟の起りは、アルプスから北方の森林地帶に蕃衍して、狩獵及び農牧を業とし、ローマ軍の征服をうけるたびに、その子弟を奴隷として拉致されて居たゲルマン人（チユウトン人）の勝利を意味するのだ。ローマの奴隷制度と法治主義とに反對して、峻酷な迫害をうけて居たキリスト教が、ゲルマン民族の興起につれて巧みにその政權の執行者となつた。さうして歐洲の封建制度が出來上つた。

このキリスト教徒とゲルマン民族との寄合世帶に於いて、ゲルマン民族はその本來の習慣であつた封建制度を提供し、キリスト教はその文飾として『四海同胞・人類相愛』のイデオロギイを持出した。ゲルマンの封建制度をキリスト教の四海同胞主義で上塗したものが、幾百年の久しき

に互り、歐洲を一箇國として支配した大陸ブロック制度であつた。

封建制度の本來はいふまでもなく、自給自足經濟である。自給自足經濟といへば、いふまでもなく、一種の鎖國制度だ。經濟的には鎖國、イデオロギイの上では四海同胞、そこにこの寄合世帶の面白味があつた。

東洋の大陸的ブロック經濟は、西洋そのままではなかつた。しかし、大體に於いて同じであつた。支那の中原に覇を稱するものは、それが漢人であると、滿・蒙・人であるとを問はず、取りも直さず歐洲の西ローマ皇帝であり、神聖ローマ皇帝であつた。歐洲でローマ法王の政治的支配力は海峽を越えて完全にイギリスにまでも及んだが、東洋ではそれが海峽を渡つて日本を拘束することが出來ず、ヒンヅウクシ・ヒマラヤ・を踰えてインドを支配することも出來なかつた。歐洲ではキリスト教の四海同胞主義が大陸的封建ブロックの塗料となつてそれに文飾を施して居たが、東洋では儒學の『忠恕』の精神、或は佛教の『平等無差別』の理念が、それ〴〵の領域でそれに代る役割を演じて居た。それが降つて宋代に及ぶと、儒學と佛教思想とが結付いて、朱熹・程明道・等の性理學說に基調する倫理學となり、そこに初めてアジア封建ブロックのイデオロギイとしての敎學が大成を見たのであつた。

天孫御降臨以前に於ける漢・魏・のわが一部北九州に對する封建的支配

日本民族渾成の核心となつた原日本人が、天孫瓊々杵命に統率されて、九州の或る地點に御降臨遊ばされ、ついで裏阿蘇一圓の高原（日田・竹田・森・臼杵-高千穗・等に互る幾つもの盆地）に最初の日高見國（ひだかみのくに）を建設された時には、中華政權の勢力がすでに朝鮮を通じて、九州に於ける或る先住民族（國津神）の間に及んで居り、原日本人は先づそれら諸民族を如何にして中華政權の封建的羈束から解放し、これを日本民族の一構成分子として包容すべきかの難問題に逢著して居た。

想ふに天孫降臨以前、朝鮮半島なる支那の植民地を通じて、漢・魏・の封冊をうけ、しきりにかの國との間に使節を通はせ、物資の交換をして居たのは、今の博多港、その頃の那（だ）（或はな）の大津を咽喉として、深く筑後の平野に衍び、肥前・肥後・の境に及んで居た倭族の諸女王國で、その數が凡そ三十許りあつたと、かの國の史書は記錄して居る。倭は『後漢書』『魏志』等の記述に

徴して、それが今の佛領インド支那地方から、廣東・廣西・雲南・福建・地方に蕃衍してゐる苗族であつたこと殆ど疑を容れるの餘地がない。但し、苗族の蕃衍ばビルマ・タイ・カムボヂア・ラオス・安南・東京・から、南支那一帯の廣汎な地域に及び、幾つもの種族に分れて、それ〴〵の言語・風俗・習慣・祭祀・を守つて居たのであらうから、耶馬臺國の女王に統屬した兩筑・兩肥・に亙る約三十の倭人部落が、南方アジアのどの方面から來た苗族であつたかは今のところ明かでない。少くとも著者の識れる限りでは明かでない。

たゞそれにつき、かういふことだけは明瞭にいひ得る。それは九州に於ける倭人國の全部が、漢・魏・の封冊（封建的支配）をうけて居たのではないといふことだ。それは『後漢書』『魏志』等の記述に徴して見ても、又、わが記・紀・の上に明記されて居る高天原（大陸日高見）と、國津神との交渉について見ても明かなことである。しからば、どの邊に占住して居た國津神が、支那中央政權の封冊（封建的支配）をうけず、獨立した生活を營んで居たかといふに、それは少くとも筑前の神港崎以東、豐前の中津を中心に國東半島をめぐつて、別府・大分・臼杵・に及ぶ海岸一帯の地に蕃衍して居た苗族の一派は、天孫の御降臨以前からすでに高天原との間に親密な關係があり、天孫御降臨の際は、水先案内（道中貴）となつて、御船を『筑紫の海北』に導き奉つたものと考へられる。

記・紀・ではこの苗族の一派が、『おほわだつみ』系國津神として盛に活躍して居る。『おほわだつみの神』の國が『豐之國』であることは、その神の女・豐玉姫を始め奉り、伊勢の外宮に齋き祀られて居る豐受姫神が皆御名の上に『豐』の字を負はすることによりてそれと察せられる。又、記・紀・の上に保食神として現れて來る女神は、豐受姫神の異名と考へられる。これは著者のみの考へでなく、徳川時代からすぐれた國學者の間に兩神を同體と見奉るの説が頗る多かつた。次に『筑紫の海北』を扼する神港崎に近く齋き祀られて居る宗像三女神と、國東半島と豐前の平野との峽隘、蒐狹（宇佐）に鎭坐ます宇佐神宮の祭神に關しても、現在奉祀されて居る三柱の示現された以前の歴史に溯つて考へると、考へさせられる問題が頗る多い。いづれにしても、兩豐（碩田―大分）の大わだつみ族が、漢・魏・の封冊をうけて居なかつたこと、天孫御降臨以前から、すでに高天原なる原日本人との間に親密な關係のあつたことだけは確實だ。

朝鮮半島に對する中華政權の支配力弛緩と天孫民種の九州徙遷

支那の封建的支配が朝鮮半島に及んだのは何時頃からと見てよいかといふに、先づ漢代からと見てよからうと思ふ。それ以前にも箕子とか、衞滿とか、いろ〳〵傳說はあるが、封建的支配のはつきりと現れて居るのは、漢の武帝の時、朝鮮を併合して樂浪・眞番・臨屯・玄菟・の四郡を置いたとあるのがそれと見るべきであらう。この四郡の郡守の居たところ、郡の行政區域等ははつきりせぬのであるが。樂浪の郡守が大同江の右岸、今の平壤に治し、南の方漢江の流域、平安・黃海・京畿・の諸道を管轄して居たことだけはよく分つて居る。この樂浪郡から後に帶方郡が分れ、わが九州なる耶馬臺大女王國と魏との交渉は、多く帶方の郡守を介して行はれたことが『魏志』に明かである。

樂浪郡は漢民族の遼東方面から鴨綠江を渡つて南下して來るものと、山東・直隷・方面から海を渡つて來るものとが相合するところで、こゝに漢文化の精粹ともいふべきものが移植されて、素晴らしい花を咲かせて居たことは、現に續々發掘されつゝある多くの精巧な工藝品によつて、略これを知ることが出來る。原日本人が九州に徙遷して第一日高見國を建設したのは、この樂浪文化が一とわたり咲き盛つた後のことゝ察せられる。何故かといふに、樂浪・帶方・のわが兩筑地方に於ける苗族支配は、漢・魏・の時代を極盛期として追々に弛廢し、晉代を經て五胡の亂の頃に及ぶと、扶餘・沃沮・等朝鮮本來の民族の活動が盛になり、樂浪・帶方・自體の維持さへ困難になつて來て居た。漢・魏・の支援で、纔に南方熊襲族の侵陵を免れて居た大耶馬臺女王國も、その頃から、めつきり影が淡くなつて居る。原日本人が、大陸の一角から九州に徙遷したのは、敢てこの形勢に乘じたものとはいはぬが、この時代であつたことは、その後に於ける日本と朝鮮・支那・との交渉に照して明かである。原日本人がその生活樣式上、樂浪・帶方・地方に於ける漢文化の影響をあまりに多くうけて居らぬところから察しても、大陸日高見(高天原)が長白山をめぐる山岳地帶にあつて、日本海に近かつたことが容易に察せられる。さうして原日本人は、支那との間にうるさい外交上の問題を釀すことなしに、兩豐地方に於ける『おほわだつみ』族の協力を得て九州に徙遷し、河流を傳つて裏阿蘇の盆地に占據することが出來た。若し漢・魏・のわが兩筑地方の苗族(倭人)に對する封建的支配の緊張して居た時代であつたならば、耶馬臺大女王國との間に必ず何か

うるさい問題が起り、それが『魏志』の上にも現はれて居なければならぬ筈だ。現に耶馬臺國が南方で狗奴國（熊襲）と、しきりに相攻伐して居たことは明記されて居る。

神祖三代の九州御經略と朝鮮半島の情勢一變

そんな次第で、裏阿蘇の盆地に占據した原日本人の第一に綏撫に著手すべきものは南方の熊襲族であつた。一概に南方の熊襲族といふ中にも、日向の南部から、大隅にかけて蕃衍して居た隼人族と、肥後の南部から、薩摩にかけて分布されて居た襲人とは、恐らくその民種を異にして居たであらうが、その異同はこゝに論ずべき限りでない。それはいづれにしても、天孫の『遊行』は、先づ南方に向つて發程された。さうして慘澹たる御經略の後に『おほやまづみ』族も王化に服した。この際、兩筑・兩肥・の倭族が問題にならなかつたのは、漢・魏・の封建的支配が弛緩する頃から、大體に於いて、その血統を同じくする兩豐の『おほわだつみ』族と提携し、天孫の第一日高見建設を翼贊し奉るに傾いて居たものと考へられる。

かやうにして、北部九州の『おほわだつみ』族と、南部九州の『おほやまづみ』族とが、天孫民族を挾んでその勢力を爭ふ時代の到來するのは、蓋し歴史の必然だ。『おほやまづみ』族は火闌降命（ほすそりのみこと）を擁し奉り、『おほわだつみ』族は火遠理命（ほをりのみこと）を擁し奉り、神代に於ける天下分目の戰が戰はれた後、『おほやまづみ』族は屈して、永く朝廷の御墻（みかき）を守り、吠犬（ほえいぬ）とも俳優ともなつて仕へ奉らんことを誓ひ、こゝにあらまし九州が統一した。

かうして九州といふ大熔礦爐の中で、日本民族が渾成されて居た間に、朝鮮半島の情勢も一變した。朝鮮半島では漢・魏・の封建的支配が弛緩すると、樂浪・帶方・二郡の地に布置されて居た扶餘と稱へる朝鮮本來の民族が先づ興起した。さうして半島の西南端、今の南北全羅道の地に蕃衍して居た馬韓人を征服して百濟國を建てた。馬韓人はわが北九州に於ける倭族とほゞ同系統の亞熱帶民種であつたことが明かだ。又、扶餘族と同系統の北方民種で、今の江原道から南北咸鏡道にかけて布置されて居た沃沮族が興起して高句麗（こくり）國を建てた。馬韓の東、今の南北慶尙道にあたる地方には、馬韓より文化の程度の遙に低い弁韓人・辰韓人・が一定の境界もなく、相錯綜して部落を營んで居た。弁・辰・韓人は、ともに馬韓人と同じ亞熱帶民種で、わが北部九州に於ける倭人の諸王國はもちろん、出雲國とも、又丹・但・高志・族とも頗る密接な、しかも複雜な關係のあつた

ものだ。この弁・辰・韓諸部落の上に、新羅國が起り、後に隋・唐・の支援をうけて、日本を惱ますほどの大勢力となつた。すなはち新羅・高句麗・百濟・の三韓時代が來たわけだ。

神武天皇の大和建國（第二日高見建國）は、支那が晉の弱體政權で、アジア大陸に對する封建的支配力を失墜し、ついで、五胡十六國の亂となり、支離滅裂の狀態に陷つて居た間のことゝ考へられる。だから天孫御降臨から、神武天皇の大和建國までは、記・紀・の明記する如く、神祖三代の御經路と見てちやうど年代が合ふのだ。何も苦しんで、これを量り難いほどの悠久な歳月とする必要はない。この間、日本としては、支那の中央政權に對する直接の交渉がなく、支那の亂離につれて俄然擡頭して來た三韓に對する關係が重大となつて來た。

黎明期日本の中華政權に對する國交調整

神武天皇の大和建國から、神功皇后の三韓御控制まで、歴代の朝廷が、新羅と最も密接な、しかも最も複雜な關係のあつた丹・但・高志・を表玄關とし三韓、殊に新羅に對する外交を調整し、しきりにこの地方の豪族から皇妃を召させて居るのも、大陸政策の御苦心が如何に慘澹たるものであつたかを恐察し奉るに餘りあることだ。

かゝる間にも、朝鮮半島に於ける情勢の變化は、一旦王化に服した南部九州に於ける襲人諸部落の動搖を來し、その警報が頻々として大和朝廷を驚かし奉るやうになつて來た。崇神朝の末期には、百濟の使節つぬがあらしと（都怒我阿羅斯等）といふものが、越前の筍飯（敦賀）に著津して、朝廷に新羅の亡狀を訴へ、切に日本の救護を求めた。それでなくとも何とかせねばならぬところであつたので、朝廷は鹽乘津彥といふものに兵を附して差遣され、この時初めて任那に日本府といふ大陸政策の脚がゝりが設定された。

しかし、日本が百濟を援けて、任那に日本府を設定したことは、いよ〳〵新羅と百濟との關係を惡化したらしく、九州に於ける熊襲の反色も今は棄て置き難いものになつて來た。新羅がかく驚蹇を極めたのは、新羅の王室に、わが出雲族、若しくは丹・但・高志・族の血統が多量に流れて居り、それが頗る複雜な關係で、九州に於ける熊襲族を繰る絲となつて居たのではないかと考へられる。しかし、日本として完全に朝鮮半島を制する爲には、支那の情勢を探り支那に對して直接交渉を開始する必要も考へられたわけだ。垂仁天皇の晩年に、歸化人・天日槍の後裔で、代々但

馬の豪族であつた多遲摩毛利が、勅を奉じ、蜜柑の苗木を採る爲に、常世國（恐らく中・南・支の或る地方）に派遣されたとあるのも、或は支那本土の情勢を探り、かの國と直接交渉を開く素地を作る爲であつたのかも知れない。景行・成務・仲哀・と九州の情勢はいよ〳〵險惡に陷り、これを根本的に整理する爲には、新羅に對して一大鐵槌を下すことが必要となつて來た。そこで仲哀天皇には皇妃として、丹波の豪族で、朝鮮と最も深い關係のあつた息長宿禰の女・息長足姫を召させ、丹・但・高志・の精鋭を以て新羅膺懲の壯圖を御決行遊ばされた。この行、天皇には不幸にして征途に崩御遊ばされたが、皇后がその御遺業を繼紹して新羅を征し、完全に三韓控制の目的を達成して御凱旋になつた。この御壯擧により、任那の日本府が保鞏もされ、恢宏もされたことは申すまでもない。

神功皇后が極めて短時日の間に、又極めて效果的に三韓控制の目的を達成遊ばされることが出來たのは、その絶倫の英資と、御父・息長宿禰によつて統率された丹・但・高志・の軍隊の精鋭とによつたこともちろんであるが、この時支那がなほ内亂に忙殺され、アジア大陸に封建的盟主としての威信を保つに足るほどの中央政權が確立を見て居なかつたことも、その重要な原因の一つであるに相違ない。さうして三韓の貢船は瀬戸内海を經て、歲々浪速の津に横へられ、日本は爲に非常な殷富を來したのであるが、その殷富の最も大きい原因となつたものは、三韓の服屬から、日本の事情が、舊の樂浪・帶方・地方に聚落して居た支那のすぐれた工藝人の間に知れ渡り、進んで日本に歸化を申出るものが續々現はれて來たことであつた。

朝廷では出來得る限り便宜を計つて、これらの歸化漢人を日本に迎へ、支那のすぐれた工藝を日本に輸入しようとされた。しかるにこれらの工藝人は朝鮮にとつても大切な一種の寶であつたらうから、かの國の王者の中には、これを抑留して、その日本に歸化するのを妨げるものがあつた。かやうな場合には、日本の朝廷は、相當の兵員を派遣しても、歸化漢人の集團を引取られた。さうして初めの程はこれを一箇所に置いて、絹布を織らせたり、酒を造らせたり、その他さまざまなすぐれた工藝品を產出させたりしたものであつたが、絹織物工の如き、後にはこれを諸國諸郡に分置して、地方の振興と、國富の增進とに資せられた。

凡そ一國の興起する元氣の源泉は、その民族の間に發達した特殊の產業にあること、東西ともに皆同じである。古代支那があれだけ發達して、世界の文明に先鞭をつけたのは、古代支那に絹織

物工業が發達し、駱駝を船とし、ゴビ・タクラマカン・パミイル・トルキスタン・アラビア・ペルシア・エヂプト・の沙漠を海とする東西兩大陸の貿易により、世界の富を吸收することが出來たからである。しかも古代支那の絹織物工業は、世界諸民族に對する嚴重な祕密であつた。これを犯したものは重刑を以て擬せられたものであるにも拘らず、日本は坐らにして、古代支那の元氣の源泉であり、殷富の基本である絹織物の熟練工を招致することが出來た。さうして十五世紀の中葉に及び、ポルチュガル・イスパニア・のガレオン船が初めて東洋にその雄姿を現はす頃までには、日本がすでに支那から絹織物工業のお株を奪つて居たこと、その頃から歐洲諸國で、『絹の國』といへば、支那を意味せず、直に日本を意味したことによつても知られる。（但し白絲は別で、德川時代を通じて尙ほ支那が本場であつたらしい。拙著『明治大正國民史』二〇四ページ、長崎絲割符人の項參照）

神代から開けて居たらしい寧波航路

日本が朝鮮半島を通じて、もしくは直接、使節を支那に送つて、絹織物の熟練工を招聘したのは、應神天皇の御宇に始まつて、雄略天皇の御宇に及び、その歸化人の數は非常に夥しいものであつたらしい。當時日本から支那への航路は、一旦朝鮮に渡り、濟州海峽を經て東支那海に出で、黑潮支流（對馬海流）の逆コースを利用して一路、寧波に走込むか、さもなくば、五島もしくは坊の津あたりを發航し、大島附近で黑潮支流を橫斷することに成功すると、直に東支那海に出で、それからは易々と寧波に走込むことが出來たものらしい。この航路のいづれかは恐らく垂仁天皇の御宇、多遲摩毛利（たちまもり）のとつた航路であり、聖德太子が支那との國交調整の爲、初めて使節を隋の煬帝に向けて發遣されて以降、歷代の遣唐使のとつた航路に相違あるまい。弘安四年、元主忽必烈が日本征服の再擧を企てた時、その遠征軍を朝鮮の馬山灣（合浦）からするのと、寧波からするものとの二路に分けて發遣し、筑紫に會して、一擧に太宰府を奪取させようとしたのも正直なものだ。倭寇は元の江南軍（范文虎軍）の攻寄せた航路を逆に寧波に押寄せ、こゝから揚子江の河口に出で、溯航して蘇州・南京・を荒すか、寧波から海岸に沿つて福建の泉州に下り、廣東・佛領インド支那・の海岸を掠めるかしたものだ。この寧波航路がどれくらゐ早く日本人に利用されて居たかは、應神天皇の三十七年、漢人・阿知使主父子が勅命を奉じて刺繡の熟練工を求める爲に吳國に赴き、兄媛（えひめ）、弟媛（おとひめ）、吳織（くれはとり）、穴織（あやはとり）の四女工を得て日本に携へ歸つた時、筑前國宗像の宮司が

その一女を請ひ得てこれを筑紫に留めたとあるのに徵しても知られる。宗像女神は、天孫の水先案内をして、御船を『筑紫の海北』に導き奉つたといふ由緒の深い海神である。殊にその祖『おほわだつみ』は、豐玉姫の傳說によつても知られる如く、鰐を以て本國の象徵とした常世族である。鰐は福建以南の亞熱帶地域にのみ見られる動物である。應神天皇の御宇、吳國から召された四女王の一人が、宗像の宮司の請で筑前に留められたとあるに徵し、寧波航路が神代からこの頃まで『おほわだつみ』の支配であつた關係がよく分る。

雄略天皇、漢民族招撫の宏遠な御規模

かやうな次第で、應神天皇から雄略天皇に至る約二百年間は、日本の產業の一跳躍時代であり、日本の國運は非常な勢で伸張した。さうして古代支那の文化の精粹ともいふべき絹織物工業が完全に日本のものとして取入れられた。雄略天皇には、この產業の大功勞者である漢人を日本民族の主要な構成分子の一として包容し、かれらの子々孫々に至るまでも永くその感孚を及ぼさうとする宏遠の御規模から、明かに『おほわだつみ』系國津神と同系に屬するものと考へられる丹・但・高志・族の祖神として丹波國（現在丹後）興謝郡魚井原に祀られて居た豐受姫神（恐らく保食神の異名）の御靈を、伊勢國山田なる皇太神宮の傍に奉遷し、外宮として齋きまつられたのであつた。伊勢の皇太神宮は、崇神天皇の御宇、この地を選定して奉齋されたもので、外宮の並祀されるまでに凡そ五百年の歲月が經過して居る。これで外宮の奉齋が、產業の振興、漢族・苗族・を始め、南方諸民種の包容同化を目的とする雄略天皇の宏遠な御規模であつたことがよく分る。

上來述べて來たやうに、朝鮮在留の漢人が自ら進んで集團的に日本に歸化することを求めて來たのは、かれらが漢末以降打ちつゞく際限なき本國の亂離狀態に飽いて、全くその前途に望みを失したからであつた。殊に五胡の亂となつては、中華を擧げて殺戮と劫掠との庭とし、民族幾千百年の努力の結晶である有らゆる善良な秩序と規律とが惜氣もなく、理不盡と沒義道との劫火の中に投込まれてゆくのであつた。この無慙の狀態を見ては、志あるものも逃避して山林に隱れ、無用の觀念遊戲に時を鎖して現實の苦惱を忘れるか、然らざれば一族同類相携へて國外に奔竄し、聖主の保護を求めて、その生命と特殊技能とを託し、そこに新しい希望のある生活を見出さうとするか、二途その一を擇ばなければならなかつた。漢の武帝によつて設置された朝鮮の四郡の中、

樂浪・帶方・地方は水も清く、山も青く、これを修羅の巷と化した支那本土にくらべると、夢に遙來に入るの感があるとの噂もあつたので、かれらは續々相率ゐて難を朝鮮に避け、そこに聖主の治を求め、別天地を開拓しようとしたのであるが、その頃の朝鮮の事情は必ずしも漢・魏・の時代と同樣でなく、見ると聞くとの間に相當の距離があるのに、こゝも同じ人生かの感を深くせざるを得なかつたであらう、かれらが更に東方に聖主の國ありと聞き、その治を求めて、續々日本に歸化を求めて來たのもさうした事情と察せられる。

春秋戰國と五胡の亂の本質的相違

雄略天皇の御代も過ぎて、欽明・敏達・兩朝の頃に至ると、さしも打續いた支那の內亂も、そろそろ下火になりかけて來た。三國の攻伐から、晉朝の弱體政權によりて、惡く煽揚された內亂の劫火が、五胡の亂となつて、約四百年の間に、有らゆる光輝ある中華の文化と傳統とを燬き盡すのを見た支那人は、やがて來るべき中央政權が、絕對强力のものでなければならぬことを學んだ。東洋史の上で、五胡の亂ほど無慙に古代支那の文化と傳統とを破壞し去つた異變は前にも後にもなかつたが、この異變の中から、大アジアを打つて一圓とするほどの强力政權が、確立するのでなければ、中華の安寧秩序は、到底保たるべきものでないといふ大帝國主義思想が、油然として湧出して居ることは注目すべきだ。これより先、支那には周の後に、戰國と呼ばれた群小侯國の割據時代もあつたのであるが、その割據といひ、無統一といひ、畢竟舊い秩序が廢れて、新しい秩序の興りゆく過渡期の現象であり、縱令、大道は廢れて居たにしても、その間に仁義の光は燦として輝いて居た。倫理は亡びて居たにしても、道德は尙ほ嚴として到るところにその拘束力を保つて居た。決してそれが、後に五胡の亂に於いて見たやうに亂雜無秩序の世でなかつたことだけは、はつきり區別して置く必要がある。支那四千年の歷史で尙ほ大いに再檢討され、再吟味されてよいことの多い中に、五胡の亂の如き、正しくその尤なるもの〻一に居る。

支那の古代文化は、簡素純朴な北種（ツラン系）の生活樣式と南種（崑崙系）の中で最も優秀な素質を持つた漢民族の高度の生活樣式とが、渾然たる調和の上に置かれたところに榮えたものであつて、若し、南北兩種の文化を融合して一元化した『東洋文化』といつた形のものがあり得たとすれば、それは堯・舜・時代から、高々漢末に至る間のこと〻見るべきではなからうか。支那

の古代文化を滅ぼしたものは、弱晋の末から五胡の亂を通じて行はれた理不盡・沒義道・な同士打騒ぎであつた。この戰亂を一期として支那ではその思想體系からも、生活樣式からも、簡素朴茂な北種系統のものが全く形を沒し去つて居るやうに考へられる。その意味だけでも、五胡の亂は支那の歷史に一新時期を劃した大事件だ。五胡と呼ばれたもの〻中には、鮮卑といひ、匈奴といひ、北種に屬するもの、若しくはそれに近いものも居たやうであるが、その多くは漢民族と同じ系統に屬する南種の中の異種族であつた。人類の歷史で、凡そ同種異族間の爭亂ほど殘忍にして愚劣なるものはない。人種の全然異る場合には、戰爭の結果として隨分無慙な殺戮も行はれ、焚掠凌犯眼もあてられぬ地獄の繪卷物も展開されるが、その悲慘の中から、その狼藉の間から、必ず新しい文明の胚芽が頭を擡げて居る。しかるに同種異族間の長期に亙る戰亂は往々にして破壞あるのみである。殺戮あるのみである。支那の文明は五胡の亂の序曲であつた三國の對立時代を最後として、完全に新しい方面への展開を停止して居るやうに見られる。それまでは駸々として發達し、生々として成長して來たのであるが、漢末から五胡の亂を通じての理不盡・沒義道・な同士打騒ぎで、全くその進步の芽が摘まれてしまつたもの〻やうに考へられる。

支那に於ける大帝國主義思想の興起

この五胡の亂の結果として、支那の歷史に最も著しくなつて來たものは、アジア大陸を打つて一圓の封建ブロックとするのでなければ、中華政權の基礎は確立したといひ得ないといふ大帝國主義の思想である。これより先、秦といひ、漢といひ、北方ツラン系統の諸民族に對して隨分武力を用ひた中央政權もあつたものであるが、それは通じて何ほどか防衞的であつたことが見られる。中華の安泰の爲に、或は北方に或は東方に疆を越えて出征はしたが、それは中華の爲にその文化と傳統とを防衞する爲の出征であつたやうに見うけられる。

しかるに五胡の亂が下火となつて隋朝が先づ興り、ついで唐朝の政權が確立する頃になると、支那の帝國主義はもう單なる防守國策では有り得なくなつた。苟も中華に號令するほどのものは、北は蒙古の沙漠を超えた中央アジアの境、東は滿洲・朝鮮・を越えたシベリア・沿海州・の境、西は甘肅・四川・を越えた西藏・新疆・青海・の境、南は雲南・廣西・を越えたカムボチヤ・ビルマ・の境、少くもこれだけの地域を確實にその封建的支配の下に置くのでなければ、中華の安寧秩序は保たれな

いといふ大帝國主義思想が油然として、支那人の頭腦を支配して來た。だから唐朝が大アジア封建ブロック建設の爲に用ひた帝國主義的侵略戰爭の猛烈さと、强靱さとは、到底秦にも、漢にも、魏にも、見られぬ積極的のものであつた。唐朝といへば人々は直に、衣冠燦然たる泰平の秩序を聯想するやうだが、それは唐朝文化のほんの一面である。杜工部にしても、李太白にしても、又白樂天にしても、詩人としては、東洋に冠たるばかりでなく、世界を壓倒するものであるが、その作品の七・八・分までは、人民に代つて兵役の愁苦を愬へたものであること人の知る通りだ。この唐朝大帝國主義の鋭鋒に對しては、滿洲も、朝鮮も、蒙古も、西藏も、全く刄が立たなかつたものだ。

この大帝國主義は、唐朝滅亡の後、宋・元・明・清・と傳へて、その政權の主體が北種(ツラン系)であつたと、南種(崑崙系)であつたとを問はず、中華政權の傳統として必ず踏襲されたものだ。たゞその中で、宋朝は未だその帝國主義的態勢を整へるに遑なく、滿洲遼河のほとりに遼の興隆を見、ついで長白山越北の地に金、外蒙古に元と相ついで起上つたツラン系諸王國の壓迫に對し、徒らに以夷制夷の小策を弄して一時を彌縫するのみ、徹底的に兵威を以てかれらの頭上に加へることが出來なかつた爲に、遂に遼の侵陵をうけて南渡の止むなきに至り、ついで金を亡ぼして入關した元の爲に蕩平されてしまつた。かやうに唐につづいで起つた四朝の中では、宋だけが弱體政權であつて、完全にアジアに號令することが出來なかつたが、他はすべて大帝國主義を以てアジア大陸に臨み、日本は常にこの壓倒的大勢力の脅威に直面して、如何にすればその獨立國としての體面と實質とを維持し、自主外交・自主經濟・を以てこれに臨むべきかの對策に惱まなければならなかつた。さうしてその最初の試練が隋・唐・の統一によつて、わが飛鳥朝の上に下されたわけであつた。

支那に於けるかやうな情勢の變化は、敏達・欽明・推古と時代の進むにつれ、弱晉の末から五胡の亂を通じて一旦罷廢した朝鮮半島に對する中華政權の支配を復活せしめたことはいふまでもない。さうしてその間に乘じて勃興した日本と、その間に乘じて建設された任那の日本府とは、この時に及びひし〳〵と中華政權の壓迫を感じて來た。しかも國難はそればかりではなかつた。應神朝から、雄略朝に亙る外來文化の輸入と、それに伴ふ產業の發展とにより、大氏族の富力は遽に增大し、その實力は往々にして皇室の御稜威を凌ぐものさへあるに至つた。古代かばね制度の

弊害は今やその絶頂に達し、國内的にも、國外的にも、日本がその國家體制の上に大革新を要する日は、刻々迫りつゝあつた。

超非常時對策としての大化革新

この建國以來の超非常時局に對し、最初に改革の試案を提出されたのが、聖德太子であつた。聖德太子は半島に於ける新羅の增長は、その背後に支那の中央政權があると見、これを隋との國交調整によりて解決すべしと御企畫遊ばされた。これは非常な御卓見であつた。又、國内改革の爲には、佛敎の理念を基礎とし、國民の精神的敎化によりて自發的に國體の本義に立還らすべしとし、十七憲法を發表遊ばされた。

隋に修交使節を御派遣遊ばされたのは、まことに建國以來の盛事であつて、その日本の爲に飽くまでも獨立自主の體面を維持することにつとめ、大國の威勢を懼れず、對等の立場から堂々と呼びかけて居るのは、後世わが皇室の關する限り、外交の規範となつたものであつて、今日から考へても小氣味のよいことであつた。最初の遣隋使・小野妹子が齎した國書の劈頭に、『日出ル處ノ天子、書ヲ日沒スル處ノ天子ニ致ス、恙無キカ』とあつたのを見た隋の煬帝は甚だ不興であつたと傳へられて居る。こゝでわれ〳〵の特に留意して置いてよいことは、日本の皇室及び皇室をめぐる殿上人の階級を構成した天孫民族の大陸に於ける駐屯地すなはち高天原が、漢・魏・の封建的支配から絶對に隔絶された長白山山系の或る盆地（日高見）にあつたといふことだ。天孫民族は、この日本列島に徙遷するまで、そこに居て、樂浪の影響も帶方の支配も絶對にうけなかつた。その處女性、その純潔性が、隋・唐・に對するこの堂々たる自主外交の文書となつて現はれて居るのだ。弱晉の末から五胡の亂を通じての支那の滿・鮮・に對する封建的支配力の弛廢と日本國の勃興との間にはかやうな密接な關係があるのだ。

聖德太子國内改革の御企畫は、中大兄皇子、すなはち後の天智天皇と、その輔弼の良臣・中臣鎌足とによつて繼承され、大化新制の大英斷となつて古代かばね制度の一角を突崩し、唐朝の大帝國主義に對する國家總動員態勢を整へることに成功した。

是より先、推古天皇の二十六年、隋が唐と替ると、その大帝國主義の兵威はいよ〳〵朝鮮半島に伸び、百濟救援・任那保有・の爲に派遣される將士の、徒に異域の寃鬼と化する犧牲が年一年と

慟しくなつて來た。それにつれて國防費が非常の膨脹を來して居たことはいふまでもない。もちろん、これは推古天皇の時に始まつたことでなく、すでにその數代以前からの形勢だ。南京事件、濟南事件、通州事件の如き、むしろそれ以上の悲劇が頻々として大和朝廷を驚かしつゝあつた。

大化新制はこの國難に對して先づ國內改革を斷行し、古代かばね制度の一角を突崩して、官職に對する大小氏の上及びそれに統屬する氏人の身分の墻を撤廢して、人材登用の途を開くことに成功した。貴族の末班である氏人を、身分の羈絆から、解放したことは、やがて國家總動員態勢を整へる所以の途であつた。殊にこの改革に於いて、聖德太子の佛敎の敎理を改革の基礎理念とする試案が揚棄されて、原始儒學、すなはち簡易素朴な東洋（恐らくツラン系の）の政治及び經濟理念の取上げられたことは注意して置くべきだ。

かゝる間にも朝鮮に於ける任那の保有はいよ〳〵困難となり、唐の派遣した蘇定方の大軍と、日本の派遣した百濟救援軍とは、いよ〳〵半島に於いてその尖鋭を接する形勢となつて來た。この重大な形勢に對して天智天皇には、非常の大英斷を以て百濟の救援を打切ること、、任那の保有を斷念することとを御決心遊ばされた。さうして新羅が驕兵を驅つて日本に押寄せて來る萬一の場合を想定して、對馬・壹岐・筑前・長門・讃岐・河內・の要害に防壘を築き、兵員を增派し、一切の戰備を固めた後、都を近江國さゝ波の志賀の浦に遷して、待機の姿勢を執つて新羅の情勢を凝視遊ばされた。しかも一方には遣唐使の制を整へ、專ら外交調整による非常時局の克服に御努力遊ばされたが、この國策は幸にして大成功であつた。

唐物の輸入超過と外國貨幣流通の弊

但だこの國策の餘波として、困つたことが起つて來た。それは遣唐使の往來が頻繁を加ふるにつれ、かの國の文化が、滔々としてわが國に流れ込み、一般國民の唐物を尊重し、唐制を模倣する心理がいよ〳〵出でゝいよ〳〵甚しくなつて行くことであつた。もちろんこの傾向の背後にはかの國の工藝品が盛んにわが國に輸入せられ、それと交換すべきわが國の物資が、非常な勢で支那に流出して行く輸入超過の問題もあつた。當時かの國からわが國に輸入される工藝品の中には、わが國から輸出される原料に加工し、これに文飾を施したゞけのものも少くなかつたであらう。

凡そ國際貿易關係に於いて、或る後進國が、先進國の爲に商品の原料を提供し、その原料に加工

し、且つ文飾を施したものを、逆にかの國から輸入して珍重するほど悲慘なことはない。さうした國は國民の血と汗とによつて產出される貴重な原料を搾取された上に、その原料に加工した商品を眼の玉の飛出すほどの高價に買入れて、二重にも三重にも搾取をうけて居ることに當る。しかもこの關係が久しきに及べば、搾取される國は、やがてソップの出し殼のやうに荒んでゆくのだ。わが奈良朝末期の經濟はその危機に直面して居たのだ。中央の文飾は光華燦然として人目を眩するものがあつたにも拘らず、地方が日に〳〵痩せ衰へて、亂雜無秩序の狀態に陷りつゝあるのを政府としてどうすることも出來なかつたのも、畢竟はその爲である。さうしてその傾向が平安朝に入るといよ〳〵甚しく、遂に政治の大權が朝廷の手を離れて、武門武士の手に移るやうになつて行くのであつた。

元明天皇の時、武藏國から出た銅で、日本最初の貨幣『和同開珎』が鑄造發行されたのは、大化新制の結論である郡縣制度の必要に應じたものとしては少し晩きに過ぎるやうだ。もちろん、それも大きい理由の一つではあつたであらうが、唐との貿易が盛んに行はれてゆくにつれて、日本にも幣制を確立することの必要が痛感されて來たのではなからうか。元明天皇の和銅元年から、村上天皇の天德二年まで、二十代約二百五十年の間に、朝廷は十二種の貨幣を鑄造發行して有らゆる方法により民間にその使用を勸奬された。しかるに滔々たる唐物崇拜の大勢は、遣唐使の便船毎にかの國から輸入される唐錢を重んずるやうになり、和錢の品質の下落して行くにつれて、人々は皆唐錢を歡迎して、和錢を拒否し、果ては唐錢でなくては通用せぬことになつた。日本は朝鮮と違ひ儼然たる政治上の獨立國家であつたには相違ないが、滔々たる輸入超過、唐物崇拜の勢ひから、幣制自主といふことが出來ず、支那の貨幣が內地に通用し、朝廷の鑄錢司（造幣局）が立腐れとなつて、何時となく消滅してしまつたといふことは、何ともいひやうのない無慙なことであつた。

遣唐使停止以後に於ける密貿易

宇多天皇の寬平六年、菅原道眞の建白書が採用されて遣唐使が停止となつたのは、その主なる理由が、航路の難險と、僧中瓘の報告による晚唐の大亂とにあつたこと文面に現はれて居る通りであるが、それよりも深刻な理由が、滔々たる唐物の輸入超過と、唐錢の內地通用とにあつたこ

とは、遣唐使の停止と相前後して、對外貿易が嚴禁されて居ることによつて知られる。遣唐使の派遣がすでに無意義となり、且つ有害無益となりつゝあつたといふだけならば、何も一般の貿易までも嚴禁されるわけがない。それを遣唐使の停止に先つて嚴禁されたのは、儼然たる獨立國の體面を保つたまゝ、唐朝を主盟とするアジア大陸の封建的經濟ブロックの中に捲込まれて居た日本を救はうとされた大英斷に相違ない。

すでに支那・朝鮮・に對する一般の貿易が公に禁止されて見ると、そこに密貿易者の現はれるのは事の自然の成行である。この密貿易者が『海賊』の名で呼ばれ、平安朝の中期に至ると、西海・瀬戸内海・はこれら海賊の巣窟となつた。平安朝の中期以後、朝禁を犯して外國貿易を營んだものは、主として中國・四國・九州・地方の豪族であつたが、中には堂々たる朝貴紳縉にして、密貿易の庇護者であるものもあつた。薩摩の坊の津を私領とする攝家の如きがそれである。平安朝に於ける攝家の主なる收入が、坊の津に出入する海賊船から徴收する『唐物税』であつたことは確實な事實だ。

朝廷が自主外交・自主經濟・の原則を守り、建國以來の國是を恪遵して、中華政權を主盟とする大陸的經濟ブロックの中に捲込まれまいとして努力遊ばさるれば、遊ばさるゝほど經濟上の困難は來り迫るのであつた。これに反して武士階級は、單なる經濟階級であつたばかりでなく、一面民種的血統階級でもあつた爲に、中華政權の封冊をうけることの不埒を感ずる點で、皇室及び皇室をめぐる公卿階級ほど痛切では有り得なかつた。記・紀・の記述にも明かである如く、武士階級の主要分子は何といつても天孫御降臨の後、新たに招撫もしくは蕩平された隼人族であり、その後も『夷俘』といひ、『俘囚』といひ、續々新しい分子を加へつゝあつたには相違ないが、これら新附の兵員は多く南方から渡來した種族であつて、崑崙系の漢民族とは、その血統に於いても、文化に於いても、一脈の相通ずるものがあつたわけだ。殊に武士階級は平安朝以後、地方にその勢力を扶植し、密貿易船の大旦那となつて不正の富を擁し、歩一歩その權力の根を固めて行くのであつた。さうして皇室の御式微が來た。さうして武門政權の興隆が來た。平清盛が都を福原に遷し、瀬戸内海に築港したのは、明かに朝禁を犯して、宋との貿易を公營しようとしたもので、史を讀むものは鎌倉幕府の出現を俟つまでもなく、平安朝の末期、すでに同じ武門政權が福原に出現するに垂んとして居たことを見遁してはならない。

外貨の資援で增長した武門政權

源頼朝によつて鎌倉幕府が樹立される頃になると、外國貿易の朝禁はいつとはなく罷廢して、その利潤が武家の最も大きい收入の一つとなつて居た。平氏の鎭臺（實は主稅官）として對馬守に任ぜられて居た藤原親光は、平氏が西海に亡びた後、高麗王に迎へられて朝鮮に入り、かの地に食邑を給せられて安穩にその生を送つて居た。頼朝が親光を迎ふるに及び、高麗王は大船二艘に珍貨を滿載してこれを送還した。文治二年、頼朝の命をうけ、筑紫奉行として赴任した天野遠景は、鎭西の諸侯から『唐物稅』を徵して、鎌倉の財政に資して居る。しかし薩摩の坊の津には近衞家と頼朝とに絡む複雜な關係があつて、これを取立てることが出來なかつた。實朝が宋人・陳和卿を鎌倉に召下して大船を建造させ、由比ケ濱に泛べたこと、文永・弘安・兩度の外寇を西海に擊滅して、日本民族の爲に萬丈の光焰を吐いた北條時宗でさへ、銅錢を求める爲には、その後ひそかに商賈をかの國に通はせて居るところを見ても、わが國の武門政權なるものが、中華政權を主盟とする、大陸的經濟ブロックの出店であつた關係がよく分る。これを中華政權の側からいへば、元主・忽必烈こそは、驕威を驅つて無用の師を起したものだ。なぜかといへば、中華政權はこの時に及び、わざわざ日本に兵威を加へるまでもなく、唐・宋・以來の通商貿易で、いつの間にか日本を經濟的に搾取し得るやうになつて居たからだ。忽必烈は全く餘計なことをして倭寇の猛威を煽揚し　それが拒ぎきれず、遂に自家滅亡の重大な原因を作つて居るわけだ。

元寇兩度の役以後は倭寇の勢が猖獗を極めるやうになつた。清盛・頼朝・の對宋貿易は朝禁を犯したもので、國內的には不埒極まるものであつたが、國外的には平和の取引であつた。然るに元寇の役以後は、この貿易が二筋に岐れた。すなはちその一つは倭寇の劫掠であり、他の一つは鎌倉・室町・と續いて行はれた武門政權の屈辱外交である。これは何故かといふに、元寇の役後、北條氏がその論功行賞の當を失し、戰役善後策の途を誤つた爲に、武家が新補地頭と舊補地頭とに分れて鎬を削ることゝなつたからである。さうして、舊補地頭は大體に於いて、大覺寺統を擁立するに一致し、新補地頭は大體に於いて持明院統を擁立するに一致した。前者は吉野方であり、後者は京方である。前者はその地方政權としての財政の不如意から倭寇に趨り、後者は常に中央に在りて、大アジア經濟ブロックの主盟である中華政權に對し、尾を振り、耳を垂れて錢貨の支援

を求めた。瀬戸内海を巣窟とした海賊の中に、北畠師清だの、村上義弘だの、吉野方に因む姓名を名乗つて人心を收攬しようとするもの〻あつたのもその爲である。吉野方である菊池武光に擁せられた鎭西宮・懐良親王が、明の太祖の使節として入朝した萊州の知府・趙秩を肥後の征西府に抑留して京都に上ることを許さず、その日本を屬國扱ひにする書辭の無禮を難詰して追返したのも、皇室を戴く日本の傳統である自主外交からいへば當然のことであつた。

近代民族國家としての日本の興隆

室町政權は足利尊氏の時代から明主の鼻息を窺ひ、有らゆる美辭麗句を聯ねた書冊を天龍寺船に託して、錢貨の支援を得ようとした。義滿に至つては、臣と稱して明主に仕へ、日本國王の封冊をうけて尙ほ國恥國辱の何ものたるかを解せず、只管錢貨の融通をかの國に求めようとした。それにも拘らず、室町政權は義滿の死後、全くその財政に行詰り、諸大名の驚蹇を掣馭することが出來ず、無慙にその弱體を暴露して、日本を收拾することの出來ぬ爭亂の渦中に突落してしまつた。

この爭亂の渦中から日本を救ふべき新政權が威勢のよい產聲を揚げた。その新政權が、

（一）群雄を掣馭して、日本國を統一し、政權を皇室に奉還して、國體を王朝の昔に復し得る實力を具備するものであること。

（二）鑛業を奬勵し、貿易を統制し、支那の貨幣を內地から驅逐して、日本自體の幣制を確立し得る實力を有するものであること。

（三）事と次第とによりては、兵威を以て、大アジア經濟ブロックの主盟である支那及びその末梢である朝鮮に臨み、室町弱體政府が、かの國から受けて來た國辱文書を叩きかへすほどの實力を有するものであること。

この三つの資格を具備することは絕對の條件であつた。さうしてこの條件こそは敢て日本のみといはず、起上つた東西の近代民族國家に共通する三位一體的工作であつた。

日本には幸にして織田信長・豐臣秀吉・及び德川家康の三傑があつて、それ〴〵その得意とする役割を分擔し、立派に日本を近代民族國家として改組した。すなはち第一の仕事は信長と秀吉とでそのあらどなしをし、第二の仕事は秀吉の『大佛判』鑄造をその濫觴とし、家康が秀吉の殘務

を引ついでその大業を略成した。すなはち村上天皇の『乾元大寶』を最後の鑄造として、日本に全くその影を絶つた日本自體の貨幣が、大手を振つて國内に融通するやうになつた。これには戰國以來、西洋文明（南蠻文化・ラテン文化）の影響をうけて、頓に發達して來た鑛山事業と、一般經濟生活の進歩との與ること申すまでもない。第三の仕事は秀吉の大明經略を目的とする朝鮮への出兵がそれであつた。秀吉の朝鮮出兵は、戰役自體の目的からいつて成功といひ得なかつたが、内に諸大名の富と力とを剪裁し、外にアジアの封建ブロックに對し、日本が儼乎たる獨立國である實を示すことによつて、その近代民族國家工作の上に與へた效果は、頗る大きいものであつた。

家康の中央集權的封建制粉立は、信長・秀吉・兩雄の企畫した王政復古作業を二世紀半後らせたものだといふ批難もあるが、當時の日本は、直に國土を開放して、國民を西洋諸國との自由競爭に任せるには、その文化の程度がまだ餘りに幼稚であつた。それは日本から輸出する粗銅の中に、必ず多量の金の含まれて居ることが、大阪の住友の祖先によつて知られたのが天正十九年で、更にそれが政府の貿易統制によつて、幾分でも善處されたのが寛永年間であつたことによつても知られる。しかも粗銀の中に必然金の含まれて居るといふことは明治維新の後までも知られず、安政開國の後は金を含んだ一朱銀が、貿易の形式で滔々として海外に流出して居た。さうして西洋人の手からは、金を析出したメキシコードルラルが生絲・茶・の代償として支拂はれて居た。かやうな幼稚な狀態で日本の國土を開放し、西洋人と自由競爭をさせるといふことは全く思ひも及ばぬことであつた。德川氏が家康以降三代の苦心經略によつて貿易統制の組織を確立し、凡そ二百五十年が程の間に、國民を導いてこれに國内の資本主義的運營の制度及び組織を立てさせ、對外自由競爭に堪へ得る訓練と、準備とを與へて與れたといふことは寧ろ大に感謝してよいことだ。殊に特筆してよいことはこの德川氏約二百五十年の半鎖國時代は、西洋に機械文明とそれに基調する工業資本主義經濟の勃興した時代で、日本人は長崎のオランダ商館を通じ、晩くとも二・三・十年の後、早きは三・五・年の後にしてかの國に於ける最新の事情を知ることが出來て居る。さうして明治維新と殆ど同時に、商工資本主義經濟確立の爲に起上つて居る。從つて安政五年、英・佛・米・露・蘭・の五箇國が、支那及び支那人を料理して來たと同じ手法で、日本及び日本人の上に押冠せた不平等屈辱條約の撤廢、すなはち關税及び裁判の自主權恢宏がこの國家、この民族の興廢を決

する先決問題であるといふことに氣付くのも、殆どそれと同時であつた。

歐・米・資本主義インタアナショナルの東洋諸民族殘害

イギリスに工業資本主義の興つた初め、イギリス人は歐洲大陸はもちろん、アジア大陸も、兩米大陸も、アフリカ大陸も、濠洲も、全世界凡そ二十幾億人類の鄕土を擧げて、盡くその商品の市場として獨占し、併せてその工業原料の生産地として留保しようともくろんで居た。ところが當てごとゝ何やらの譬へにもれず、このもくろみは完全に向ふから外れてしまつた。工業はフランスにも興つた。北米合衆國にも興つた。後れ馳せではあつたが、ドイツにも、日本にも、イタリアにもそれが起り、その植民地の中ではカナダ・濠洲・がまだ獨立こそして居ぬが、工業資本主義の發達に伴ふ利害の對立から、殆ど獨立國と同じ性質のものとなりかけて居る。

かく世界各國が競立つてイギリスに追隨し、工業資本主義國家としての體制を整へた中に、日本が有色人中唯一の近代民族國家として神速に、しかも鮮やかに、その封建經濟の舊套をかなぐり棄て、農業原料國家としての殼を破つて、國際經濟戰のアレナに跳出したといふことは、たしかに世界の驚異であつたに相違ない。世界の學者で工業資本主義國家としての日本の目覺しい發展を、地下に瞠目して見つめて居るもの〻多からう中に、イギリスに在りて資本主義といふ老木に寄生し、蘭のやうに妖艶な花を咲かせたカアル・マルクスの如き、その尤なるもの〻一であらう。なぜかといへば、かれはイギリスといふ宿主から養分の支給をうけて居た關係上、物事を何でも國際的にもしくは社會的に觀る癖から脱却することが出來なかつたからだ。マルクスは將來、世界各國が資本家と勞働者との國際的對立によつて一齊に社會革命を遂げ、その上に理想的な美しい國際社會の建設される日の來るであらうことは豫言したが、その前に資本主義先進國と、資本主義後進國と、資本主義落伍國と、この三者の複雜な利害の錯綜から、國際戰國時代が出現し、それが更に幾段階を經て世界を幾つかの經濟ブロックに分割する新しい國際秩序の時代に到達するであらうといふことは見透すことが出來なかつた。

非軍國主義の擬裝に蔽はれた資本主義先進國の殘忍性

イギリスの資本家達は初めその資本主義的搾取の方法による世界統一の效果を絶對に信じ、陸

海軍の力にのみ倚賴する各國の帝國主義を極端に嗤笑して、イギリスには極めて少許の精鋭なる海軍と、健全なる中産階級（資本家）とさへあれば、それで世界を統一し、二十幾億人類の上に號令するに十分であると豪語して居た。しかるに幾もなく同じ資本主義國家としてフランスが興隆し、合衆國が獨立し、植民地に於ける競爭が日一日と激化して行つて、何事も初めに考へて居たやうには行かぬので、かれらは一齊に『土人と土人との戰』といふ一種のロボット戰を案出した。このロボット戰は初め北米大陸に於いて試みられ、ついでインドに、支那に、アフリカに、メキシコに、ブラジルに、最近では中米諸國にまで、世界到るところの後進原料國に適用されて、本國は殆ど一劍に血ぬることなくして、どし〳〵有色人種を殘害し、その鄕土を侵略してゆくことが出來るのであつた。

尙ほこのロボット戰の外に、歐・米・資本主義先進國が、有色人種を尅殺し、その鄕土を殘害してゆく方法には如何にも天災らしい外貌をそなへた飢饉戰・疫病戰・洪水戰・などの奸惡な、殘忍な、戰慄すべき戰術もあつた。殊にイギリスが、フランスと並押しに進んでその鋒をインド・支那・に向けた時には、前に本國でアイルランド及びアイルランド人の上に試みて、效果百パアセントといふ折紙附の不平等關稅戰を眞向に振翳して突進して來た。かれらは先づ兵力で支那を叩きのめして置き、猿が蟹の足を一本々々捲取るやうにして、支那から港灣を割き、港灣を制する島嶼を奪ひ、そこに司法權も行政權も及ばぬ租界を設定して四百餘州を永遠の原料生產地として留保し、四億の民衆を劫久の消費者として搾取してゆくのであつた。しかもかれらがさうして置いて、支那及び支那人の上に押付けたものは、恐ろしい阿片の毒であつた。

かれらはさうして支那を完全に料理し了るか了らぬかに、相前後して日本に押出して來た。徳川氏は秀吉外征の後を承けて、明朝から清朝への政權移動には、怠らず眼を光らして居た。鄭芝龍並に鄭成功の前後十幾回に亙る請援には色を動かさなかつた幕府も、清の太宗が滿洲の精鋭を率ゐて朝鮮に入つた時には、自發的にかの國に移牒して救援の師を出さうかと申入れたほどだ。しかしその清朝も、アジア封建ブロックに盟主としての權威を保持し、日本に對し、大國としての睨みを利かせて居たのは高宗（乾隆帝）一代で、幾もなくラテン系西洋人（南蠻人）と交替に東洋に押出して來たチュウトン系西洋人の爲に、手足を捲取られた蟹のやうなものになつてしまつた。

この時から日本の對外關係はアジア封建ブロックの主盟である支那でなく、資本主義インタアナショナルの主盟であるイギリスとなつたわけだ。

明治維新と對歐・米・不平等屈辱條約の改正

かれらが支那から日本に押かけて來た時には、無論、日本を支那と同じ棍棒でいためつけ、同じ庖刀で料理する積りであつた。それはかれらの日本に押し冠せた安政五年の修交通商條約なるものが、大體に於いて支那を料理した手法と同じものであつたことでよく分る。たゞ支那の租界のやうに、外人居留地の行政權と司法權との全てを擧げて、かれらに委ねて了はなかつたことはせめてもの仕合せであつた。

かれらが何故日本を支那と同じ手法で料理することが出來なかつたか。それには種々の理由もあるが、その最も主なるものの一として、日本が德川氏二百五十年の統制貿易下に於いて、支那の全く受付けなかつたチュウトン系西洋文化を熱心に研究し、すでにその一部を採容れて、產業・經濟・の諸機構を整へ、何時でも世界の大勢に應じて、西洋諸國と對等の通商貿易を營み得る素地を作つて居たことを擧げなければなるまい。

前にも述べた通り、明治維新は德川氏二百五十年間の統制貿易下に於いて、內に充實した商業資本主義的經濟力が外から押寄せて來た歐・米・先進國の壓迫によつて、轟然たる大音響と共に封建制度の殼を吹飛した現象であつて、日本はその改革のまだ完成するかせぬかに、早くも安政五年の不平等屈辱條約改正に乘出して居る。明治四年岩倉大使一行を歐・米・の訂盟各國に差遣したのがその手初めである。日本は明治維新の改革を成就すると同時に、不平等屈辱條約を改締することが近代民族國家として、世界に對し獨立國の體面を整へる唯一の途である所以を識り、西南戰役の如き夥しい犧牲を拂つてまでも、その目的を完成する爲に驀進して居る。ところが支那はどうだ。日本が日清戰役からかけて數年の間に、達成することの出來た條約改正の事を未だに棚の上に上げて置いて、ひたすら歐・米・に縋り、その資援を得て日本を憊死させるまで戰ひぬかうとかゝつて居る。

日本は日清戰役から日露戰役に至る十箇年間に、訂盟十六箇國に對する不平等屈辱條約改訂の目的を達成し、且つ商業資本主義國家から工業資本主義國家に向つて轉換する一切の準備を完了

した。さうして日露戰役後は、一廉の立派な工業資本主義國家として世界市場に押出して行くのであつた。

第一次世界戰役から第二次世界戰役へ

かゝる間にも歐洲では日本の明治維新より三年も後れて聯邦統一を成し遂げた後進國ドイツが非常な努力と精進とを以て、英・米・佛・先進國の發展に追縋らうとし、そのあまりにも性急短促であつたアフリカ及び大洋洲に於ける植民地割込運動が、第一次世界大戰役を破裂させた。第一次世界大戰役はイギリスを主盟とする資本主義インタアナショナルの行つた最後の點呼であり、その點呼が再び繰返され得るものでないことが、國際聯盟（二十世紀の資本主義神聖同盟）の弱點として暴露された時に、第二次世界大戰役が來た。

第一次世界大戰役と、第二次世界大戰役との間に、日本の工業資本主義は更に一段の跳躍的進歩を遂げ、その商品はインド洋を越え、地中海を越えて、イギリス本國の市場にさへそのスマアトな姿を現はすに至つた。イギリスを主盟とする歐・米・先進國は必死となつて關稅の障壁を築き日本の產業的發展を阻止しようとしたところに滿洲事變が起り、ついで支那事變が發破した。

支那事變こそは正しく第二次世界大戰役の前奏曲であつた。世界は今や明かに國際的戰國時代に入つた。この渾沌たる國際的戰國時代の後に來るものは果して何か。それが恐らく世界を幾つかのブロック經濟に分割する新しい國際新秩序の時代であらうことは、何人にも大して異論のなささうなことだ。

滿洲帝國は世界のこの大勢に順應して、率先大アジア聯盟結成の素地を作る爲に起上つたものだ。その創業を扶拔し輔翼したものは、いふまでもなく日本帝國である。二千幾百年の悠久な歷史を通じ、その中世期にありては中華政權を主盟とする全アジアの封建的ブロックに對し、その近世期にありては英・米・佛・三大先進國を主盟とする資本主義インタアナショナルに對し、毅然として自主外交竝に自主經濟の大方針を堅持し、よくその獨立國家としての體面と實質とを維持して來た日本帝國である。この日本帝國こそは實に大アジア北種の中の代表的な近代民族國家である。日本建國の基礎理念及びその發展の歷史は、やがて滿洲建國の基礎理念であり、且つその將來への大方針でなければならぬ。日本が若し、中世期アジアを通じて行はれた中華政權の大帝國

主義に倣ひ、武斷專制、以て大アジア聯盟の構成分子である南北諸民族の上に臨まうとするならば、それは暴を以て暴に代へるだけのものだ。日本が若し英・米・佛・三大先進國の資本主義的侵略に學び、その經濟的搾取の一手を以て、大アジア十幾億の民生を打つて一圓とする新しい經濟ブロックの上に君臨しようとするならば、それは惡を以て惡に報いるだけのものだ。日本の野心が若しそこにあるならば、日本は何もその國運を賭してまでも滿洲建國の爲に、現に見る如き夥しい犧牲を拂つてゆく必要はないわけだ。二千幾百年の光輝ある日本歷史が、われ〳〵の爲に示唆し、啓沃するところは、極めて偉大且つ宏遠である。

東亞聯盟結成の民種的・文化的・熔礦爐としての大滿洲

——昭和十四年九月二十八日より四日間奉天にて放送——

第一夜（九月二十八日）

初めて滿洲に御目見えする天外風來の一野乘子

私は只今御係りの方から御紹介のありました白柳であります。このたび、滿鐵及び滿洲帝國協和會の熱心なる御招請により、昨日（昭和十四年九月二十七日—『秋夕』祭の朝）初めて滿洲の疆（さかひ）を踏み、豫て日本民族の核心をなす原日本人の發祥地として、久しく憧れて居りました雄大な大陸の山河に接し、又、私共の先輩であるこの國土の草分け達が、幾多の尊き犧牲によつて築上げた、滿洲帝國勃建の基礎工事とも申すべき鐵道と、その鐵道を脊髓とも肋骨ともして、僅々三十年の

間に世界に類例のない跳躍的進歩を遂げました驚嘆すべきこの國の盛況を眼のあたりに目擊致し、まして、その生々しい印象と感激とのまざ〳〵と瞼の裡から消え去らぬ間に、この文明の利器を通じて皆様に初の御目見えをすることの出來ましたことは、私のこの上もなき光榮とするところであります。まことにこれまで日本國からは幾多の名流・大家・が皆様の前に現はれて、それ〴〵の方面から有益なお話のあつたことと存じますが、私のやうな地位もなく、肩書もなく、文筆人としては何れの團體にも、又、何れの機關にも全然關係のない、著作一本槍の微々たる町裏の一歷史家が、かやうな招請に預りましたことは、その例が尠からうと存じます。これと申すも、この國に於ける代表的諸機關の御理解の外に、一般國民諸君の根强き御支援のあつたことと存じます。この機會に厚く御禮を申上げて置きます。これから本題に入つて、お話をすゝめて參ることと致します。

正月の燒餅を聯想させる大アジアの雄大な陸屋根

アジア洲の地形を物にたとへて申しますと、ちやうど日本國の最も著しい年中行事であるお正月の餅を火に焙つた場合を聯想させられます。火が廻ると中央から水分が吹上げ、兩側が平行した山脈の形になり、吹上げた水分が斂(おさ)まると、やがてそこに滑(なめら)かな平地が出來ます。この平地が、東の方から西の方へかけて、ゴビの沙漠・タクラマカンの沙漠・パミイル高原・と横亙(わうくわう)して、中央アジアの平野に連つて居ります。この廣大な沙漠こそ、敢てアジア大陸とのみいはず、舊世界の雄大な陸屋根に當つて居るのであります。まことにこの陸屋根の雄大さから申しますと、支那大陸も、前インドも、後インドも、乃至はエウロッパも、大陸ではなくして、一種の半島に過ぎないのであります。エウロッパ大陸――いや、エウロッパ半島を南北に區劃し、ラテン文化とチュウトン文化とをはつきり分けて居りますアルプス山脈は、『アルパイン』といふことばが高山・高地・の代名詞として世界に通用して居りますことによつても知られます如く、白人・歐洲を中心としたこれまでの地理學的常識によりますと、舊世界の屋根といふことになつて居るのでありました。ところが、このアルプス山脈も、これをアジアの陸屋根を緣(ふち)づけて居る、二重・三重・の大棟にくらべて見ますと、摩天樓の隣りにうづくまる、町屋の物干臺ぐらゐにしか當つて居ぬのであります。大アジアの秩序を再建しようとして乘出した日本民族の今日の意氣・精神・から、昨日のこと

を考へて見ますると、私共が『アルパイン・フラワア』だとか、『アルパイン・シュース』だとか、『アルパイン・ストック』だとか、『日本アルプス』だとか、『九州アルプス』だとかいふことばを平氣で使用して來たことが、この大アジアの陸屋根の東の切目にあつて、南・北・兩文化の緩衝地帶をなして居ります友邦・滿洲帝國の盟友諸君に對して、何とも申譯のないやうな氣がしてならぬのであります。

陸屋根の南の縁と北の縁

只今、私は、大アジアの陸屋根をお正月の燒餅にたとへて申上げましたが、段々細かに見て參りますと、その構造はなか〳〵複雜でありましてたゞお正月の燒餅とばかりでは説明が足りませぬ。この陸屋根の北の面を緣づけて居る山脈を、西の方から東の方へ順次に擧げて參りますと、天山・アルタイ・サヤン・ヤブロノイ・興安嶺・と概して一線に走つて居るのであります。但だヤブロノイと興安嶺とが、一は東北へ、他は東南へ、叉狀に岐れてこの滿洲の曠野を包んで居るのでありますが、陸屋根の南の面を緣づけて居る山脈にくらべると、頗る單純であります。

大アジアの陸屋根の南面を緣づけて居る山脈は、頗る複雜で、二重にも三重にも岐れて居ります。これを西の方から東の方へと擧げて參りますと、中央アジアとアフガニスタンとの間に、ヒンズウクシ山脈が横亙し、それが東してパミイル高原の南を緣づけて居るカラコルム山脈に連り、更に有名な崑崙山脈に連つて、支那本土と青海及び西藏高原とを區劃する黃河・揚子江・の水源地帶をなして居ります。だが陸屋根の南の面を緣づけて居る墻壁は、この一線に止まりません。崑崙山脈の南に大西藏高原が横はり、その南にトランスヒマラヤ山脈、更にその南にブラマトフ河の上流サンポー河の河盂が開け、更にその南にヒマラヤ山脈が横はるといふ二重・三重・の嚴重な構へであります。

血統と文化との上て截然と岐れたアジアの南北兩種

この雄大莊嚴なる陸屋根の構造によつて、大アジア洲は、人間の血統上、生活樣式上、截然と南と北とに岐れて居るのであります。滿洲の土を踏んで一日、二十年も三十年もこの土地の開拓の爲に奮鬪もし勉强もして居られる皆樣の前で、甚だ生意氣なことを申上げるやうでありますが、

この大アジア洲に住む人類の血統と文化（生活樣式）とは、南と北との間に可なり根本的な相違があり、これを一概にアジア人とか、黄色人とか、五族とか、いふことばを以て、簡單に片付けることが出來ぬのであります。この大アジア洲南北兩種の血統と文化とに正しい理解を持つといふことは、やがて五族協和・王道樂土・建設の基礎工作の一端でありまして、政治組織とか、經濟制度とかいふものの地盤を決定する上に、最も重要な條件にあたるのであります。政治組織の檢討、經濟制度の研究も、もちろん大切なことには相違ありませぬが、人間の血統及びその生活樣式に基調せざる建築工事は、砂上の樓閣以外の何ものでも有り得ないと考へるのであります。

大アジアの北の種族、これをツラン系（又の名、ウラル・アルタイ系）と呼び、大アジアの南の種族、これを崑崙系と稱へます。ツラン系はこれを大別して五種といたします。すなはち

一　蒙古人
二　ツングウス人
三　トルコ人
四　フイン・ウグリア人
五　サモエード人

がこれであります。又、崑崙系はこれを幾種に分類するのが正しいのでありませうか。これは恐らくまだツラン系の如く學者の研究の手が十分に行屆いて居ないのではないかと思はれます。しかし、この南種の中で

一　漢民族
二　西藏族
三　ドラヴイダ族
四　苗族

等がその代表的のものであることには疑ひを容れる餘地がないやうであります。甘肅・四川・雲南・の山の中に住んで居ります『羅々』の如き種族は、これを苗の一種と見るべきでありませうか。それとも崑崙系の中の一つの獨立した枝と見てよいのでありませうか。ビルマ・マレイ・シヤム・カムボヂア・ラオス・安南・東京（トンキン）・とはびこつて居りますモン・クメール人、その他多くのインド・チヤイナ族は、どれを獨立した民種の大枝、又、どれを派生した民種の小枝と見てよいのであり

ませうか。凡そこれらのことは、追々專門學者の意見も伺つて參りたいとも存じて居りますが、今回の滿洲國訪問を機會とし、それ〴〵その方面の權威者にお目にかゝつて、研究の手ほどきをうけ、今後の聯絡をもとるやうにして戴きたいと考へて居るのであります。

陸屋根の北方平野に於けるツラン系五族

さて、前に擧げました五種のツラン系民種は、天山・アルタイ山系から北の方に蕃衍して居りますアジア人の大枝でありまして、この大枝から更に多くの小枝が岐れ咲いて居るのであります。例へばツングウスと申すのは、一つの大枝でありますが、原朝鮮人とか、原日本人（天孫民種）とか、原滿洲人とか呼ばれるものはその小枝であります。御當地では常識的に支那本土から滿洲に流込んで居りまする漢人を滿洲人と呼びならはして居るやうでありますが、これは如何にも紛はしい呼方で、何とか工夫して、もつと、はつきりとさせねばならぬ呼名と存じます。漢人と原滿洲人とは血統の上から申しましても、生活樣式の上から申しましても、全然別個のものでありまして、これは截然と區別されてよいものと信じます。この問題はこの講演の進むにつれてはつきりと皆樣に御諒解願へることと信じて疑ひませぬ。又、蒙古人といふのはツラン系の一つの大枝でありますが、ハルハとか、ブリヤアトとかウーリヤンハイとか呼ばれるものはその小枝であります。かやうに五つの大枝は、それぞれ幾つもの小枝に岐れて居るのでありますが、凡そこの五つの大枝に屬しまするツラン系北方民種は、それぞれどんなに末梢の小枝でありましても、又、それがどんな地方に分布されて居りましても、アジアの北種、すなはちツラン系としての特徵ある生活樣式（文化）を營んで居るのであります。さて然らばこの五つのツラン系民種の、元の分布狀態はどうであつたかと申しますと、先づツングウス族が、東部シベリア、詳しく申しますと、イエニセイ河以東、もつと詳しく申しますと、大イエニセイ河に合流する上・中・下・三つのツングウスカ河の流域を基點として、それから東、沿海州・サガレン州・アムウル州・滿洲・に亙る廣汎な地域に分布され、その尖端が山海關を越えて北支那に入り、只今の河北・山東・山西・地方に蕃衍して、支那の古代史と頗る密接な關係を持つて居たことは近頃では何人も認める事實であります。蒙古族は內蒙古・外蒙古・から、アルタイ・天山・新疆・西藏・方面にかけて蕃衍し、中央アジアの草原でトルコ族と接觸して居りました。トルコ族の故鄕はもと中央アジア、すなはちトルキスタン

地方でありましたが、その東したものは、蒙古族と頗る複雜な關係を保つて古代支那の一大脅威となつて居ること、皆樣の夙に御存じのことであります。夏・殷・以後、周末戰國にかけて匈奴と呼ばれたのが、トルコ人といふことになつて居ります。東晉の末、南北朝の頃柔然と呼ばれ、隋に突厥、唐に回紇として、絶えず漢民族の患ひとなつて居ります。又、このトルコ族の西したものが、裏海・黑海・のほとりを經て、追々に地中海の東部に進出し、キリスト敎徒の聖地として憧れるパレスチナに占據して、セム族・ハム族・を壓迫し、東はコンスタンチノープルから、西はシブル・アル・タルクから、エウロッパ大陸を疾風の如く席卷しようとして、白人諸國を震撼させたことは、これまた皆樣夙に御存じの通りであります。次にフイン・ウグリア族、この中、フイン族・ラップ族・はその名の示す如く大體フインランド及びラプランドがその故郷でありまして、その尖端は、バルト海をめぐつて深く北エウロッパの境に入り、泉水の飛石のやうに、スカンヂナヴイア半島の內部にまでも分布されて居るのであります。又ウグリア族は東部歐洲のフンガリア・ブルガリア・ルウマニア・から、ボヘミアの名で呼ばれたチエコ・スラウヴアキアの地にかけて、深く喰込んで居る東方民族でありまして、ドイツがまだ東フランク王國の名で呼ばれて居ました頃、その皇帝・アルヌルフを扶け、西フランク王國を席卷し、四たびまでもパリを蹂躙した餘威を驅つて、怒濤の如く國境に押寄せて來たノルマン人を擊退して、ドイツ人の爲に何ほどかその血統の純潔を保たせたマジヤアル人こそは、このウグリア族の代表的なものは、アジアとエウロッパとの境に連亙す。次はサモエードであります。この民種の代表的なものの一つでありまして、北極圈に住むエスキモー人であります。元の分布地は、イエニセイ河の河口地方から、ハタン河の河口地方に亙るツンドラ地帶で、ラップ人がこの地方をサメートナムと呼んだところから、サモエードの名が起つたといふ說が一番たしかなやうであります。

かやうにツラン系五族の分布は、頗る廣汎に亙り、アジアの——いや舊世界の大屋根の中、南の面を緣づけて居るヒンズウクシ・カラコルム・崑崙・山系を境としてゴビ・タクラマカンの二大沙漠を包抱し、中央アジアの大草原からウラル・アルタイ以東にひろがつて滿洲・沿海州・サガレン州・で東海に盡きて居ります。茫々たるシベリアの平原、北氷洋に面してさゝやかな苔の外には、木も草も生えぬといふツンドラ地帶が悉くわれ〳〵と同じ血統及び文化を持つツラン人の居住區域になつて居ります。又、トルコ族は南方地中海の方面から、ウグリア族は近東・フンガリア・ブ

ルガリア・の境から、フイン族・ラップ族・は、フインランド・ラップランド・から、バルト海をめぐつて、スカンヂナヴイア半島にまでも深く喰込んで居るのであります。

滿洲に於けるツングウス・蒙古・及びトルコ族の血統並に文化

かやうにツラン族は、西はバルト海の周圍からスカンヂナヴイア半島に喰込み、東は黃海・日本海・オホーツク海・ベーリング海・を極め、舊世界の殆ど大部分を占めて居るのでありますが、東に分布したものは東に居坐つたまゝ、西に分布されたものは西に居坐つたまゝかと申しますに、決してさうではありませぬ。民種と民種との存立競爭、大自然の脅威、その他の事情に促されまして、極西に分布されたものが、茫々たる中央アジアの曠野を横斷して極東に移動し、或は陸屋根の沙漠地帶に分布されたものが、南方に移動して支那の中原を脅かし、或は長白山の北、吉林・間島・通化・牡丹江・一圓の地帶に占據したものが海を渡つて日本聯島に移動するといふやうなことが、引きりなしに行はれて居た時代もあるのであります。

例へば、この滿洲の曠野に致しましても、それが、ツングウス族・蒙古族・トルコ族・この三種の押しつ押されつした存立競爭の庭だけであつたかと申しますに、決してさやうではありませぬ。これらの民種の押しつ押されつした渦卷きの中へ、西エウロツパの境から中央アジアを越えて追々徙遷して參りましたウグリア族もしくはオスマン・トルコのやうなものが、喰込んで、たしかに何程か、白人の血統と文化とを傳へて居ると考へられるのであります。これは言語その他の關係から、今日のところツラン系五種の中には加へられて居りませぬが、スラヴ人・ユダア人・のやうな近東民族もそれにつれて移動して來たでありませう。さうしてその血統的・文化的・影響は、吉林・間島・邊から日本海を越えて、日本聯島にまでも及んで居る形跡が、たしかに窺はれるのであります。

シベリアの校倉式建築は北歐のスエーデンまで喰込んで居る

例へば家屋の如きものに致しましても、今の日本人は歐洲航路の關係上、シンガポールに上陸して、かしこの博物館を一覽すると、もうすつかり參つてしまつて、誰もがすべて日本人は南洋諸島から徙遷して來たものだときめてしまひたがるのでありますが、滿洲に來て段々奥深く探檢

の歩を進めて見ますると、却々さう簡單には參らぬことが多い。滿洲・ツングウスのオロチョン族、シベリア・ツングウスのオロチョン族などによつて營まれる丸太を横組みにした家屋の構造、或は木の根を柱にしてその上に床を張るといふやうな仕掛けは、たしかに滿洲系統のものであります。奈良にある正倉院の構造、すなはち校倉式の家屋は、たしかに南洋系統のものでなく、滿洲・シベリア・系統のものであるやうに考へられます。又、屋根の葺方なども、現に見る日本の農家の構造と殆どそつくりそのまゝのものが近東諸國——例へばチェコ・スラウヴアキヤ（ボヘミアとか、ルウマニアとか呼ばれる地方）の田舍に見出されまして、必ずしも南洋ばかりがあの藁葺屋根の本家本元ではないのであります。フイン人・ラップ人・が泉水の飛石のやうに分布されて居るスエーデンの田舍に參りますと、農家の藁葺屋根の上に日本の千木鰹木に似たものを載せた風景さへも見出されるのであります。かく申せばとて、私は、日本民族の血統及び文化の上から、南洋諸民種の影響を全然抹殺し去らうとするものではありませぬ。日本民族は世界に比類のない廣汎にして多種多樣な血統と文化との包容者であります。そこがわれ〳〵日本民族の力強いところであり、又、將來性のあるところであります。

フイン・ウグリア族の深く喰込んで居りまするエウロッパの東部、すなはちチェコ・スラウヴアキア・フンガリア・ブルガリア・ルウマニア・地方には、世界稀に見る旅行好きな漂浪性を持つた民種が布置されて居りまして、それが世界の涯から涯へ、その特異の風俗・習慣・を移動して廻つて居ります。例へばジプシイの如きがその一例であります。

日本に於けるジプシイの足跡

ジプシイはたしかに、中央アジアを經てこの滿洲にも來て居たと私は考へてゐます。なぜかと申しますと、韃靼人・渤海人・の裏日本へ向けての集團的移住が最も盛んであつた奈良朝時代から平安朝時代にかけ、古代史に絶えてその姿を見せなかつた『傀儡子』なる旅藝人の群團が韃靼馬と共に突如としてその姿を現はし、その變つたエキゾチックな風俗がひどく公卿階級の興味をそそり、大江匡房が例の素晴しい漢文で『傀儡子記』といふものを綴つて居るのであります。

明晩は日本の舞踏藝術の上に著しい痕跡をのこした傀儡子なるものの正體が、ジプシイであつたといふ私の觀察とともに、その動かぬ證據を擧げてお話をすゝめたいと存じます。但し明晩は

放送局の番組の御都合で今晩よりも約一時間早く七時三十分から講義を始めます故、どうぞそのお積りで、折角御聽取りを願ひたいと存じます。

第二夜（九月二十九日）

手品・曲藝・舞踊・三部曲の旅藝人

それでは昨晩に引きつゞき、大江匡房の『傀儡子記』を本として、かれらくぐつなるものの風俗・習慣・が、どんなにジプシイのそれとよく似たものであつたかといふ考察から、お話をすゝめて參りたいと存じます。

大江匡房はその『傀儡子記』の書出しで、先づ『傀儡子は定居なく、常家なし。穹廬氈張、水草を逐つて移徙す、頗る北狄の俗に類す』と喝破して居ります。穹廬とは、その弓形の屋根を持つた小屋、日本で申せば火燈口の屋根を持つた小屋、氈張とは、しかもそれがもうせんで張つてあるとの意味でありませう。

これは皆樣映畫などを介してよく御存じの、ジプシイが馬に曳かせて旅から旅へとさすらひ歩く小屋に違ひありませぬ。一體、ジプシイの藝といふものは概して三部に分れ、舞踊・手品・曲藝・の中、何でも御好み次第といふのでありますが、奈良朝時代から平安朝時代にかけ、日本にその姿を現はして居ります傀儡子も三部曲の旅藝人でありました。大江匡房の『傀儡子記』は更に續けて『男は卽ち皆弓馬を使ひ、以て狩獵を事とす。或は隻劍七・九・を弄び、或は木人を舞はし、桃梗を鬪はし（桃梗といふのは角力取りの人形であらうと存じます）、能く生人の態をなす。殆ど魚龍曼延の戲れに近し』と申して居ります。これは曲藝の中の人形つかひを申したものでありませう。次に『沙石を變じて金と爲し、草木を化して鳥獸となす』とあるのは手品でありませう。又、『女は卽ち愁眉、啼粧、折腰、步齲、齒笑を爲し、朱を施し、粉を備へ、倡歌淫樂、以て妖媚を求め』とあるのは、明かにジプシイ・ダンスともボヘミアン・ダンスともいふべき類のものでありませう。そのわけは原日本人には白い齒を見せて笑ひながら踊り、踊りながら觀客に媚を賣るといふ手は元來なかつたやうであります。日本元來の舞踊は、シャアマンの巫女が、鉦だの太鼓だのに合せて、神がゝりしたもののやうに踊り狂ふ、あれに類したものではなかつたかと思はれ

ます。

現代に痕跡をとゞめるジプシイ・ダンス

日本では花柳の方にも、藤間の方にも、傀儡子といふ曲がありますが、この曲に限らず、あの豆太鼓の柄のないやうな樂器、タムバリンと申しますか、あの特徴のある樂器を持つて踊りぬくのは、たしかにジプシイ・ダンスから傳はつたものと考へられます。本日、撫順炭坑を見學に參りました途中、滿鐵の方から、ハルビン邊の露人がジプシイのことを、ツイガンと申して居るやうに伺ひましたが、そのツイガンの古く日本に參つて居りましたことはたしかであります。同じ『傀儡子記』の中に、『東國は美濃・遠江・の黨を豪貴と爲し、山陽は播州（播磨）、山陰は馬州（但馬）の土黨これに次ぎ、西海の黨は下たり』とあります。三河の小酒井神樂とか、三河萬歳とかいふものが、この傀儡子の一部の土著して、日本民族の中に融込んだものではありますまいか。

私は遠江のものでありますが、遠江の西部、三河に接した地方には、素人芝居の振付を世襲の家業とするものが、私の幼少の頃まで殘つて居りました。又、近鄕各社の祭禮には、必ず三河の小酒井から神樂をよぶのでありましたが、これが馬にこそ曳かせませぬが、ジプシイのテントそのまゝの屋根――穹廬氈張の屋根を備へた大きい屋臺を擔いで參りまして、その穹廬式の屋根の下に舞踊・手品・曲藝・この三部曲の小道具が秩序整然と藏つてあるのが、頗る興味深く感じられたものでありました。又、このジプシイの一部の民族的に融けきれなかつたものが『山窩』として殘つたのではないかといふことも考へて居ります。

『散樂』卽ち『猿樂』

支那で『散樂』と申しましたのが、日本の『傀儡子』と同じものに當るのではありますまいか。散樂はやはりツラン系の中のウグリア族とかトルコ族とかいつて、エウロッパの東部に深く喰込んでゐた種族が、アジアの陸屋根を經て、北支那に傳へたものではないかと考へられるのであります。支那の散樂といふことばが日本に來て『猿樂』となり、公卿階級――すなはち貴族の間に持て囃されました。この猿樂の中から後に『能』が分離し、『能』が更に發展して歌舞伎となりました。これを見ても、猿樂が幾つもの部曲から成立つて居たことがよく分ります。

公卿　すなはち原日本人の血統を傳へた貴族階級は、大陸から散樂が渡つて來ると、直にそれを採容れて、猿樂とし、『能』として樂んだのでありますが、武士、すなはち大隅・日向・の隼人族を主要構成分子とする武士階級は、『田樂』の方が好きであつて、容易に猿樂の趣味には寄付けなかつた。これは申すまでもなく、隼人とか、熊襲とかいふものが南方系統の種族であつて、米の値付竝にその收獲に關係のある野田踊りの方を喜んだ。もちろん田樂は出陣祝・凱旋祝・などにも關係があつたでありませう。とにかく南方から海を渡つて來た民種は、猿樂よりも田樂の方を喜んだものに相違ありますまい。

天孫御降臨以前の日本聯島には、南洋（インドネシア）方面から、幾種もの大洋人が渡來して、九州・四國・東海・の沿岸各地方に、それ〴〵の生活樣式を振付けて居りましたやうに、朝鮮半島にも高句麗・百濟・新羅・の三韓が興ります以前には、その南端、すなはち今の慶尙南道から全羅南道附近にかけ、黑潮の關係でやはり南方渡來の民族が占據して居たものであります。今の全羅南道地方に居たのを馬韓人といひ、慶尙南道地方に居たのを弁韓人・辰韓人・と呼んだものでありますが、その中、弁韓人・辰韓人・は、チャズに合せて、手拍子、足拍子、面白く、タンゴも踊れば、タップダンスもやるといふわけであつたらしい。これは北種の好んだジプシイ・ダンスとは全くその性質を異にして居たもののやうに思はれます。現に『魏志』は、馬韓人の舞踊のさまを敍して、『其舞ふや、數十人俱に起つて相隨ひ、地を踏んで低帛す。手足相應じ、節奏、鐸舞に似ること』とあり』と述べて居ます。これで馬韓人及び弁・辰・韓人が熱帶地方から渡來した民種で、その嗜んだ舞踊が北種の散樂と全くその系統を異にするものであつたことがよく分ります。

私はこのたび滿洲に參ります前に、脚固めの意味で九州に旅行し、豫て心の中に描いて居りました宇佐八幡の地形を實地に踏査し、その隼人族との關係をしらべて參りました。宇佐八幡の神體についてもいろ〳〵と考へさせられることが多かつたのでありますが、それはこゝでは申し上げますまい。たゞ宇佐八幡の鎭坐まします國東半島と豐前の大平野（碩田）とをくゝる狹隘の地が、大隅・日向・の隼人族に對する究竟の要害であつたといふ私の考を證據立てる、幾多の素晴しい資料を手に入れることの出來たことは、非常にうれしかつたのであります。この神社の記錄の一つに、奈良朝の頃招撫した大隅の隼人族に、『傀儡子』の人形角力を見せて樂ませたといふことのあるのを見て、私は『傀儡子』の由來が、猿樂の由來よりも早かつたことを知り、同時に又、

この國の先住民族中、南方系統に屬する大隅の隼人族には、『傀儡子』の人形角力が全くめづらしい、異國情調のものであつた事情を知り得て、非常にうれしかつたのであります。

崑崙・カラコルム・ヒマラヤ・以南に分布されて居るアジアの南種

話が大へん傍道にそれてしまひましたが、この滿洲が私共日本民族渾成の核心となつた種族の故郷でありましたこと、從つて東大陸に分布されて居りましたツングウス・蒙古・の二大種族が、日本の古代史に重大な關係を持つて居りますことは、今日では最早何人も疑ひを容れる餘地のないこととなつて來たやうに考へますが、滿洲及び原滿洲人の日本建國に對する血統的・文化的・使命は、單にそれのみではありませんでした。前來も段々申上げて參りました如く、滿洲は東部エウロッパに深く喰込んで居りますフイン・ウグリア人・トルコ人・等の足だまりでもありまして、これらのツラン人の持來した近東文化を日本に取次ぐ上に、最も重大な使命を果して居るのであります。

以上はたゞアジアの北種、すなはちツラン系五種族の分布並にその移動狀態に關して申し上げただけでありますが、初め申上げて置きました通り、わが大アジア洲の陸屋根の南を緣づけて居るヒンズウクシ・カラコルム・崑崙・ヒマラヤ・の彼方には、この北種とは全くその血統と文化とを異にする崑崙系の諸民種が、更に多くの大枝・小枝・に岐れて蕃衍して居るのであります。前インドの中、白人（ゲルマン）系のヒンズウ民族を除いたドラヴイダ人、後インドのモン・クメール人、インド支那・支那本土・に分布されて居る漢民族・苗族・等、種々雜多の熱帶人及び亞熱帶人がそれであります。

大アジア洲の南方種族すなはち崑崙系諸民種と、北方種族卽ちツラン系諸民族との間には、その血統及び文化の上に、可なり根原的な著しい相違があります。血統の相違は、各民種の骨骼・體貌・上の著しい相異となつて現はれるものでありますが、それが先天的のものであるか、後天的のものであるかといふ議論を押つめてゆくと、結局、人類は世界の或る一地方に發生して、四方に分散して行つたものか、それとも世界の或る幾つかの地方に發生して、それが複雜な發展の過程を經て、現在の分布に到達したものかといふことになつて參ります。それは何れと致しましても、人類の骨骼・體貌・が、さほど久しからぬ間に、その居住する地方の天然の條件に從つて驚く

べき變化を遂げるといふことは事實であります故、血統の相違といふことも、文化、すなはち生活樣式の相違といふことも、その民種・民族・の占住する天然の條件によつてきまるといふことに結著するのであります。

民族文化の特徴は太陽の熱と光とで決る

しからば、この天然の條件の中、何が民種・民族・の血統と文化とを決定する最も大きい威力であるかと申せば、私はそれを太陽の光と熱とであると申したいのであります。たとへば日本民族の上に今日の盛運を持來した重大な原因となつてゐる北赤道海流、俗に申す黑潮、それから日本にだけ吹きつけて、支那大陸は素通りしてしまふ颱風に致しましても、押しつめて參りますと、その起りは太陽の光と熱とにあるのであります。

凡そ地球上の生きとし生けるものが、皆太陽の光と熱とによつて、或は成長し、或は繁茂し、或は凋落し、或は枯死して居ることは、私どもの現前に見る通りであります。人類も生物の一種でありまする以上、またこの數を免れぬものであります。

或る人はこの世界を縱斷して、西洋と東洋とに分ち、そこに人類の血統上・文化上・の根本的相違を見出さうとして居るやうであります。しかし、この考へ方は隨分とお粗末な常識上の判斷でありまして、私は問題として居ないのであります。東洋と西洋といふ觀念の起りましたのは、十五世紀に入つて、あのイスパニア・ポルチュガル・人によつて操られました三本マストの帆前船が、喜望峰をめぐつて頻繁にこちらにその姿を現はすやうになつてからのことであります。

これまで多くの人々は西洋の文化と東洋の文化とを非常に距離のある全然異つたもののやうに考へて參りました。けれども私は、西洋と東洋との文化の相違をさやうな式では考へませぬ。この世界を縱に東洋と西洋とに分けるのは單なる常識上の判斷ではないかと思つて居ります。私共人類の文化は、横に地球を取卷いて居る氣候の帶ではないかと考へられます。この氣候の帶に關する學說について考へて見まするに、私共素人に最も解り易い說明は、ドイツの氣象學者・ケッペン氏の分け方であると思ひます。

ケッペン氏の氣候帶說と人類文化の段帶

このケッペン氏の分け方によりますと、赤道を基と致しまして南と北とへ、先づ赤道に最も近いところが、熱帶、それから或る程度隔つたところが亞熱帶、それから溫帶・寒帶・極帶・といふ風に、地球を南北へ五つの帶に分けて居るのであります。尙ほこのケッペン式の外に或はズウパン式とか、或はデーヴイス式とか色々分け方があるのでありますが、このケッペン氏の五つの分け方が、私共に一番解り易いと思ふ。又、このケッペン氏は五つの氣候帶の一つである溫帶を更に三つに分けて居るさうでございます。その三つの中で第一は、一年を通じていつでも氣候が溫和でいはゆる溫帶の特色を現はして居るところ、第二は夏季に至つて非常に暑・酷熱・を感ずる所、第三は他の季節はさほどでないが、冬季になつて非常に冱寒を感ずる所、溫帶をこの三つに分けて居るのがケッペン氏の分け方ださうでございます。

常世國から常闇國まで

赤道に最も近い熱帶から亞熱帶へ、それから溫帶へ、寒帶へ、極帶へと段々に北の方に進むに從つて、四季の運行とそれに伴ふ晝夜の差とに大きい變化が起り、從つて氣候・風土・の上に著しい特徴の生じてゆくことなどは、もう判り切つたことでありますが、後に諸民族の文化の本質を決定する上に重大な關係のありますこと故、お聞き苦しいかも知れませぬがこゝにざつと申上げて置くことと致します。申すまでもないことでありませうが、熱帶地方は晝夜の長さに殆ど變化がないのであります。一年を通じて夜も晝も殆ど同じ長さである。又、春・夏・秋・冬・の區別がない。四季が廻つて來ない。私共日本人が祖先の時代から慣用して參りましたことばで申しますとこれを『常夏の國』といふことが出來ると思ひます。それから稍々北の方へ進みまして、亞熱帶の地域に入りますと、晝夜の差長が漸く生じて來て居ます。つまり冬至と夏至との關係も現はれて來ては居ますが、概してまだ晝の長い日が多く、そこには冬といふものがない。

私共の故國・日本へも、南の亞熱帶地方から種々の人種が渡つて來て、日本民族の血液を構成する重要分子となつて居ります。古事記には『常世の國』といふことばがありまして、われ〳〵日本民族の核心となつた高天原民族すなはち天孫民種とは、言語も、風俗も、祭神も、全然その

系統を異にして居たといふことが、文獻の上だけでも立派に證據立てられるのであります。要するに私共の血液の中には、亞熱帶人の血液が澤山に混つて居る。すなはちこの亞熱帶人・常世人・は冬を知らぬ民族であります。

この亞熱帶を段々北へ進みますと、私共の日本の横はつて居る溫帶に達します。こゝではすなはち四季折り折りの世界が展開するのであります。冬至から一陽來復となり、日が長くなります。さうしてそれから夏至まで長くなつて、冬至に至つて交替する。夏は暑く、冬は寒く、春と秋とは氣候が溫和である。つまり、この地帶に參りまして初めて人類は冬を知るのであります。こゝでわれわれは溫帶を去り、段々北の方に向つて進みますと、こんどは寒帶に入る。こゝは一年を通じて夜の長い日が多く、從つて氣候が頗る寒い。さうして春と夏とが一時に來て、しかもその春と夏とは、來たかと思ふと直ぐ去つてしまふ。

それから極帶、それもいよいよ極地に參りますと、半年は晝が續き、半年は夜が續く。夜の永く續くといふことは、南方民族の間には神話にも傳說にも、絕對に現はれて居ないのでありますが、日本民族はいはゆる常闇の傳說を持つて居ります。天岩戸開きの神話がその代表的のものであります。それならこの常闇の神話は日本民族だけの持ものかと申すに、決してさうではなく、エウロツパに參りましても、ゲルマン民族、すなはち北種の間にはこの神話や傳說がたくさんに行はれて居りまして、それが民族的行事として各國民生活の上に、大きな力を揮つて居るのであります。

朝日を禮拜する北種と夕日に跪伏する南種

例へば朝日に向つて禮拜するといふこと、曉の光に憧れるといふこと、これが世界のあらゆる民族に普通の習慣かと申しまするに決してさうではない。成るほど太陽を畏れ敬はぬ人種は南にも北にもない。しかし、それと朝日を喜ぶか夕日を慕ふかといふ問題とは別であります。南の熱帶・亞熱帶・地域に參りますと、私共が朝日の光を慕ふほどそれを喜んで居ぬやうであります。かれらは、太陽の光があまりに强く、その直射によつてうける自然の壓迫があまりに甚しいので、些かうんざりして居るやうである。從つて朝日よりも夕日を慕ふ。沙漠に日の沈む時は、アラビア人も、ペルシア人も、われわれが朝日に對すると同じ心持で、その莊嚴な光に跪(ひざま)づく。回教徒

が夕日を禮拜するやうに、佛教徒も夕日に憧れる。西方には金色の『寂光』が降りそゝぐ彌陀の淨土があると考へた。阿彌陀樣は西の方にいらつしやると考へた。支那でも『浮雲遊子意、落日故人情』と詩人が歌つて居る。故人の溫かい情をほの〴〵と來る夕日の光にたとへて居る。

しかるにそれが北に來ると必ずしもさうでない。夕日は美しいが、うら悲しい、寂しい。佛教徒や、回教徒が夕日を禮拜するのとは大ぶん異つて居る。『赤い夕日の滿洲に』戰友のむくろを埋め葬つた一兵卒の心持を歌つた軍歌、征馬すゝまず人ゆかず、金州城外斜陽に立つと詠じた將軍の心持、同じ赤い夕日に對する場合、北種の心持は南種のやうに歡喜ではない、禮讃ではない。天日矛の妻なる女は、原朝鮮人の一種に屬するものでありませうが、支那人であつたらしい夫の愛よりも朝日の光が慕はしく、夫を振りすてゝ『東へ〳〵』と走り、到頭日本にやつて來て敦賀に上陸し、日本に歸化した。インドの佛教——いや宋代以後の佛教を日本人の佛教としてたゝき直した日蓮上人は、阿彌陀樣にお尻をむけて朝日を禮拜し、南無妙法蓮華經と唱へました。

常冬の國、やがて常晝・常闇・の國であります。かやうにわれ〳〵の地球は、天然の條件に於いて南北へ幾つもの段帶をなして居るのでありまして、それが人類の文化を分つ根本的のものとなつて居るのであります。東西の文化には必ずどこかしらに共通點がある。すなはち東西は南北に見るやうに、文化の本質を分つ墻壁はないのであります。

衣・食・住・に心を勞することの少い熱帶人

そこで私共は今一度熱帶に戻りまして、そこから文化の特質を考へて參りたいと思ひます。熱帶の文化の特徵を考へまするに、此處では生きとし生けるものが皆餘り苦心をせずに、勞せずして生活することが出來る。著物も殆ど著る必要がない。溫帶では裸體で道中がなるものかなど申しますが、熱帶に參りますと、實際に裸體で道中が出來る。食物にしても、一年を通じて耕さぬでも、又、工夫しないでも、次から次へと天然物が實つて行く。大して食物を得ることに不便を感じない。

それから住居も保溫の設備などは必要がなくて、極めて簡單なものでよろしい。降水量も少いため、さういふ點でも住居は非常に簡單であります、つまり衣・食・住・には非常に都合が好い。熱帶人は何を考へるかといひますと、自分より力の强い種族もしくは猛獸のやうなものが、自分の

占據してゐる土地を占領することが一番恐ろしいことになつて居るのであります。

その次に熱帶人の懼れるものは、疫病であると思はれます。疫病についでは、地震とか或は噴火といふやうな天變地災の突發であらうと思はれます。そこでこの强敵の侵入・疫病・天變地災・といふやうな恐ろしいことに對して、これをどうしたら避け得られるかが、熱帶人の生活問題の全てであります。すなはち第一の强敵の襲來に對してはその解決の爲に戰爭が起ります。

熱帶に於ける戰爭と巫呪

熱帶人にとつては、戰爭が生活の最も大きな部分である。すなはち熱帶では戰爭が、私共のやつて居る工業とか商業とかいふものと全く同じで生產行爲になるのであります。つまり自分達の生命を保持し、種を保持する方法は戰爭に依る外にない。隨つて武器と生產機關との職能は全く同じで、かれらの間では戰爭をすることが、やがて生產をすることになつて居るのであります。

かやうに强敵と同じに、もしくはそれ以上に恐ろしいものは鬼神妖魔、これは超自然的な力を持つものであつて、時に或は人間を呪咀し、人々の罪を責罰する。さういふことが起つて來ますので、熱帶人は鬼神妖魔を祀つて、かれらの呪咀を禁厭したり、回避したりしようとする。それが爲には音樂を奏でる。しかもその音樂は先刻申上げましたジャズ、極めて單純な調子で手拍子、足拍子おもしろく踊り廻る。これだけで殆ど熱帶人の生活は盡きて居ると思ひます。

われ〳〵から見れば實に幼稚な淺ましい生活でありますが、それは人類の發生した太初に遡つて考へて見ると、これが私共人類の發生した當初の最もまじめな、且つ重大な仕事であつたのであります。いはゆる勞せずして自ら保ち、さうして種を殖やして行く。これが最初の人類にとつては、非常に都合のよい條件ではなかつたと思ふのであります。

【註記】東洋人はすべて菜食である。西洋人はすべて肉食である。菜食文化と肉食文化とでは、てんでその土臺が異ふ。すなはち、政治も、經濟も、思想も、教學も、肉食人と菜食人とでその本質を異にするといふ說を、むきになつて唱道して居る學者がある。讀者の知人の中に、若しさういふ說を感心して聽いて居る人があつたら、著者のこの氣候帶文化說を紹介してやつて貰ひたい。若しその人が素直な人であつたら、ひどく爭はずともきつと物の道理の本末といふことについて、先づ悟りを開いて來るに相違ない。

第三夜（九月三十日）

逆境こそ文化の母

今晩は昨晩に引つゞき、惠まれぬ天然の條件、すなはち自然地理の上から見た逆境が人智の發達を促し、民種・民族・の興隆を來した最も主要な原因の一つであつたといふことを申上げます。これは現に當滿洲國の開發に當り、酉寒・酷暑・と戰ひ、磽确・不毛・と相搏ち、自然地理の上の有らゆる不利な條件と四つに組んで、興亞の大理想に猛進して居られる諸君の上にも、大きい勇氣と強い信念とを與へることにもならうかとも存じますので、幾分煩はしくありませうが、尙ほ前夜に引つゞき、逆境が人類文化の母であつたといふ原理について申上げて見たいと存じます。昨晩は、赤道に最も近い熱帶人の生活樣式に就いてお話を申上げて置きました故、今晩は熱帶から一段北の方へ進んだ、亞熱帶人の生活樣式からお話をすゝめて參りたいと存じます。

冬を知る世界の農業に發した强烈なる國家意識

前にもちよつと申上げて置きましたやうに、人類は世界のどこで發生したものか。又それが一箇所で發生したものか、數箇所で發生したものかはまだよく分つて居ぬのでありますが、それが熱帶もしくは熱帶に近い亞熱帶のどこかで發生したであらうことは、容易に想像されるのであります。さうして、その熱帶地方から、そこを占領した强い人種の爲に壓迫される程の、弱い劣つた幾つもの人種が、結局亞熱帶の方へ、又溫帶の方へ、と段々に北の方へ向けて追出されて來たのではないかと、私は考へて居ります。すなはち、發生當初の幼稚な人類にとつては、冬を知らぬといふことが非常によい惠まれた條件であつたのでありますけれども、發生して暫く經つと競爭が起つて、弱い者・劣つた者・が冬を知るところに追出されて行つた。さうしてこの冬を知つたといふことが、やがて弱い者・劣つた者・に叡智の授けられる元となつたのではないかと私は考へて居ります。

例へて見ますと、冬を知る世界では、われ〳〵人類がさしあたり最も好んだ主要食物の缺乏を

感じて參ります。そこでわれ〳〵は何をその主要食物の代りに食べたらよろしいかといふ代用食に就いて心を用ひたことと思ひます。それからストッキング、つまり澤山ある内に貯へて置くことに就いて考へたと思ひます。ついで人類は食物を得る爲に狩獵生活を始めました。初めは天然に出來る物を取つて食べた。果物・穀類・のやうなものが一番主要な食物であつたが、段々肉食をするやうになつて狩獵生活が起つて來た。狩獵生活の結果、生捕りにした野生の動物を飼養して居りますと、それが幾萬千年といふ悠久な歳月を經る間に、牛とか、馬とか、犬とか、豚とか、鶏とかいふ品種に變つて來ました。又一方では天然に出來る穀粉を刈取つて食べて居つたものが一つ土地を繰返して耕作することを知つて來た。初めは水草を逐ひ、禽獸の群を追つて今日の人間の想像もつかぬほどの廣汎な地域を漂泊して居たものが、農業の進歩と牧畜の發達とにつれて追々一箇所に定住するやうにもなつて參りました。さて、さうなつて來ると、農業と牧畜とは互に因となり果となつて人間生活樣式の進歩を促すことになります。例へば牧畜業の結果として獸の糞などが非常に農作物の成長を助ける、土地をよく肥やすといふことが解つて參ります。人智がこゝまで進んで參りますと、人間はもういつまでも水草を逐つて所定めず漂泊して歩く必要はない。一箇所に定住して部落を造り、その土地に對する愛著が非常に強いものになつて參ります。これが國家の起りでありまして、溫・寒・帶人の間に特に強い國家意識の生れて來て居るのも、畢竟はこれが爲であらうと考へられます。尙ほこれは申すまでもないことでありますが、冬が何ほどか人間の衣服の制を複雜にさせる。狩獵生活から毛皮の著用も考へられる。或は、滿洲のある種族のやうに魚の皮で著物を造るといふことも必要になつて來る。それから家屋にいたしましても、夏は涼しくして、冬は何かストーブのやうなもの、オンドルのやうなものを用意することになつて來る。かやうなことになつて參りまして、幾萬千年の昔、熱帶・亞熱帶・地域では弱者であり、劣者であつたものが、强者のために春・夏・秋・冬・の廻つて來る溫帶もしくは寒帶地域に追出されました爲に、その逆境に順應するやうに頭を使つた。さうして絶えず頭腦を働かせてゐる間に、私共の溫帶文化が段々に發達したのではないかと、私は考へます。

狩獵生活が生んだ寄合評定制度

尙ほ溫帶人の狩獵生活が生んだ產物としては、人間が協力し、協調し、お互に相談をして事を

進めて行く、いはゆる寄合評定の制度が生れた。これはその筈であります。空を飛ぶ鳥、野を走る獸、水をくゞる魚、人間がこれを追ひかけても、空を飛び、野を走り、水をくゞる技術ではかれらに及ぶものではない。そこで人と人とが協力をし、一方は追手に立ち、他の一方は搦手に廻る。さうして網を張り、弓に矢を番へて待つて居る日になると、苦もなくかれらが手に入る。これが寄合評定制度の起りであつたらうと私は考へて居ります。集まつて相談の上、事を進めて行く。今日のことばでいふ議會制度の起りではなかつたでありませうか。昨晩も放送の終りに一寸申上げて置きましたが、本日から滿洲帝國協和會に於いて催されて居ります全國聯合協議會といつたやうな一種の寄合制度は、北方種族に特有の文化でありまして、南方種族の間には絶えて見られぬことであります。それに似たものがあるにしても、それは酋長の諮問會議でありまして、各地方から集まつて來る氏の上達が、それ〴〵平等の評決權を持ち、年度内の重要事項の審議をするといふ制度は、北方の狩獵民族だけが持つ特殊文化と見てよいのであります。支那の『魏志』にも朝鮮の古族の生活樣式を傳へて、十月になると四方から、各部落の酋長達が集まつて、大に天を祀り、盛に歌舞宴飯もしたが、國家の主要事項について協議を行つたといふことが書いてあります。日本の神代史にも、八百萬の神達が天安河原に神集ひに集ひ、神議りに議つたといふことが見えて居ります。出雲民族は高天原民族とは種を同じくしつゝ族を異にしたものに相異ありませぬが、同じ北方種族として十月に全國の氏の上達を招集し、大會議を催したことが、私共が子供の時からきかされて居る『神無月』の故事によつて、明かに察知されます。かやうな幾多の具體的事實に徴して、私共は聯合會議なるものを、北種の持つ特有の文化と知ることが出來るのであります。

東西同時に花咲ける世界最初の亞熱帶文化

今日世界の最劣等種族といはれる、ホッテントットとかエチオピアとか、ブッシュマンとか、ピグミイ（一寸法師）など申す熱帶人も、人類の發生した太初に遡つて考へて見ると、これが一番優等な強い種族であつたかも知れませぬ。しかし、かれらは何萬年といふ間、熱帶の恩惠に浴したまゝ、昏々と眠つて居つた爲に、遂に今日では世界の最劣等種族となり、追出されたものが却つて優等種族となつて、かれらを支配するやうになつたのではありますまいか。これを人類の文

化史から申しますと、私共の占據する溫帶地方の文化が、まだ野蠻狀態にあつた時代、すでに文明の華を開いて居たものは、熱帶文化ではなくして、熱帶の次の亞熱帶文化であります。しからばその亞熱帶文化の中で、何といふ國が最初に人間の文獻歷史に現はれて來るかと申しますと、西方ではあのチグリス・エウフラテス・河の流れて居りますところにメソポタミアの文化が起り、それからナイル河の流域にエヂプトの文化が花咲き、東方では黃河・揚子江・の流域に漢民族の文化が榮えたと、かやうにいひ傳へられて居ります。このメソポタミア・エヂプト・中南支那・の三つの文化は全部亞熱帶に屬するところのもので、それは色々山とか川とか、海流とか、氣流とか、或は沙漠とかいふものゝ配置で、氣溫は緯度の通りには參りませぬ。種々複雜な變調は起つて居りませうけれども、大體世界最初の文明が一つの帶をなして起つて居るといふことに違ひはないのであります。これだけでも私が只今まで皆樣に申上げました考へ方に、さほど大きい誤りはないといふことをお認め下さることが出來ると思ひます。われ〳〵溫・寒・帶文化の花咲く前には東西の文明が一つの帶となつて、殆ど同時に起つて居るのであります。これを以て見ましても西洋文明と、東洋文明とを根本的に異つたものと見るのは、誤つた見方であると私は考へます。

さて、そこでこのメソポタミア・エヂプト・中南支那・の文化が興つた後、その次に何が興つたかと申しますると、ちやうど建築技師が最初にコンクリイトの柱を立て、その間を壁で塗潰して行くやうに、前に擧げた三つの柱の間に、次から次へと文明の壁が出來て行つたのであります。今、それを東の方から順序なしに申上げて見ますと、サマルカンド・カシュガル・など申す都市の榮えた中央アジア、あの邊のことを佛教の歷史で西域と申します。それからアフガニスタン・ペルシア・アラビア・パレスチナ・フエニキア・ギリシア・ローマ・それからこれは少々時代が遲れましたが、イベリア半島に入りまして、イスパニア・ポルチユガル・かういふ風に亞熱帶文化の壁が順々に出來て行つたのであります。それを見直すとちやんと一筋の帶になつて居ります。さうして世界歷史は、先づ亞熱帶から起つて居るのであります。さうしてこの亞熱帶の文化が、一と盛り華を咲かせましたところで、今度はその文化が段々と北の方へ移つて來て、日本や、イギリスや、フランスや、ドイツを含む溫帶の文化が花を咲かせたのであります。

南北兩文化の緩衝地帶としての滿洲及びフランス

だが、さうして亞熱帶の文化の後に、溫・寒・帶の文化が蕾をふくらませかけたのは、暗い中世紀の夜が過ぎて東の空に近代文化の美しい光がさし初めた頃からであります。溫・寒・帶文化は、亞熱帶文化とは全くその本質を異にし、科學或はその應用にかゝる驚嘆すべき機械器具の發明によつて齎された產業の跳躍的進步によつて代表されるのでありました。今、人類文化史上に於ける古代文明を亞熱帶文明と見るならば、近代文明は溫・寒・帶文明であります。さうしてこの古代文明と近代文明との橋渡しをした中世紀文明を代表するものが、アジアではこの滿洲及び滿洲人、エウロッパではイベリア半島及びイベリア人（ポルチュガル人及びイスパニア人）であります。

今、エウロッパの地理について見ますると、エウロッパで溫帶と亞熱帶とを區劃する山脈は、ピレネー・アルプス・マリン・アルプス・バルカン・アルプス・といふ風に、これがまた氣候帶と同樣橫に走つて居ります。然もさうしてエウロッパを橫に走つた山脈は、アジアに入つても同樣でありまして、すなはち黑海の邊、裏海の邊から始まつて居るアジアの橫亙山脈は、東へ走つて天山・アルタイ・サヤン・ヤブロノイ・から興安嶺といふ風にアジアを南と北とに區劃して、アジア大陸の文化を北の溫・寒・帶と、南の暖・熱・帶とに分けて居るのであります。この兩つの文化帶の切口がエウロッパに於きましてはイタリアのロンバルヂアからフランスのサヴオイアに越すところに當るのでありまして、フランスからはまた、アルプス越ほどの難所にさしかゝることとなしに、ピレネー山脈をイベリア半島、すなはちポルチュガル・イスパニア・の方に越えることが出來るのであります。それでありますから、このアルプスの切口に當つて居りますイスパニアの一部分と、フランスの一部分とが、熱帶・亞熱帶・二つの文化の橋渡しをしたことになつて居るのであります。エウロッパで亞熱帶文化にあたるものは、ラテン文化であります。又、溫・寒・帶文化に當るものはチュウトン文化、又の名ゲルマン文化と申すものであります。フランス・イスパニア・に跨るいはゆるガリの平野は、ちやうどアジアに於ける滿洲と同じで、ラテン文化とチュウトン文化との緩衝地帶にあたつて居つたのであります。だからフランスほど血統と文化との複雜な渾成を遂げて居る國は、エウロッパに類がないのであります。だからフランスが北の方チュウトン（又の名ゲルマン）の文化を骨として、これに南の方ラテンの文化を肉としてつけて行くか、南の方ラテ

ンの文化を骨とし、その上に北の方チュウトンの文化を肉としてつけて行くかは、フランスの將來性を決定する上に重大な關係があるのであります。半世紀も以前からどた〳〵して來て居る政教分離問題の如きは、その問題の具體化したものであります。曾てはどうやら北の文化を骨子とする方に傾きかけたやうでありますが、世界大戰以來、それがすつかり元に還つて、今日では南の文化を骨子とする傾向が著しいのではないでせうか。

康熙帝の北方文化主義に國策を統一せよ

それはいづれにしても、この滿洲國にもその問題はあると思ひます。北種である原滿洲人（渤海人）の文化を骨子として、南種である漢民族の文化を肉づけて行くか、それとも漢民族の文化を骨子として原滿洲人・原朝鮮人・原日本人・の文化を肉づけてゆくかは、この國の將來の運命を決定する上に重大な關係を持つてゆくものと考へます。これを清朝の國策で申せば康熙帝の北方文化主義で行くか、乾隆帝の南方文化主義で行くかであります。私は、斷じて前者でなければならぬと信じて居るものであります。

更にこの關係をアジアの方へ延長して見ますと、やはり南北文化の長城にあたる天山・サヤン・ヤブロノイ・の山脈が、興安嶺で切れて、原滿洲人（渤海・女眞）・蒙古人・が支那の中原になだれ込むことが出來るやうになつて居ります。從つてその切れ口、山海關こそは、中原の主人公であり、亞熱帶文化の代表者である漢民族が、滿洲及び滿洲人の隙を窺ふ裏木戸ともなつて居るのであります。

語法・發音・の全く相違する崑崙系とツラン系

次に漢民族・苗族・モン・クメール人・等を代表者とする崑崙系の文化と、日本人・朝鮮人・滿洲人・渤海人・等を代表者とするツラン系文化との根本的相違を、更に具體的事實に卽して比較して見ますに、先づ考へらるゝことは語法であります。凡そ語法（文法）の相違は、民種の異同を辨別する最も根本的なもの〻一つでありますが、漢民族を始めとして、苗族・モン・クメール・等總じて崑崙系の言語は、皆述語すなはち動詞が主語の次に來る點、語に語尾の變化がなくその配置によつて意味の補はれるやうに出來て居る點、その他で全く一致して居る。インドの尖端、セイ

ロン島附近に行はれるパアリ語でさへそれである。然るに日本人・朝鮮人・原滿洲人・の使用して居る語法は、述語が客語の後につき、語と語との間が、て・に・を・は・の介補によつて聯絡する等崑崙系とは全くその語法を異にして居る。お互日本人が支那語もしくは歐洲語を學ばうとする場合、最も困難を感ずるのはこの點であります。それなら支那語と歐洲語、もしくはサンスクリットとは全く同じかといふにさうでもない。述語が主語の次に來る點は、歐洲語及びサンスクリットと全く同じであるが、語に時・格・數・性・相・法・等を現はす語尾の變化がない點で、支那語はまた自ら別派をなして居る。しかし支那人が歐洲語を學び、サンスクリットを學ぶのは、何といつても、日本人がそれを企てるよりも遙に易い。それなら述語が主語の次に來るこの珍しい語法を使用する民種は、日本人・朝鮮人・原滿洲人・だけかといふに、さうではありません。前に申上げて置きましたツラン系の五族は、皆それであります。東部エウロッパの境に深く喰込んで居るウグリア族の一派、マジヤアル人が、ツラン系であるといふことの認められるのも畢竟はそれが主なる理由の一つとなつて居るのであります。尙ほ言語には語法と發音との兩方面があるのでありますが、同じアジア人といはれ、黃色人と呼ばれながら、支那人と日本人とは發音も異つて居るのであります。こゝで詳しいことは申上げて居られませぬが、發音の異ふのは舌の働き方が異ふので、人類學上から申しますと、最も大きい問題として取上げられなければならぬ事案であります。

純鐵は北方民族にのみ惠まれたものだ

かやうに崑崙系とツラン系との間には、文化の基調である語法・發音・の上に最も大きい差異が横たはつて居りますのに、その生活樣式を決定する鐵器の使用の上にも、非常に著しい相違が發見せられるのであります。鐵は何故か、北極圈の方へ近づき次第純鐵に近いものが發見され、南方赤道圈に近づくに從つて、精錬に複雜な技能を要する化合物が發見せられるやうであります。私共の持つて居る磁石の針の北の方を向くのは、何故でありませうか。私はこれまでこの問題を提げて手あたり次第、專門學者を惱して居るのでありますが、不幸にもこれに明答を與へたと思ふ先生にはまだめぐり合はぬのであります。エスキモーが北極圈に近い地方で、岩石を碎いてその中から純鐵を取り、それで鉤を作ることを知つて居たといふことは、私が曾て何かの本で讀ん

で知つて居ることでありますが、鐵と北極との間には、まだ何か學者の手の屆かぬ大きい祕密が横たはつて居るやうに考へられてなりませぬ。アジアの文明が、熱帶・亞熱帶・の境から起り、ついで溫・寒・帶に入り、現に溫・寒・帶文化の代表者である日本に科學文明の花が咲いて居るのは、春が來て草木が花咲き、秋が來て果實の熟れる以上の不可思議ではありませぬ。亞熱帶に國する支那が溫・寒・帶に國する日本の先進國であることは、私の氣候帶文化說から申せば、當然すぎるほど當然のことであります。たゞ、こゝに考へて置いてよいことは、鐵器の使用と、音節文字の發明とが、人類の文明生活に入つた最初の段階でありながら、文字の使用といふことでは、大先輩である漢民族が、鐵器の使用では原滿洲人及び原日本人に一籌を輸して居ることであります。これは北方から出る鐵がその鍛冶に適し、南から出る鐵がその鍛冶に適せぬからではないかと私は考へて居ます。

鐵器を投棄てつゝ生蕃の殺戮から免かる

南方に鐵が乏しければ乏しいほど、南方人は鐵に飢え、鐵に憧れて居た筈であります。インドのセイロン島附近は大昔から鐵の產地でもあり、また精錬地でもありましたが、北方ほどよい鐵は出なかつたと思ひます。南種が製鐵に熱心であつたといふことゝ、よい鐵が出來たといふことを混同してはなりませぬ。南宋の頃、フイリツピン群島から臺灣にかけて蕃つて居りましたピサヤ人が竹の筏に乘つて對岸の泉州に押寄せて、手あたり次第に殺戮掠奪を恣にした時、逃げ遲れた老幼婦女子の難を免れ得るものは殆んど皆無であつたが、何かしら鐵の器材を懷に藏して、それを投付けて走れば、蠻人が重りあつて爭奪を始めるので、纔に免れることが出來たといふことが、支那の書物に見えて居ります。これこそわが伊弉諾尊が伊弉冊尊の御跡を慕つて黃泉國に到りまして、黃泉醜女の軍の激しい追擊をうけさせた時、御身に佩びさせたもので、何か蠻人どもの好むものを投げつけつゝ走られたらしく解せられる記・紀・の記述を思はせる事實であります。黃泉國といふのは、多分『魏志』に記されて居る弁・辰・韓(後の新羅)のことでありませう。弁・辰・韓・はその西方に隣接して、聚落して居りました馬韓(後の百濟)と共に南方インド支那方面から渡來した民種であることが、『魏志』に細敍されて居るその風俗・習慣・に徵して明かであります。(本書第二九五ページ記述參照)

第四夜（十月二日）

細矛千足國

お話は一昨晩（十月一日休講）のつゞきであります。今晩はこの講演の最終と致しまして、原滿洲人の持つて居たに相違ないと考へられる鍛鐵技術と、日本建國との關係からお話をすゝめて參りたいと存じます。

日本民族の核心となつた原日本人が、この大陸の一角から、日本に徙遷し、そこで南北幾多の先住民族を招撫統一して、いはゆる『葦原中國』を統一することが出來たのは、全く北方の鐵——精錬された武器の威力と、その狩獵生活で鍛上げられた團結力——寄合評定の精神とによつたものと考へられます。原日本人によつて九州に打建てられた最初の國家が『細矛千足國』と美稱されて居りますのも、要は吉林・間島・通化・牡丹江・これを總稱して東邊道と申しますが、あの一角から日本に將來された鍛鐵の技術を稱へたものと解せられます。『くはし』は『精鋭』で、『くはしほこ』は『精鋭なる武器』であります。『ちたる』は『充實する』の意であります。

すなはち『くはしほこちたるのくに』は『精鋭な武器の充實した國』といふことになるのであります。日本で初めて鍛造された兩刃の利劍の現はれたのは、出雲の國に居た『八岐の大蛇』の尻尾からだといふことになつて居りますが、オロチを『大蛇』と書くのは當字で、オロチと發音する根據はないやうであります。それに反して、オロ王（惡路王）とかオロ神——『おろがみまつる』とかいふことばは、文獻の上にも、傳說の上にも、たくさん現はれて參ります。オロチは、現に松花江のほとりにその種を存して居るオロチ族のことではなかつたでありませうか。オロチ族のことを支那人は『長紅毛族』と呼んだやうでありますが、日本でオロ王とか、オロ神とかいふ傳說の殘つて居りますところには、必ず赤に因む地名、もしくは、事物が殘つて居ります。素盞嗚尊によつて退治された『八岐大蛇』は、目が酸漿の如く赤かつたとあり、坂上田村麿將軍によつて討平招撫された東北の蝦夷が、大鞦韆人であつたといふことは、ケンフェルが『日本志』で喝破してから、久しい間史界の問題となつて居たことでありますが、御當地に圖書館長をして居られる衞藤利夫先生あたりの御丹精で、段々と有力な史料も現はれて參りまして、今日ではもう

誰も疑ふものはあるまいと存じます。坂上田村麿將軍によつて完全に招撫討平された大韃靼人は『俘囚』として全國に分置されたのでありますが、その俘囚の長、いはゆる『俘囚首』なるものは、頗る鍛鐵の技術に秀で、朝命を奉じて多くの利劍を鍛造して居るのであります。現に石上古神宮に保管されて居る幾口かの利劍は、その活きた證據であります。

出雲のおろし金と月山の刀匠

この石上古神宮に保管されて居る古劍は、多く垂仁天皇の御宇、皇子五十瓊敷命が常陸及び陸奥に配置されて居た俘囚に命じて鍛造させたものゝやうでありますが、欽明天皇の御宇に至ると出羽なる月山に置かれた俘囚が勅命を奉じて更に多數の利劍を鍛造して居ります。出羽の月山といへば漢人の歸化したものとは凡そ緣の遠い土地柄であります。月山に置かれた俘囚が韃靼人であつたこと、鍛鐵の技術が韃靼人によつて日本に持來されて居ることは、最早疑ひを容れる餘地はないやうであります。かやうに考へて參りますと、古代朝鮮半島を通じて、或は直接に圖們江の河口附近から、この國の東邊道あたりと頻繁な交通のあつた出雲國に、一種特別の鍛鐵技術の傳はつて居りますことは、當然すぎるほど當然のことと申さなければなりませぬ。刀劍家の方で、出雲の『おろし金』といふことを申しますのも、或は『オロチ金』ではないかと考へられます。

漢民族は青銅文化

漢民族はアジア洲に於ける亞熱帶文化の代表者でありまして、文學・美術・工藝・その他文明生活の諸條件に於いて、たしかに私どもの大先輩であるにも拘らず、製鐵技術の一點に於いて、北方ツラン系の諸民族に一籌を輸した。漢民族のみでなく、崑崙系の文化は總て銅の文化であります。或は青銅（銅と錫との混成品）の文化であります。刀劍も、鏡も、その他さまゞの器具器械がすべて青銅を資料として鑄造されて居ります。この青銅による器具・器械・は土の中から出て參ります場合には鐵の器具・器械・よりも完全な形で現はれるのでありますが、それの使用された當時にあつては到底鐵器の精鋭なるには及ばなかつたのであります。土の中から出た鐵器のみすぼらしさを以て、これを青銅の下に置いて考へてはなりませぬ。北種の文化を鍛造文化と呼びまするならば、南種の文化は鑄造文化といはるべきでありませう。

世界の三大宗教は皆亞熱帶の産物

製鐵技術について、南・北・兩種の文化を分つ最も著しいものは宗教であります。宗教のことも私の氣候帶文化說によつて戴きますと、よく說明されるのであります。世界の三大宗教といはれて居りますキリスト教・佛教・回教・この三者は、すべて亞熱帶に發祥し、北方溫・寒・帶地域に入つて、溫・寒・帶人の信仰を得て居るのでありますが、溫・寒・帶人は先刻申上げました實生活上の必要から、亞熱帶人のやうに抽象的・形而上的・の瞑想に耽り、觀念論の遊戲に耽つて居る暇がありませぬ。なぜ亞熱帶に宗教文化が發達したかと申しますと、亞熱帶に興つた古代國家が、すべて嚴重な身分階級制度、言をかへて申しますと、奴隷經濟の上に成立つて居たからだと思ひます。インド・ペルシア・エヂプト・ギリシア・ローマ・カルタゴ・は皆奴隷經濟の上に興り、奴隷經濟の上に驚くべき繁榮を現出したのであります。これらの國では、戰爭も、勞働も、すべて奴隷の仕事でありまして、官職は政事の事も、祭祀のことも、すべて貴族の身分・家柄・に應じた世襲の官職となつて居たのであります。現にインドではこれをカアストと稱へ四千年の久しきに亙り、この制度を持續して今日に及んで居ります。インドの事情をよく御存じの方は、直に肯いて下さることと存じます。日本にもカバネの制度といひまして、大化新制までこの制度がありましたのを、皇室の有り難い思召で今から千幾百年といふ昔にこれを撤廢いたして居ります。大化新制といひ、明治維新といひ、凡そ社會制度・政治組織・の『改革』といふ仕事は總じて北方民族の特徵であります。近頃日本民族の核心となつた原日本人を、南方から渡來したなどと說いて居る人もあるやうでありますが、私の打建てつゝある氣候帶文化說によると殆ど問題にならぬ愚說と存じます。

東西ともに北種は宗教を改造した

なほこの氣候帶を太平洋の彼方に延長して考へて見ましても、奴隷制度は、舊世界と同じやうに南方の亞熱帶地域に殘り、それがあのはげしい南北戰役の原因となつて居るのであります。戰爭と勞役とが奴隷の身分の上に、その義務として課せられて居る亞熱帶の國々では、貴族には仕事がない。天然の恩惠を滿喫して、日夜肉體的享樂に耽けるか、さもなければ、哲學的瞑想に耽り、觀念の遊戲に沒頭して現世の苦惱から脫却しようとするか、二途その一を選ぶのでなければ、

生きて行かれぬほどに退窟を感じて居るのであります。その退窟は、たしかに亞熱帶に共通な氣候・風土・の關係からも拍車をかけられてをります。しかるに溫・寒・帶人は前に申しました如く、その智能の全てを傾けて次から次へと起つて來る實際生活上の難問題を解決してゆく必要に迫られたことが仕合せとなりまして、亞熱帶人にくらべると、著しく實際的・科學的・にその成長を遂げたのであります。だから、亞熱帶に發生した宗教が、溫・寒・帶に入つて參りますと、直に溫・寒・帶人の生活樣式に適するやうに實際向きに、改造されてしまふのであります。これはこの世界の東に於いてさうであるばかりでなく、西に於いてもその通りなのであります。キリスト教が、地中海の東、パレスチナに發祥し、アルプスの南、地中海の岸をめぐつて、ラテン人の生活樣式を支配して居る間は、宗教の形態を保つて居たのでありますが、それが一旦アルプスを越えて、北方チュウトン人の世界に入ると、いつの間にか、チュウトン人の實際生活に適する倫理・道德・の形態に造りかへられて居るのであります。だから歐洲に於きましても、南方ラテン人のキリスト教と北方チュウトン人のキリスト教とは、全くその本質の異つたものになつて居るのであります。尤も御當地のカソリツクは、一概にカソリツクと申しましても、あのゴジツクの塔が表徵する如く、多量に北方種族の精神を取入れたものでありまして、そこにラテン文化とチュウトン文化との緩衝地帶であるフランス文化の特色があるのだと存じます。この關係は佛教が西域から北支那に入り、朝鮮に入り、日本に入り、北へ北へと進むにつれて、全くその本質の異るものとなつて了つて居るのと全く同じであります。

康熙帝の滿洲封禁政策

今日、インドでは、佛教が全くバラモン教や、回教の爲に克服されてしまつて、殆どその形跡さへも止めぬのでありますが、纔にその餘喘を保つて居る南方――セイロン島あたりの佛教に致しましても、日本人が見てこれが佛教かと訝るほど變つた形のものなのであります。僧侶の交通往來があれほど盛で、何から何まで一切支那のものを取入れたといつてよい日本の佛教ではあるが、その本家の支那に行つて寺院と僧侶の生活とを見るならば、それがいつの間にか、すつかり日本化して形の變つたものになりきつて居ることがよく分る。支那の佛教でさへさうなのだから、蒙古・西藏・のラマ教に至つては、とても傍にも寄付くことの出來ないほどの距離が出來て居る。

それはシアム（タイ國と改稱）・ビルマ・の佛教とても同じことだ。ラマ教が西藏・蒙古・の陸屋根から熱河まで雪崩込んで來て居ながら、あそこでしつかりと喰止められて居るのは、こちらの諸先生方にはいろ〳〵お說もありませうが、形もなく、音もなく、色もなく、幽靈のやうに流込んで來る思想をしつかりと喰止める力は、滿洲及び原滿洲人が、その血統の中に堅持して居るわれわれ日本人と同じ溫・寒・帶人としての精神生活であつたと、私は考へて居ります。それは聖祖（康熙）の時でありました。淸朝ではその皇祖・愛親覺羅氏發祥の地であるこの滿洲に、漢民族の這入つて來るのをひどく嫌つて、嚴重にその入國を制限した。表面に現はれた、若しくは人間の意圖計畫に上つた理由は種々ありませうが、要は滿洲を原滿洲人の滿洲として、いひかへれば北方種族の滿洲として保存することが、大アジアの覇權を永く淸朝の手に保持する最緊要事と考へられたからではなかつたでありませうか。滿洲帝國も世界の最も偉大な統治者の一人にておはす康熙帝のイデオロギイに則り、斷じて北方種族の文化を土臺としてその上に打建てらるべきであると私は信じて居ります。

シヤアマンの本質は宗教でない

尙ほこの機會にアジアの北種、すなはちツラン系諸民種の間に普遍して居るシヤアマン教の本質に關して一言させて置いて貰ふことゝ致します。シヤアマン教といふのは、ツラン系五種族の間に普遍して居る一種の宗教には違ひありませぬが、これをアジアの南種、すなはち崑崙系諸民種の間に行はれる宗教と比較すると大へんにその本質が異ふやうに考へられるのであります。シヤアマン教には、例へば佛教のやうな亞熱帶系の宗教に普通な形而上的理論よりも寧ろ實際生活の必要に應ずる利用的方面が著しく多いのであります。すなはち、亞熱帶に發生した佛教は、前にも申述べました如く、貴族が人生の苦しい煩はしい勞役の一切を擧げて、奴隷に委ね、自分ひとりが出家遁世して瞑想に耽り、有らゆる人生の煩悶苦惱から解脫しようとしたもので形而上的の理論がその大部分を占めて居ります。そこへゆくとシヤアマンは著しく實際的・行實的・であります。アジアの北方に蕃衍するウラル・アルタイ系諸民種の生活樣式が產んだ巫醫及び卜占、これらが行事の大部分であります。もちろん、野蠻未開の域を脫して居ぬかれらの間に行はれる宗

教的行事のことでありますが故、その理念も、方法も極めて幼稚な迷信的のものであることは申すまでもありませぬが、南方の宗教にくらべて著しく實際的・行實的・であるといふ一點は爭はれませぬ。すなはちシャアマンの巫醫・卜占・の行事中には、極めて幼稚ではあるが、將來、利用厚生の學として發展してゆくべき北方文化（すなはち科學文化）の胚種が多量に包藏されて居るのであります。これは形而上的な、觀念的な南方の宗教に見られぬものであります。漢民族の故鄉である西藏のラマ教は、沙漠を越えて蒙古人を支配することはしたものゝ、心底からこれを悅服させることは成し得て居ぬ。蒙古人の本心は依然としてシャアマンにある。熱河に遊ぶ人は、誰でもラマ教が蒙古の高原から非常な勢で灤河の谷まで押出して來て居る事實を認めるが、熱河のラマ教なるものは、實はもぬけの殼で、精神も何もない政治的傀儡に過ぎぬものであるのだ。その證據は前にも述べて置いた通り、ラマ教は、灤河の水源地帶である承德に踟躕して、一歩も滿洲の本土に踏込むことが出來ないで居ります。

氣候帶が人間の生活樣式を決定する力の偉大なる、概ねこの類であります。

佐藤信淵の『宇內混同祕策』

日本では東北・秋田の生んだアジアールネツサンスの代表的な學者と推稱してよい佐藤信淵がその著、『宇內混同祕策』の中で、よく滿洲に治をなすものが、大アジアに號令するものであるといふ思想を堂々と發表して居ります。信淵の立言は、著しく帝國主義的色彩を帶びて居るやうに思はれますが、その師の平田篤胤の思想から推して考へて見ましても、これはむしろ日本民族の大陸還元を主張したものでありまして、それは東北人の血管に流れて居る祖國滿洲へのあこがれが、本能的に發露したものではなかつたかと、私は考へて居ります。私は東北人及び裏日本人が滿洲に對して一種不可思議な熱情を持つて居ることを『祖先の血のコール』から來るのだと申して居ります。實際、日本は朝鮮の南端―任那にその大陸經略の足がかりを築きまして以來、筑紫の太宰府を外交の表玄關とし、東北は凡そ對外國策とは緣の遠い僻陬として忘れて居たのでありますが、その東北から思ひがけもなく平田篤胤・佐藤信淵・の二碩學が現はれ、中央に於けるアジアールネツサンス、すなはち日本民族の敎學自主運動に矢聲を合せて、平田はアジア封建ブロッ

クのイデオロギイとして、漢民族がわれ〳〵の頭上に押冠せて來た佛教と、佛教化した儒學、すなはち宋學との排擊に努め、佐藤はその師・平田よりももつと具體的に、實際的に、日本民族の大陸還元を主張したのであります。信淵先生は强く日本の國內改革を主張し、その完成を俟つて直に大陸の經略に著手すべしと主張したのであります。かれは、東北及び裏日本の精鋭を以て海上百六十里、沿海州に上陸して、直に吉林城を取り、更に西して盛京（奉天）に都し、滿洲の經略を完ふすれば、朝鮮半島は一兵を費さずして歸服すべく、支那も自然に弱つて日本の前に兜をぬいで來るであらうと喝破して居るのであります。當時はまことに痴人の夢を語るやうに思はれた。明治になつてからは、イギリスの資本主義的世界支配を裏書する自由主義思想が、强く國民の頭腦を支配するやうになりました故に、平田や佐藤の思想は、チンゴイズムとして排斥もされ輕蔑もされたのでありますが、今日新潟を出帆いたします汽船が、滿洲への移民と花嫁とを滿載し、嵐の如き歡呼の裡に、汽笛を、生れ更つたやうに元氣づいて居る裏日本の津々浦々に鳴り響かせつ〳〵、波を蹴立て〳〵進行する情景を見ましたならば、信淵先生は地下に、何といはれるでありませう。まことに御恥しいことながら、私の大陸旅行は今回が初めてであります。豫て知を辱めて居ります金子定一少將が、滿洲を視察しようとするものは、必ず朝鮮をよく見て來いとのお說で私はひどくそのお說に感心して居りました。よく見るといふほどの日取りも出來ませんでしたが、船で直に大連に上陸するよりはと思ひまして、朝鮮の要所を三泊四日間視察して滿洲に入りました。その三泊四日の旅で何よりも先に感じたことは、朝鮮の人々が極く下層の階級まで私共の想像して居たよりも大へん元氣づき、活氣づいて居るといふことでありました。又、滿洲事變以前まではあれほど統治難・融和難・を傳へられた朝鮮人の心持がすつかり日本民族として渾融同化して來て居るといふことであります。政府の御役人が脂汗をしぼつてもよい解決に到達し得なかつた東北・裏日本・の振興問題が、滿洲への民族ラッシュにより、期せずして片づき、朝鮮の統治難がどこかへ消飛んで了つたといふことは、到底自由主義經濟學者の古いそろばんの桁には上り得ぬ現前の事實であると考へ、今更に佐藤信淵先生の偉大な識見の前に頭が下つたわけでありました。

北支那も太古はツングウス族の世界

只今も申上げました如く、この滿洲の地は、古來、東亞の大勢を制する最も重要な地域としてツラン系五種族と、漢民族との激烈なる爭奪戰の庭となつて來たところであります。從つてその民種の血統も、文化も、ツラン系と崑崙系との渾然たる調和の上に成立つて居るのでありますが、私共日本民族の核心となつた原日本人が、この滿洲の一角—それは滿洲の、オアシスとも申すべき東邊道の或る地點に占據致して居たと想像されます時代は、滿洲がまだ比較的單純なツラン系の或る種族——恐らくツングウスでありませうが、この種族が幾つもの小枝に岐れて各地方に占據して居たものと想像せられます。さうしてその尖端は、山海關を越えて、深く河北・山東・山西・の三省に入り、黃河の流域まで蕃衍して居たことが確かであります。さうしてこのツングウス族は、支那の古代史—夏・殷・以前の『王道文化』と或る重大な交渉を持つて居り、或は王道文化の主人公ではなかつたかといふ想像も成立つのであります。それは後に孔子によつて紹述されました王道政治の理想といふものが、バラモン教を生み、回教を生み、キリストを生んだ亞熱帶系の精神的產物としては、あまりに實際的・行實的・で簡素純朴に過ぎるからであります。又、支那の中原が完全に漢民族の占有するところとなりましてから、漢民族が比較的實際的な、現世的な、原始佛教、もしくはそれに理論の裏付けをした大乘佛教に親しむことが出來ず、道教・禪學・宋儒の太極說・といふ風に、歩一歩、南方種族の地金である觀念主義哲學を露出して來て居るところを見ましても、孔子の紹述した王道政治の理想が、漢民族本來の文化であつたとは、どうしても思はれぬのであります。

原日本人はこの時代、今の圖們江の附近から豫て聯絡のありました日本の九州に於ける先住民族のあるものを先導として、いはゆる『滄溟原』に乘出し、先づ『葦原中國』の一地點に上陸し、それから河流を傳つてこの國の東邊道によく似た地形を中央盆地に求めました。これを古い語で『國覓ぎする』と申しました。さうしてその好んで居住した盆地を原日本人は『日高見國』と申しました。日高見國と申すのは、四方を山で圍まれた一圓の平野で、そこからは河流が四方に向つて流れ出して居る、ちやうどこの國の東邊道に似た地形であります。日高見を略して『日田』といひ、後に及び『日田』にさまざまな漢字を當てはめましたが、豐後國日田郡の『日田』地方

と、神武天皇の御選定遊ばされた大和國とは、この日高見の代表的地形であります。

滿洲はツングウス・土耳古・蒙古・三種族の血統的熔礦爐

これより先、支那の中原には、北方から蒙古族と、トルコ族とが、相前後して幾度にも侵入し、その都度頗る複雜な民種の移動がありまして、ツングウスによつて代表された原滿洲人の血液も、追々に複雜なものになつて來たことゝ考へられます。韃靼人といふことば――支那の歴史でこれほど茫漠とした捉へ難い民種名はないのでありますが、それも畢竟するに滿洲の原住者であるツングウス族に、蒙古人・トルコ人・の血液が交り、更にそれらの民族を介して持來された東部歐洲に於ける諸民族の血液も交り、その上に漢民族の血液も多量に流込んで、滿洲人の血液が限りもなく複雜なものに成つて行つたからと考へられます。日本の飛鳥・奈良・兩朝時代に入ると東邊道には『震』が起り、それが唐朝の承認を得て渤海郡を稱し、支那から漢民族の文化を採容れて、豪勢なる渤海文化を華さかせたのでありますが、さうした國内の情勢の變化につれて、韃靼人の集團的に裏日本から出羽地方にかけて移住するものが多く、阿倍比羅夫が肅愼征伐に出かけた頃には、すでに佐渡全島が韃靼人によつて埋められて居たといふことも記・紀・の記述の上から考へられるのであります。これらの韃靼人にくらべると初めに九州の一角に上陸をし、日本民族渾成の核心となつて働いた原日本人は、よほど純粹のものであつたといふことが考へられる。それは飛鳥・奈良・兩朝以後に移つて來た韃靼人は、蒙古馬を携へて來て東北の野に放牧したのに九州に渡來した原日本人は、馬といふものを持來さなかつたことによつて、はつきりと區別されるのであります。この關係を例へて申しますと、原滿洲人といふ一筋の清い流れに、幾つも溷濁した河流が注いで、韃靼と呼ばれた混血種の生ずる前に、大自然が純粹な、清冽な、原流の幾滴かを、日本民族渾成の觸媒液として、日本國といふフラスコの中に保存して置いてくれたといふことになるのであります。さうして渾成された日本民族が、こんどは大陸に押かへして來て、同じく東邊道を發祥地とする愛親覺羅氏の後を扶掖し、東亞聯盟の素地としての大滿洲帝國を建設しようとして居るのであります。

滿洲帝國建國の理想

かく申せばとて私は決して漢民族の文化、崑崙系文化を排斥せよと申すものではありませぬ。漢民族は、文化の上で、たしかにわれ〳〵日本人の恩師であります。大先輩であります。しかしほんとの五族協和は、先づそれ〴〵の民族が各自の持つ特徴を知ること、すなはちお互にその長所を知り、短所を覺り、その上で固く握手提携するのでなければ、駄目であると思ひます。漢民族はたゞアジアの大先進國であるといふだけのことを以て、その古き文化の絶對的優越を誇つてはなりませぬ。日本人は戰爭に強いから、今アジアに覇を稱し、われ〳〵に號令して居るのだとばかり考へてはなりませぬ。日本は支那から文明生活の或る部分を輸入したに違ひないが、又、漢民族の企て及ばぬ長所――北方種族としての特殊の文化を持つて居たのであります。又、日本人は明治・大正・昭和・の三代に於ける國力の跳躍的進歩に慢心し、勝利者・征服者・の傲慢な態度を以て、他の民族の上に臨むやうなことがあつてはなりませぬ。大アジア洲南北幾十種の血液を完全に渾融させ、東亞聯盟の素地としての新文化を創造することが、大滿洲帝國の理想でもあり、使命でもあると私は考へて居るのであります。

これを以て前後四日間に亙つた私の講演を終ること、致します。

『五族協和』の最大難關としての漢系滿洲人の包容及び同化

祕境熱河が示現する南北文化の對照

昨年（昭和十四年）九月から十月にかけての滿洲旅行で、學ぶところの頗る多かつた中に、熱河に二泊して、清の聖祖が康熙四十二年（元祿十六年）を以て工を起し、同四十七年（寶永五年）を以て工を竣へたと傳へられる避暑山莊の規模と、聖祖の孫・高宗によつて乾隆十六年（寶曆元年）から、同四十五年（安永九年）に至る三十箇年間に開基建立された永佑寺以下十一大ラマ廟の結構とに表現されて居る、大アジア洲南北文化の最も著しい對照を、まざ〳〵と眼のあたりに視ることの出來たのは、著者の最も大きい歡喜の一つであつた。

これより先、著者は朝鮮を經由し、九月二十七日の『秋夕』を以て奉天に入ると、翌二十八日

の夕刻から四日間、全滿洲の同胞に呼びかけて、『アジア大陸南北文化の緩衝地帶としての滿洲』と題する連續放送を試みた。著者はこの放送中、奉天の新しい友人達から、『滿洲の土を一度も踏んだことのないくせにして、滿洲に來るといきなり四日間も、滿洲の講釋をして聽かせたものは君ばかりだぞ』とからかはれた。しかし著者は奉天でも、新京でも、ハルピンでも、チャムスでも、牡丹江でも、東京城でも、鏡泊湖でも、圖們でも、吉林でも、錦州でも、義縣でも、到るところ前掲講演放送の內容をもつと强調し、追補する必要ある事物には逢著したが、幸にして一箇所でもその取消を必要とする事物には遭遇しなかつた。十月二十七日無事に旅程を終つた著者は入滿の夜、奉天の街上、槐柳の蔭に仰いだ明月を再びウスリイ丸の甲板上に仰ぎつゝ、そのことに想到して、殊勝にもひそかに安堵の胸を撫下したのであつたが、その中でも避暑山莊の規模と、大ラマ廟の結構とを對照して考へるたびに、ひそかに會心の笑を禁ずることが出來なかつたのであつた。

放送の中にも、ほんのちよつとではあつたが、熱河のラマ廟のことに觸れて置いた。それは、明かに大アジア洲の南方文化、いひかへれば崑崙系の文化である西藏・新疆・青海・內外蒙古・のラマ教が、あれほどの勢で熱河まで押出して來て居ながら、あの熱河といふ滿洲の西南隅に於ける天然の大要塞に支へられて、實質的には寸尺も滿洲の地に侵入することが出來ないで居る。これを以て見ても、熱帶及び亞熱帶文化と、溫・寒・帶文化との本質がどんなに相容れ難いものであるかゞ分るといつたやうな意味合であつた。（本書一一六頁參照）

しかるに十月二十一日を以て、初めて熱河省の疆に入り、承德に二泊して、具さに康熙帝の郷建にかゝる避暑山莊（離宮）と、その孫・乾隆帝の造營にかゝる十一大ラマ廟との規模結構の上に現はれて居る文化的對照を觀察するに及び、『豫て勉强してかくあるべしとは信じて居たが、その中でも、熱河に於ける南北文化の交流及びその對照が、かくまで顯著なものであらうとは考へ及ばなかつた。これならば、あの段を今少し强調して置けばよかつた』と、今更のやうに坐らにして名所を論ずるものに避け難い無用の遠慮を後悔するのであつた。

ツングウス・蒙古・トルコ・三大種族の熔礦爐が滿洲

さてこゝに聖祖といふのは世界の歷史が持つ最も偉大な帝王の一人である。そも〳〵清の興起

は、明の萬曆十一年（天正十一年）太祖・愛親覺羅・努兒哈赤が、明將・李成梁と通じてその祖父・景祖及び父・顯祖を殺した梟雄尼堪を建州衙に襲つてこれを走らせ、ついでその鷺爾渾（オルホン）城を拔き、撫順に窮迫して完全に父祖二代の怨讐を雪した時に始まつて居る。愛親覺羅氏はもと女眞の人であり、努兒哈赤の祖父で後に景祖と謚された人は、明主から建州右衞都指揮使に任ぜられて居たほどの豪族である。女眞は長白山越北の山間に蕃衍したツラン系の混血民種で、ツングウスを土臺に、少くとも蒙古及びトルコ二種の血液と文化（生活樣式）とを交へた勇猛精悍の種族であつた。學者の中には、この地方の種族が肅愼の名で支那の古史に現はれた初めから、挹婁といひ、勿吉といひ、靺鞨といはれたものが、皆黑龍江若しくはウスリイ江方面から押出して來たツングウス族であつたやうにきめてしまつて居る向きもあるが、これは民種・民族・の現在の分布を本として、或る地方と或る地方との距離を、地圖の上で直徑的に量るところから陷り易い誤りである。成る程、長白山越北の山嶽地帶に蕃衍したものが、太初純粹に近いツングウス族であつたらうことは、著者も惜みなくこれを認めたい。又、或る特殊の地方には、その土地の形勢上、司なり晩くまで純粹のツングウスの殘つて居たことも認めたい。しかし唐代に及び、その大帝國主義の手が朝鮮半島に伸び、高句麗が滅び、渤海國が興るに及ぶまでも、なほこの方面の民種が純粹のツングウス族であつたやうに考へるのは、あまりに民族の混血といふことを無視した歷史の見方ではないかと思ふ。山嶽地帶といつても、吉林・長春（新京）・農安・伯都訥・方面には、常に嫩江・松花江・の流を傳つて、大・小・興安嶺方面から蒙古族が押出して來て居たであらうし、蒙古族の移動には、トルコ族の活潑な動きも密接な關係のあつたことであらうから、吉林西北方の平野に押出して來た蒙古族は、すでに多量にトルコ族の血を交へて居たと見ることも出來る。

遠く漢・魏・時代から隋・唐・時代にかけての滿洲人がすでにツングウス・蒙古・及びトルコ三大種族の混成品であつたとすれば、明末、長白山越北の地に愛親覺羅氏の興起する頃のいはゆる女眞族までも、これを純粹のツングウス族といふ範疇に置いて考へるなどは凡そ途方もないことだ。女眞の名は歷として殘つて居たにしても、その本質は年代とゝもに變つて、その生活樣式の上にも太古とは著しい相違の生じて來て居たこと、殆ど疑ふべくもない。

例へば日本で『韃靼』といへば、誰に敎へられたでもなく、又、何本に據つたでもなく、北方大陸の精悍な騎兵隊が、馬首を揃へ、一齊に短弓を引きしぼつて驀地して來る壯烈な光景を眼前

に描く。韃靼といひ、靺鞨といひ、われ〳〵は常に壯烈な騎馬隊と、精妙な騎射術とを聯想する。『馬匹』は少くとも韃靼文化の著しい特徴の一つである。しかるにツラン系五族の中、馬匹を牧養し、善くこれを御し得るものは蒙古人とトルコ人の二種族あるのみである。ツングウス人は太古、廣く滿洲の疆に蕃衍し、山海關を越えて、その尖端、今の河北省から、山東・山西・の兩省にまで喰込んで居たことが明かであり、蒙古人・トルコ人・と境を接して生活しつゝも、本來馬匹を持たぬ民族であつたことが、現にその純種を存する東部シベリアの各地方に就いて見て明かである。清の太祖ヌ努兒哈赤が女眞の人であつたといふことに異存はないが、その女眞はもう純粹のツングウスではなかつた。少くとも蒙古人・トルコ人・の血液と文化とを多量に取入れた雜種であつた。それなら何時頃から、ツングウス族を臺木として、蒙古人・トルコ人・の血液を接種した『韃靼人』といふものが出來たかといふことは頗るむづかしい問題である。著者はそれを晩しとするも、漢・魏・以來のことゝ考へてゐる。これには、學者の間に相當きびしい反對說も起るであらうが、少くとも勿吉・靺鞨・などいふ呼稱の支那の史乘に現はれた頃は、もう純粹のツングウスではなかつたと考へて居る。

もちろん、『韃靼』といふ呼稱を、ツングウス・蒙古・トルコ・三種の雜種として使用してよいといふ根據も文獻上には見當らぬ。西洋人がトルコ－タヽアルと聯稱して居るところから考へるとトルコ人・蒙古人・の外に、韃靼といふ民族の枝が岐れて居たやうにもあり、又、トルコとタヽアルとが判然區別し難い民種であつたやうにもあるが、われ〳〵からいへば、これはトルコ－タヽアルでも、モンゴリア－タヽアルでも、どちらでもよろしいわけである。たゞ支那の歷史に『韃靼』の呼稱が使用し始められた時代と、その稱呼の對照となつた滿洲人といふ廣い意味とを綜合して、ツングウス・蒙古・トルコ・三種の雜種に『韃靼』といふ稱呼を當てはめて使用することは頗る便利でもあり、又どんな場合にも支障が起らぬといふことだけはいひ得るのだ。

韃靼人すなはち原滿洲人

それは何れにしてもツングウス人といひ、蒙古人といひ、トルコ人といひ、これはいづれもウラル－アルタイ系（ツラン民族―アジアの北種）に屬する一種であつて、その血統も、文化も、根幹は同じものである。肅愼といひ、挹婁といひ、勿吉といひ、靺鞨といひ、女眞といひ、これ

を一々今日の進歩した科學的分類法による民種別に當てはめてその異同を辨別し、且つ個々の正體を闡明することは、支那の歴史の記述があまりに概念的で、材料に乏しい爲に、どんな學者も至難とするところであるが、その困難はひとり支那の歴史家の非科學的な頭腦の故にばかり歸すべきものでない。凡そ韃靼人の場合の如く、根幹的に血液・言語・風俗・祭祀・を同じくする民種の各部落に關しては、誰にしてもこれを明瞭に辨別し難いものであるのだ。後世に及び、『韃靼人』とか、『滿洲人』とかいふ、極めて廣汎な、茫漠として捕捉し難いことばの現はれたのも、むしろ自然のことゝいはねばなるまい。

滿洲人（韃靼人）の血液を構成する主要分子が、同じツラン系（ウラル・アルタイ系）の三大種族であり、その言語・風俗・祭祀・の根幹を共にするものであつたといふことは、大滿洲の地にしつかりと北方人（溫・寒・帶人）の精神と生活樣式とを保持することの出來た最も大きい理由であつたと考へられる。清朝はもと滿洲の一部族、古へのいはゆる女眞の地に起り、太祖・努兒哈赤、韃靼の精鋭を率ゐて疾風の如く滿洲を席卷し、明の萬曆四十四年（元和二年）正月、興京（赫圖阿拉）に滿洲皇帝（金國汗）を稱し、天命と建元した。たま〳〵豐臣秀吉の征韓役が起り、明が朝鮮の救援に急であつて、また遼東の事を顧るに遑なかりしに乘じ、兵を進めて大に明師を擊破し、遼東を略し、明の天啓五年（寛永二年）三月には、都を瀋陽（奉天）に遷し、山海關を突破して一擧に燕京（北京）を取らうとするの態勢を整へた。しかも、太祖はその翌年三月を以て寧遠の征途に暴殂したので、太宗がついで立ち、中原經略の準備行動として、兵を朝鮮と內蒙古とに出し、明の崇禎十年（寛永十四年）までに完全にこれを服屬させた。滿洲國（金）が初めて清と號したのはその前年であつた。この頃から太宗は、漢人を懷柔して、內部から明朝を崩壞させる政策を執りつゝあつたが、その效程半ばにして殂落した。（崇禎十六年—寛永二十年）ついで、世祖が立ち、李自成の叛亂に乘じて易々と燕京（北京）を取り、德川四代將軍・家綱の寛文元年（永曆十五年）まで福建の一角に據つて『朱明復興』の旗を固守して居た鄭成功を臺灣に逐ひ、明室の裔と稱する永明王を窮追してビルマに執へ、完全に中華に君臨することゝなつた。世祖について起つたのが、前に世界の歴史の有する最も英邁な君主の一人と讃仰した聖祖、すなはち康熙帝である。

北種の精神を堅持した康熙帝の偉業

上述の如く、清初三代の英主中、太祖・太宗・の二帝は滿洲國皇帝として終り、三代-世祖に至つて初めて北京に入り、中華に君臨したのであるが、この帝の一代も、南渡した朱明の殘存勢力を掃蕩する爲に寧日なく、四代-聖祖、すなはち康熙帝に至つて初めて、東方アジア大陸を打つて一圓とする大帝國主義の經綸を達成することが出來た次第だ。

康熙帝在位六十一年の間には、內に先帝-世祖以來の權策として、明將-吳三桂・耿精忠・尙可喜・に賦與した特權を收奪する必要から三藩の亂が起り、外に露兵のアルバアヂン越境問題があり、內・外・蒙古の領有を確實にする爲には、北は遠く天山・アルタイ・地方、西は深く青海・新疆・西藏・の境にまでも兵威を示す必要があり、その大アジア統一の積極的經綸は、祖宗の滿洲國建設と事變り、對手が言語・風俗・敎學・を異にする漢民族だけに、容易の仕事でなかつた。

中華の支配を保鞏する爲には、內・外・蒙古の領有を確實にし、朝鮮を完全に服屬させてしまはねばならぬといふことが、すでに二代-太宗の時から實行に移されて來た清朝の國策であり、世祖も、聖祖も、その遺策を奉じて、銳意內・外・蒙古人の懷柔に力めたわけだ。熱河に於ける離宮の造營、康熙・乾隆・二代に亙る大ラマ廟の建立、すべてが內・外・蒙古人を懷柔しようとした清朝の大帝國主義的經綸だ。

前にも述べて置いた如く、著者が熱河に遊び、避暑山莊とラマ廟とを一巡して最も深く感じたことは、この兩者によつて、あまりにもはつきりと對照される南北文化の特徵であつた。著者はその日、麗正門から入つて正殿・松鶴齋・及びこれに附屬の建物を拜觀し、その結構の淡泊瀟洒にして輪奐の簡素晴曜なるに一驚を喫した。もとより康熙帝が北方人の精神を堅持し、これを骨髓として、その上に南方人である漢民族の文化を肉づけることを、帝國主義的大アジア聯盟結成の基礎理念として居たことは、豫てよく承知して居た。しかしその北方精神の具現が、かほどまで顯著であらうとは考へなかつた。

正宮の內部は大理石で敷詰められ、中央に寶座を設け朝臣の啓事を聽き、外臣に謁を賜ふところとした。寶座は正面と座右とに段階を開き、圍むに高欄を以てしたものである。用材は紫檀でその透し彫がすべて樟の素木で出來て居るのも奧ゆかしい。樟は亞熱帶樹で、支那であれば少く

とも揚子江以南、福建・廣東・地方のものである。金銀珠玉をちりばめたらしい跡もなく、朱丹綠青の施されたところもない。紫檀と樟材との反映が、人に何ともいへぬ枯澹晴曜の尊さを感得させる。正殿を出て煙波致爽殿・雲山勝地樓・と見てゆくに、康熙帝の居室といひ、蓮華形の火燈口をもつた持佛堂といひ、この大帝の簡素朴茂な平生を思つては、自然に頭が下るのであつた。豪華燦然たるヴェルサイユの宮殿や、ポツダム王宮の內部を見せて貰つたことのある著者には、滿洲がこの枯澹そのものゝやうな離宮を持つといふことが殊の外有り難かつた。

南方皇畜文化を代表するラマ廟の偉觀

去つてラマ廟を見るに、離宮と對比してこれはまた全然別個の世界である。その構造からいつても、樣式からいつても、ゴビ・タクラマカン・パミイル・の大沙漠地帶が、アジア人の血統と文化とを南と北とに分つ絕對の溝であるといふことをこれほど如實に、これほど適切に敎へるものが又と他にあるであらうか。離宮は木造であるが、ラマ廟は塗籠である。離宮は人君が政治を聽くところであるが、ラマ廟は人間の形をした天魔が號令し、審判し、刑戮し、且つ淫樂するところである。離宮は燕居であるが、ラマ廟は城塞である。佛像はラマ廟に於いて民衆への威嚇であるが、離宮に於いては單なる室內裝飾であり、美術品である。熱河といふところは、この絕對に相容れざる南北兩樣の文化が、河を距て、岡を接して相對立するところである。その意味に於いてこそ、熱河は正しく東洋の『祕境』である。

康熙から乾隆にかけて熱河の寺院十一宇を數へた中に、康熙時代の造營にかゝるものは、武烈河の左岸、磬錘峰を背ろにして造營された溥仁寺と溥善寺との二宇があるのみで、他はすべて乾隆時代の建立にかゝるものである。この二宇は、康熙帝六十の壽を祝する爲に蒙古の諸王が出願し、勅允を得て建立したものと傳へられて居る。流石、康熙時代の造營にかゝるものだけに、他のラマ廟のやうに純西藏式のものではなく、北方の文化も相當に採入れられ、淸朝の藝術として見るべきものであつたが、今は修繕の見込みが立たないほどに頽廢してゐる。

乾隆帝によつて建立された純西藏式のラマ廟は離宮の北、獅子溝に沿ひ、南に面して熱河の風景を全くエキゾチックなものにして居る須彌福壽廟・普陀宗乘廟・の二宇と、武烈河の左岸にあり前揭の溥仁・溥善・及び普樂の三寺院と並んでその極北に位する安遠廟の一宇とであらう。この三

宇の中最も宏大雄偉なのは普陀宗乘廟である。これはダライ・ラマの居城である。西藏の心臟、ラサのフダラ廟に模したもので、起工は乾隆三十二年三月、竣工が同三十六年八月とある。建立は乾隆三十五年が高宗の六十の壽にあたり新疆・西藏・方面から諸王が入覲するので、かれらを隨喜させる爲に造營されたものとある。宗乘廟と並んでその東に位する須彌福壽廟は西藏のチャシロンブなるパンチヤン・ラマの居城を模したもので、乾隆四十五年、帝の七十の壽を祝する爲に、西藏からパンチヤン・ラマ第三世の入覲するのを迎へる爲の造營と傳へられる。

又、武烈河の左岸なる安遠廟は、乾隆二十四年、帝が新疆を平定し、伊犂地方に於ける蒙古諸部落の酋長を熱河に移した時、その懷柔策としてかれらの最も崇敬した伊犂のコルチヤヅガンを模して建造したものと傳へられる。

かやうに熱河に於けるラマ寺廟の多くは、西藏・新疆・及び內・外・蒙古に於けるラマ教徒綏撫の爲に建立せられたもので、十一宇の中、九宇までが乾隆帝の造營にかゝるものである。かやうにして清朝は蒙古人を綏撫懷柔することを以て軍事上・政治上・中華の支配權を保聖する最も緊要事としたのであつたが、蒙古人と西藏人との血統的限界、西藏人と漢民族との血統的限界は今日でも頗る曖昧なものであつて、同じくラマ教徒といつても、大沙漠地帶を中間にして、南方(西藏・新疆・青海・)と北方(外蒙古・內蒙古・)との間には、可なり根本的な相違があるのではないかと考へられる。ラマ教が明の永樂・成北・の間、傑僧・ツオンカバによつて一種の宗教改革を遂げ、現に紅教と黃教とに分れて居ることは人のよく知るところである。キリスト教でいへば紅教がローマン・カソリックに當り、黃教がプロテスタントに當る事情もよく分つては居るが、同じく黃教であるにしても、西藏・新疆・方面に於けるラマと、內・外・蒙古に於けるラマとはその民族文化の異るにつれて本質上に大きい相違があるやうだ。

ラマ教は寧ろシヤアマン蒙古の擬裝

西藏・新疆・方面に於けるラマ教は血統的にも文化的にも漢民族に最も近邇して居る西藏人の本來の宗教であるのに對し、內・外・蒙古に弘通して居るラマ教は滿洲人の主要な血統的構成分子の一であり、原日本人・原朝鮮人・と民種的系統を同じくする蒙古人が、西藏人からシヤアマン教の上に押冠せられた宗教であるといふことが出來るだらう。すなはち內・外・蒙古人からいへば、紅

教にも、黄教にも、ラマ教なるものは凡そその本來のものではなかつた。本來のものは他のアジアの北種と同じくシャアマンである。これはラマ教がまだ紅教と黄教とに分岐せぬ以前のことだ。唐代から宋代にかけ、漢民族の西藏支配から、ラマ教が漸次沙漠を越えて内・外・蒙古に弘通するやうになつて居たところへ、元主・忽必烈が西藏征服後、大にラマ教に歸依し、北京に大ラマ廟を建立し、西藏から高僧・パスパを聘して國師と仰いで以來、ラマが完全にシャアマンを克して蒙古人を支配するやうになつた。かくて蒙古人はラマ教に歸依しあの宏大莊嚴なツガン（都綱―紅臺）の前に跪拜はするが、その心はやはりシャアマンに縋つて居るのではないだらうか。熱河のラマ廟を見て痛感したのは、その荒廢のあまりにも甚しいことである。若しラマ教が、蒙古人の心からの信仰を得て居るものであるならば、熱河のラマ廟もあれほど荒廢せずともよい筈だ。今日ではどの廟も、どの廟も、頽然として、殆ど崩壞に瀕して居る。修繕にも、保護にも全く手のつけられないものになりかけて居る。ラマ廟の大旦那であつた元朝は亡び、清朝は消去つたが、蒙古民族は依然として存在する。蒙古民族の血液を主要構成分子とする滿洲人は今や奮然として、東亞の新秩序建設の爲に起上つて居る。それにも拘らず　熱河に於けるラマ廟は年々荒廢して行くばかりである。さうしてその勢力は熱河に踟躕して一歩も踏出すことが出來ない。宗教の力も政治の力も、天體と地球との關係によつて決定せられる民族の生活樣式を克服することは出來ないのだ。

滿洲封禁政策に現はれた康熙帝の政治理念

清朝の祖・宗・二代は、名實ともに滿洲國皇帝として終始し世祖に至つて初めて北京に入り、中華に號令することゝなつたが、その一代は南渡した殘明の勢力を剿絶する仕事に費され、眞に北種の血統と文化とを中核とする大アジア聯盟結成の積極的經綸に乘出したのは、聖祖（康熙帝）その人であつた。聖祖が大アジア聯盟結成の核心に北種の血統と文化とを置く爲に、法令に、施設に、教化に、刑獄に、經營大につとめたことは著しい事實であるが、その最も力を注いだものに漢民族の滿洲に入るを禁ずるの政策があつた。帝は清朝の爲にその中華支配を確實にする爲に蒙古人の懐柔に有らゆる施策を惜まなかつたが、同時にその皇祖發祥の地である滿洲だけは、これを滿洲人の滿洲として保有することに努め、血統と文化とに於いて到底融合し難い漢民族を滿

洲の地に入れることを拒んだ。帝は命じて山海關に嚴重な監視所を設け、官用にて旅行するものの外は、一切漢人の滿洲に入るを禁じ、親の遺骸收容等、萬止むを得ない用向のものに對してのみ、護照すなはち旅行免狀を與へることゝした。又、中華に入つて後の滿洲八旗が早くも漢人の爛熟した文化に感染し、その剛健質素の風を失つて徒に遊觀徘徊を事とし、殊にその次男坊以下のものが、わが德川時代に於ける旗本のそれの如く、無用閑散のスウパアフルウスメンと墮しつつあるを慨し、これを滿洲に送り、地を供し、資を與へて開拓に從事せしむるの策を執つた。清朝のかやうな政策は、必ずしも滿洲に於ける富源が、勤勉にして營利の事に堪能なる漢人の手によつて殄滅されるのを惜んだ經濟上の理由からばかりではない。康熙も乾隆も、漢人と滿人との間には容易に同化し難い文化の深い溝渠のあることを識つて居た。されば、康熙の政策として、滿洲を滿洲人の滿洲として保持することは、やがて中華に君臨した清朝が、永く剛健質素な北方人の精神を堅持し、それを政治及び教學の基礎理念として、漢人の文化を攝取吸收して行かうといふのであつたに相違ない。

滿洲に於ける漢系滿洲人の蕃衍

かやうな政策にも拘らず、滿洲人は中華に入ると勝利者として漢人の上に臨み、政府の權威を笠に、驕濫擅恣の限りをつくすことが出來るばかりでなく、中華は何といつても滿洲より氣候が溫暖で、文化の程度が高いので、一たび中華に於ける都市生活の味を占めたものは、どうしても氣候の變化の甚しい滿洲の曠野に土を友としての一生を送る辛抱は出來ない。どんなに熱心な政府の勸奬があつても、又どんなに有利な交換條件があつても、機會がある毎に拔け出して越關してしまふ。それに引きかへ、直隸・山東・方面に於ける漢人は被征服者としての壓制に堪へきれず、護照を買つたり、官吏を買收したりして、滿洲に潛入して見ると、存外に氣候も良し、地味も肥沃で、農業以外の遺利も多いので、その噂が一般にひろがると、漢人は滿人と反對に有らゆる方法で監視の眼をくゞり、どし〳〵入滿することになつた。中には山海關を經由せず、山東省から舢板で遼東に密航して來たものが少くなかつた。殊に三藩の亂で俘虜となつた雲南・廣東・福建・方面の漢人が滿洲に送られ、驛站の番人として置かれるといふやうなこともあつて、滿洲に於け

る漢人の數は清朝の中頃から非常ないきほひで增加して今日に及んでゐる。

著者は、昨秋滿洲旅行の途次、海・圖・線の東京城驛に下車して、渤海王宮の趾を踏査したが、その際、町外れにある一豪農の家を訪ひ、主人の許諾を得て、家屋の內部を見せて貰つた。そこは滿洲では隨分邊僻なところであつたが、そこの主人が雲南から來た漢人の子孫であるときいて意外の感がした。その祖先といふのは、吳三桂の部下であつたのではないかと、ふと氣がついたが、語が通ぜぬのできいて見ることも出來なかつた。又、その附近に興隆寺といふ名刹があつてそこに立寄り二人の寺男のすゝむる茶に渴を醫したが、その寺男の一人も、長沙の生れだといつて居た。渤海の古都－東京城のやうな邊僻でさへ、江南から移住して來て居る漢民族の多いこと推して知るべきだ。

これらの夥しい漢民族は、上代、ツングウス族が臺木となつて、これに同じツラン系である蒙古人・トルコ人・の血が接種され滿洲人と呼ばれる雜種が出來たやうに、容易にわれら北種の血統と文化とに融込むことの出來るものでない。今時のジョウナリズムに持て囃されるほどの人氣作家に滿洲を主題とする小說なりシナリオなりを書かせたら、かれらは直に『戀愛は國境を超越する』といふ人道主義（觀念主義）の大業物を眞向上段に振翳して、油壺から出したやうな日本の美男と、羅（うすもの）で包まれた玉のやうな漢系滿人の美女とが一目見てはげしい戀愛に陷る場面を書くだらうが、現實はなか〳〵さう簡單には參らない。漢人には漢人の矜持があり、生活があり、かれらは滿洲に在つても、殆ど生のまゝの漢民族として、皇甯系の血統と文化とを堅持して居る。かれらを包容同化して、滿洲帝國の新秩序に順はせようとするものが、權力を以てこれを壓迫し、法律を以て彼等の上に臨まうとしても、それは必ず失敗に終る。

漢系滿洲人の感孚は東亞聯盟成否の鍵

それかといつて、濫りに恩を施し、利を喰はせて懷柔綏撫しようとする政策はなほ惡い。殷鑑遠からず乾隆帝の文化政策にある。乾隆は康熙の造營にかゝる避暑山莊內の一室で、呱々の聲を揚げ、祖父皇帝の英邁については、その親しく聞睹するところであり、その清朝を核心とする大アジア聯盟結成の國策が、帝の施政の大眼目であつたことは何人も疑はぬところであるが、如何せん帝の時代となつては帝の周圍が、すべて漢民族の爛熟しきつた文化に溺沒し去り、帝もまた

學習院を卒業して大學にぬけたといふ秀才政治家の典型から除外されることが出來なかつた。熱河に於ける大ラマ廟の造營に見ても、又、乾隆文化の成金的豪華版に徵しても、帝こそは漢民族を感孚しようとして、却つて漢民族に感孚されてしまつたミイラ取りのミイラであつたことがよく分る。

滿洲國の建設に於いて、われ〳〵の最も心强く考へることは、滿洲の國土が、天體と地球との關係に於いて、血統的にも、文化的にも、本來北種（溫・寒・帶人）のものであるといふことだ。これはわれ〳〵北方人が、中華に入つて同化力の强い、生活力の旺盛な漢民族の血統と文化とにのされてしまふ危險があるのとは大いに違ふ。滿洲國は、逆に山東・河北・山西・の諸省から流込んで來た漢系滿洲人を融合同化し得る天然の條件の上に置かれて居る。われ〳〵は支那本土から來た、又現に流れ込みつゝある漢民族を迎へてこれを訓練し、陶冶し、溫・寒・帶人としての規律ある生活に同化することに成功しさへすればよいのである。この場合天然の風土・氣候・はわれ〳〵の味方だ。われ〳〵が支那本土に乘込んで、漢民族を感孚包容しようとする場合にはその關係が逆になる。そこにはミイラ取りがミイラ化せられる危險が頗る多いのだ。日本民族の將來は蓋し南方にある。工業原料も、商品市場も、日本民族の爲にその進歩と繁榮とを約束する明日の針路は南方にある。しかし、日本民族としてその明日の針路に向つて羽翼を整へ、力强い羽ばたきを搏たせる據點は、斷然その民族の故鄕であり、且つその文化の源泉である北方になければならぬ。滿洲帝國の郷業こそは日本民族が將來南溟に向つて、大にその羽翼を伸さんとする飛行場築造工事以外の何ものでもないのだ。だがこの飛行場の地固め工事にあたる『五族協和』は容易の仕事ではない。『五族協和』の理念には何人も反對するものはなからう。たゞ漢系滿洲人の包容を如何にするかといふ實際問題が、『五族協和』の一大難工事であり、それが出來れば、東亞聯盟も期せずして成るであらう。

海洋文化の特質から觀た日本民族の優越性

混血種としての日・支・兩民族

日本民族がこの世界の有らゆる部面から、極めて廣汎な種類の血液をあつめて結成された渾血民族であるといふことに關しては、今日では何人にも異存がなくなりつゝあるやうだ。もちろん、混血民族といふことは、われ〳〵日本人のみに限つた特色ではない。凡そ世界いづれの民族にしても、幾種かの血液の渾成品でないものはないといつてよろしからう。

支那人も混血民族だ。フランス人も混血民族だ。イギリス人も混血民族だ。イスパニア・ポルチユガル・人も混血民族だ。して見れば何も日本人だけが混血民族だからといつて、それをこの民族の優秀性の土臺に置いて考へる必要はない、といふ横槍も出さうなことだ。

しかし、その混血には、世界の各民族がそれ〴〵の『振り』を持つて居る。著者が常にわれら日本民族の文化の特徴を、その複雜且つ廣汎な混血種としての土臺の上に置いて考へるのは、その『振り』についていつて居るのだ。混血種でありさへすれば、その條件の如何に拘らず、何でもかでも優秀だといつて居るわけではない。

手近なところでは支那人を見るがよい。支那人も日本人に劣らぬ、複雜且つ廣汎な混血種である。われ〳〵は支那本土に居住する程のものを、一概に漢民族といひならはして居るが、純粹の漢民族がどういふものであるか、又、どこから來たものであるかは頗るむづかしい問題である。

現に漢民族として取扱はれて居るもの〻中には、吾々日本民族の核心となつた天孫民種と系統を同じくするアジアの北種（ツラン系）の血液も多量に混つて居る。これを細かにいへばツングウス人・蒙古人・トルコ人・の血液が多量に混つて居ることはいふまでもなく、更にそれらの諸民族を介して深くエウロツパの境に喰込んで居るフイン・ウグリア人・サモエード・人の如きツラン系諸民族及びスラヴ人・ユダア人・チエコ・スロヴアキア人・フンガリア人・ブルガリア人・ルウマニア人・の如き近東・エウロツパ人の血も尠からず流れ込んで居ることであらう。

又、アジアの南種（崑崙系）では、恐らく漢民族とその根元を同じくするであらう西藏人を始

めとして、ドラヴィダ・苗・玀々・その他マレイ・ビルマ・カムボヂア・ラオス・タイ・安南・東京（トンキン）・の境に布置されて居る種々雜多の後インド族が、漢民族とその系統を同じくするものであることは、むしろ現前の事實であつて、詳しく說明する必要のないことのやうだ。更にずつと古く、有史以前に溯ると、支那にも、日本と同じやうに、大洋系のピグミイ（ネグリート）が蓄衍して居たらしく、昨年（昭和十四年）滿洲旅行中、錦州の娘々廟で見た四天王の一つはピグミイではないが、そのネグロ系のものであること確かで、平たい鼻や厚い唇の特徵が、實によく出來て居た。かやうに見て來ると、支那人は日本人以上に複雜且つ廣汎な混血種であるといふことが出來る。

ところが、支那人の血液を構成する分子は、概してアジア大陸の南・北・兩種に限られて居り、複雜且つ廣汎であるには相違ないが、日本人程多量に大洋種の血液を包容しては居ない。支那は日本と一衣帶水の地に國を成すとはいへ、日本人の生活樣式（文化）を決定する上に最も重大な關係を持つて來た黑潮と颱風とは、殆ど完全に支那本土を素通りして、日本聯島にだけ吹きつけて居る。但し颱風の方は稀に番狂はせがあつて、支那本土にも上陸することはあるが、それは明治三十三年から昭和九年までの三十五箇年間に六・七・回といふ例外だ。

地圖を披いて見ればよく分ることだが、北赤道海流はメキシコのアカプルコ沖合からフイリッピン沖合に向け、非常な勢で一直線に吹きつけ　そこで鋭角度に折れて臺灣の外洋から沖繩列島の東方を、九州の南端、薩摩・大隅・日向・の一角に向けて奔瀉した後、土佐・紀伊・伊豆・房總・と東海道に沿つて金華山沖に至り、こゝで千島の方から押して來る親潮と衝突し遠くアラスカの沖合に外れて居る。俗に黑潮と呼ばれて居るこの海流は、日本人の文化を決定した最も大きい自然力の一つであるが、支那大陸は完全に素通りして居る。

又、この北赤道海流は、臺灣の外洋を通過し、八重山群島にさしかゝつたところで、一つの支流を派生して居る。その支流は石垣島から東支那海に入り、沖繩列島に沿つて朝鮮海峽にぬけ、裏日本の海岸を洗つて一つは津輕海峽の方に、他の一つは間宮海峽の方に消えて居る。學者はこれを對馬海流と呼んで居るが、著者は分り易く黑潮支流と呼びならはして居る。この海流も支那本土には何の影響をも與へて居ない。朝鮮の南端、全羅南道及び慶尙南道の海岸は、わが兩筑・兩肥・の海岸とゝもにこの海流の影響をうけて居るが、支那本土には意地わるく何の影響もない。

海流の外に、日本人の文化、卽ち生活樣式を決定した今一つの大きい自然力は颱風であるが、

これも日本にだけ吹きつけて支那本土には殆ど影響がない。

番狂はせとして支那本土を襲ふことはあつても、それは前にも述べたやうに、三十五箇年間に六・七・回といふ稀有の例だ。颱風の起る原因は、北太平洋の西部、卽ち、フイリツピン群島若しくはボルネオ附近に發生する熱帶性低氣壓にあるので、その影響を最も多くうけるものは日本で支那・朝鮮にはそれが殆どないといつてもよく、滿洲となるとそれが全然ないといへる。

これを要するに黑潮といひ、颱風といひ、天がひとり日本民族を偏寵する爲に用意して置いたかと思はれる程、他のアジア諸民族にとつては不公平な天然條件の分配だ。もちろん颱風はその破壞性の一面が齎す被害の甚だしさに、一般的には恐れられてばかり居るが、それは他の一面に偉大な建設性のあることを見ぬからだ。しかもその寄與は自然界のみに止まらず、人事の上にも相當大きいものを齎して居る。支那はあれほどの大國であり、海岸線も從つて相當のものでありながら、その民族の血統及び文化の上には海洋の影響が極めて少い。

先づ血統の方からいふと、前にも述べて置いたやうに支那人は、その混血種といふ點からいつて、日本人に劣らぬ複雜且つ廣汎なものであるにも拘らず、その構成分子として殆ど大洋種を包容して居ない。いはゆる中華の支配權を目標として征服したり、征服されたり、押出したり、押返されたりして來たが、それは要するにアジア大陸に於ける北種（ツラン系）と南種（崑崙系）との血の取引に過ぎなかつたのだ。

大洋種らしいものゝ侵入といへば、極めて稀に、フイリツピンのビサヤ族が竹筏に乘つて泉州を劫掠にやつて來たくらゐのもので、北種（元・清・）が中華の支配者となつた時でも、南種（漢・魏・晉・隋・宋明・は、その主體が漢民族であることは明瞭であるが、それ以外のものになると疑ひがある）が、中華の支配者となつた時でも、支那人は概して海洋に怯懦で、海軍の事といふと、ひたすらに朝鮮の力を恃んで居た。

朝鮮にはその半島の南端に黑潮支流（對馬海流）の影響があり、新羅・高句麗・百濟・三國の興る以前、新羅の地に蕃衍して居た弁・辰・兩韓人、百濟の地に蕃衍して居た馬韓人は、いづれも大洋種もしくはインド支那族の或るものであつたらしく、その血液は朝鮮人の脈管に流れてかれらを何ほどか海洋のことに堪能にした。殊に注意して置いてよいことは、朝鮮が鐵釘による縫著船の故郷であり、大軍艦の建造術が古くからこの國に傳はつて居たことだ。

思ふに滿・鮮・の國境、長白山の南北に亙る一圓の地域は、さほど久しからぬ前まで鬱蒼たる大密林で、巨木良材が無盡藏であつたに相違ない。ロシア人がこの大密林の伐採に着眼したことが何ほどか日露戰役の破裂を早める原因の一つとなつて居るほどだ。されば清朝も康熙帝の頃までは鴨綠江・圖們江・牡丹江・松花江・遼河・綏芬河・の水底が今より遙に深く、大船を浮べるに都合がよかつたものに相違ない。鐵釘を用ひた縫著船は海岸よりもむしろこの大森林地域に發祥し、その東して日本海に浮出たものが出雲から秋田に至る裏日本一帶の海岸に漂着し、西して遼東に出たものが、渤海灣に入つて、山東北方と、滿洲との交通を助けて居たことは察するに難からぬ。

吉林といへば東邊道の山の中で、船とは凡そ緣の遠い所のやうに一般には考へられて居るやうだが、明朝も清朝も、こゝをその軍艦の建造地として居た。現に清の聖祖（乾隆帝）の時にはこのことが『船廠』といふ名で呼ばれたほどだ。

諸民族興亡の岐るゝ海洋文化

日本人の脈管には、支那人と違つて多量に大洋種の血が流れて居た。大洋種の中で最も著るしいものは、マレイ・ポリネシア人とピグミイ（侏儒）とである。マレイ・ポリネシア人は前インドもしくは後インドが故郷で、インドネシアの島々に押出して行つたものか、それとも、ハワイ諸島から南、赤道を越えて太平洋の眞中央（まつたなか）に炒豆を撒き散らしたやうに布置されて居るポリネシアが故郷で、ミクロネシア・メラシニア・と西漸しインドネシアの島々に及んだものか、それは今のところ明かでない。

中にはこの人種があまりにも萬遍なく太平洋の小さい島々にまでも行きわたつてゐるので、太古、太平洋の中央にアフリカのやうな一つの大陸があり、それがマレイ・ポリネシア人やピグミイの故郷であつたところが、その大陸はその後大地變の爲に陷沒して姿を消してしまつたのだと想像する人さへあるほどだ。しかしこの說は信ぜられぬ。

それよりもピグミイの故郷としては、むしろアフリカ大陸が注意されてよい筈だ。ベルヂユウム領のコンゴーや、イギリスの委任統治に歸して居る舊ドイツ領東アフリカ植民地には、現にたくさんのピグミイが布置されて居る。このピグミイがインド洋を經て太平洋の島々に徙遷したことは、必ずしも『お椀の舟に箸の櫂』のお伽話を想ひ出すまでもなく、現にベルヂユウム領コン

ゴーに行つて見れば、この一寸法師が、バンツウ族やスダン・ニグロ族の間に立交つて最も巧妙な刳船の製作者であることでも知られる。

又、アフリカ西海岸のマダカスカルには、太平洋のメラシニア諸島から西遷した大洋種と、アフリカの熱帶森林地方から押出した土人とが交錯して生を營んで居る。

マレイ・ポリネシア及びピグミイの外、天孫御降臨以前日本に渡つて來て居た南方渡來の種族の中には臺灣に於ける生蕃の各種、海南島の中心をなしてゐる山嶽地域に住む黎の如き民種も立交つて居たであらう。これらの民種は一概にこれを大洋種の中に引きくるめて考へることは許されぬ。中には、前インド若くは後インドの或る部分から一旦海洋に乘出し、インドネシアの諸島を經て臺灣・海南島・あたりに蕃衍し、これも天孫の御降臨以前、すでに筑前・筑後・肥前・肥後・の一部に占住して居た倭人、すなはち、南支那から今の佛領インド支那方面に亙る大陸を故郷とする苗族と極めて複雜且つ密接な關係を保ちつゝ、南九州の或る部分に占住して居たものもあつたであらう。

その前インドを故郷とするものには當然ヒンヅウ（インドに住む白人）の血も交つてゐたことであらうし、骨骼も容貌も、むしろ白人に近く、南方渡來の民種であるからとて、一概に黑ん坊（ネグロ）ばかりを聯想することの許されぬものも少くなかつたであらう。『魏志』の倭人傳の中にも耶馬臺國（筑後の山門）の南界に黑齒國があり、裸國があり、又、侏儒國があつたといふ記述が見える、侏儒はいふまでもなく大洋種の中で文化の程度の最も低かつたピグミイで記・紀・には『土蜘蛛』とあり、アイヌがこれをコロポク・グルと呼んで居たことが、德川時代の末に及び『渡島筆記』の記述（著者は恐らく最上德内）によつて明かとなつた。又『魏志』に黑齒國とあるのは、その國人が現に臺灣本島人の間にその風習を留めてゐる、檳榔樹の實を石灰で練つたビナを嗜んだところから來た名稱ではなかつたであらうか。ビナを嗜むものは、その齒が常に眞黑である。

かやうに九州に於ける南方種族の分布は頗る複雜であつた上に、その據點も錯綜して說明に頗る困難を感ずる。しかし、それはそれとして、漢族・苗族・を代表者とするアジアの南種（崑崙系）と大洋種とは嚴に區別して考へられなければならぬ。何故かといへば、支那人を代表する漢民族がアジア大陸からいへば、南方種族に屬するものでありながら、天然地理の關係上、日本人のや

うに大洋種の血液を包容することが出來なかつたといふことで、兩者の文化の上に夥しい距離が生じ、從つて現に見るやうな國運の差隔を來たして居るからだ。

支那があれだけの大國であり相當に長い海岸線を有しながら、いふに足るほどの海洋文化を持たなかつた原因は、確にその民族の血統的構成分子として、大洋種を包容して居なかつたといふことをその主なるものゝ一つに數へなければなるまい。宋も元も明も清も、海洋のことゝいふと、その一切を擧げてこれを朝鮮人に委ね、その造船術及び航海法に倚賴して來た形跡が著るしい。

しかしその朝鮮人も、民族の主體は扶餘とか、沃沮とか濊とか、貊とかいふ名で呼ばれたアジアの北種（ツラン系）だ。これらの北種が、半島の南端に蕃衍して居た、南方種族（馬韓人・弁韓人・及び辰韓人）を滅ぼして新羅・高句麗・百濟・の三韓を打建てた。朝鮮民族の構成分子として交つて居る南方種族の血液と文化とはほんのちよつぴりだ。

しかるに日本民族はどうであるか。その核心となつたもの、これを人體にたとへていふならばその骨組となつたものは、確にアジアの北種中最も優秀な或る種族である。しかし、その肉ともなり、皮ともなつたものはアジアの南種（崑崙系）と大洋種とである。この點、同じ混血種ではあるが、日本民族の場合は、その混血した『振り』が違つて居る。それはアジアに於いて確に唯一つの『振り』であるばかりでなく、世界に於いても全く比類のない獨特の『振り』である。

東亞に於ける支那と日本との民族的存立競爭は海洋戰で結着したといつても決して過言ではない。支那は日本の海軍を制するに、朝鮮の造船術と操船法とのみに倚賴した。元主・忽必烈が大兵を發して日本を征服し、これをその屬領として封建的に搾取しようと企てた時は、前役（文永十一年）・後役（弘安四年）・ともに朝鮮の海軍を主力として、日本に攻め寄せた。前役にも日本側に相當の準備はあつたわけであるが、何分外國と兵を交へた經驗に乏しく、元の戰術陣法もよく分つて居なかつた爲に、壹岐・對馬・を屠られた上、筑前今津の濱に上陸されて、箱崎・博多・を敵の蹂躙に委ねなければならなかつた。それにも拘らず、支那側に日本に特有の天然地理的條件である颱風の猛威と、それに激揚される黑潮支流の嶮難とに關する用意を缺いて居た爲に、弘安四年十月二十日の夜から翌二十一日の朝にかけて吹き通した颱風の爲に、その戰艦の大部分を喪つて全然失敗に終つて居る。弘安四年の後役となると、日本側にもかれの戰術・陣法・がよく分つて居たし、それに應ずる相當の防備もあつて博多灣には敵兵を一兵も上陸させなかつた。この役、

元軍は朝鮮の馬山浦(合浦)と、南支の寧波（慶元）と二路に分れて征途を發し、わが筑紫の外海に至り、合して一團となり、一擧に太宰府を屠る作戰であつた。これに對するわが軍の戰術は飽までも輕舸主義で、先づ博多灣に石壘をめぐらして大船を寄せつけぬやうにし、夜陰に乘じ、精兵を日本海洋文化の特色である鰹節型の小舟に載せ、矢石を冒して沖がかりの敵艦に漕ぎ付け、大船の進退意の如くならざるに乘じ、或は放火に、或は斬込みに、散々に敵を惱ますのであつた。これは日本軍としては素晴らしい聰明な戰術であつた。

若し日本軍が前役の經驗に徵し、敵の大艦主義に對抗する爲に、なまじひに大艦を建造してこれに當つたとしたならば、或は茫文虎の江南軍が來り會する前に、忻都・洪茶世・等の東路軍は、日本軍を擊破して博多灣の一角に上陸の目的を達して居たかも知れぬ。

日本軍が飽くまでも輕舸戰術を守り、かれの得意とする大艦主義の弱點に乘じて散々に戰ひぬき、敵兵をして一歩も筑紫の地を踏ましめなかつたのは、天晴といふも愚かである。

先頃金州なる岩間猛也氏によつて發見された宋の蘄州（湖北省黃州府蘄春）の人、張成の墓碑銘によると、東路軍は志賀島で散々に日本軍を打惱ました後、更に鷹島に移り、こゝでも大に日本軍を擊破したことが記述されて居る。これは敵側からいつて必ずしも詐飾ではなかつたであらう。しかし元軍の目的は兩路の軍を合して一擧に博多灣に上陸し、太宰府を拔くにあつた。それが、一歩も上陸を許されず、志賀島に固着して、夜襲の日本軍を擊退することに全力を傾倒して居たといふだけで、日本軍の輕舸戰術が、どんなに素晴らしいものであつたかゞよく分る。

元主は海洋の何ものであるかを知らなかつた。さうしてひたすらに朝鮮の大艦主義を恃むことによつて、見事に日本の征服に失敗して居る。

北種の釘着船と南種の刳船

大アジアを打つて一圓の封建的ブロックとした元の壓倒的な大海軍を、物の見事に擊破した日本の輕舸戰術がどこから來て居るといへば、それは前來述べて來た日本民族の血統的構成分子として包容された大洋種の、海を恐れぬ精神に淵源することといふまでもない。

日本の太平洋沿岸は九州の南端から、磐城平の沖まで黑潮（日本海流）に洗はれて居るが、この沿岸、殊に大阪附近からは、往々亞熱帶樹の代表ともいふべき樟の巨木で造られた刳船の殘骸

が出土する。それに反して出雲から津輕に至る日本海沿岸からは、滿・鮮・國境の河川用、もしくは湖沼用と、同じ系統と考へられる鐵釘を使用した建造船の斷片が發見される。この二つの系統の船、卽ち南方から大洋種の乘つて來た刳船と、圖們江・綏芬河・もしくは黑龍江の河口地方から滿洲-ツングウスや、シベリア-ツングウスが乘つて漂着したと考へられる釘着船とが融合してあのスマアトな輕快な鰹節型の大和船は出來上つたと見るべきだ。もちろんこの外に宇佐を中心として、豐前・豐後・兩國の海岸に占據して居た『おほわだつみ』族も、故鄕『鰐の國』から持つて來た特殊の船舶を持つて居たに相違ない。その文獻に現はれたものに『無目勝間小船』がある。これは一種の籠船だ。尙この籠船の外にも遠洋航海にたへ得る或る特殊の船のあつたであらうとは、この種族の一方の代表者で、天孫御降臨の際に、水先案內を奉仕した形跡の著るしい宗像三神が、航海の事を掌る女神にて在したことによつても推察せられる。大和船が、日本近海の海流と氣流とを征服するに絕好の條件を具備するまでには、かやうにして南北幾多の民種によつて齎された古代船舶の長所が採用されたことであらう。

宋との密貿易は、平安朝以來のことであつて、平淸盛といひ、源賴朝といひ、海賊の方からいつても、たしかに大將軍たる資格を十分に具備して居たのであるが、元寇再度の役以後は、その貿易が頓に兇暴性を加へ、元も、明も、全くその防禦擊攘に苦むやうになつた。これには、かの國にも『浙關大姓』など呼ぶ同じ性質のものが生じ、倭寇と結託し、倭寇の假面にかくれて劫掠を事としたからでもあるが、要は元寇兩度の役で、支那・朝鮮・の大海軍の全く恐るゝに足らぬことが、西海・四國・中國・方面の密貿易者すなはち海賊衆に普く知れ渡つたからだ。

元も倭寇の爲にその中華政權としての威信を失つた。ついで起つた明も、倭寇の爲に散々苦しみぬいた末、倭寇の規模を一段と大がかりにした豐臣秀吉の出征に遇つて、その附庸國であつた朝鮮を救ふ爲に、財政的に全く破產狀態に陷れられてしまつたわけであつた。

海洋に怯懦で港灣に執着のない漢民族

豐臣秀吉はその朝鮮出師の準備として、日本の海洋文化に前例のない巨船大舶を建造した。これは倭寇の場合とちがひ、相當の兵力とそれに伴ふ軍需とを輸送する必要上、誰が企てたにしても、止むを得ぬ用意であつたに相違ない。遠州掛川の山內一豐などは大井川の河口に樟の巨材を

集め盛んに造船をやつた。今でもその邊に大楠神社といふものが祀られて居る。しかし、この大軍艦はまだ日本民族の手には果へなかつた。大軍艦の操縱では、何といつても朝鮮の方に經驗もあり、訓練もあり、從つて勝目もあつた。補助艇で海流と氣流とを突破し濟州島あたりまで進出する間は日本海軍に捷利があつたが、迂回して黃海面に出で、海流も氣流もない、鏡のやうな海の上での戰爭となると、日本の海軍は全く朝鮮の海軍に壓された。さうして、黃海の制海權の確保されなかつたことが、秀吉の雄圖を挫折させた最も大きい原因の一つになつて居る。

清が太祖・太宗・世祖・三代の經略で中原をあらゝなしてからも、朝鮮はなほ殘明に忠義立てして、ひそかにその海軍で朱氏の恢復を助けたものだ。そこへ日本人の血脈をひいた鄭成功が現はれ、海軍の力で朱氏の末裔を擁し、盛んに清朝を惱ました。清朝では全く持て餘し、南支一帶海岸から幾十里といふところに溝を掘り壁をめぐらし、その防禦線より外には一切人民の居住することを禁じ、これを『堅壁清野の計』と稱へた。この『清野』といふことばは現在でも蔣介石政權によつてしば〳〵使用されて居るやうであるが、清朝の鄭成功對策以前からあつたことばかどうか、著者もそこまでは知らぬ。何れにしても、清朝の『堅壁清野』は明かなる港灣の放棄である。海洋の閉鎖である。どんなに鄭成功が怖かつたかは知らぬが、凡そ國家として海岸線を放棄して命脈を保てようわけがない。これで支那人といふものがどんなに海洋の占有、港灣の確保といふことに無關心であつたかゞよく分る。

四川の山の中に竄入して、焦土戰術を高唱して居る蔣介石にしても同じことだ。もちろん、蔣介石の四川竄入は、餘儀なくされた結果には相違ないが、日本の海軍に海洋と港灣とを封鎖された時こそ、もう先途に見越しをつけて善處すべきであつた。それがかれらの口癖のやうにいふ人民への忠義といふものだ。四川の山の中に竄入しては、諸葛亮の智謀を以てさへ、漢室の恢復は出來なかつたのだ。英・米・佛・の資援がどれほどのものかは知らぬが、日本が太平洋の制海權を把握して居る限り、日本民族といふものは自由主義經濟學者のそろばん通りに脆くへばつてしまふものではないのだ。

日本の民族文化の特徴である海洋文化といふ點をつまみ上げて見たゞけでも、その民族に、同じ大陸、もしくは同じ世界に於ける他民族にない特殊の血液の包容されて居るといふことは上來述べ來た如く、その國運の盛衰消長の上に、千里も啻ならざる距離を生ずるものであるのだ。そ

れなら、日本をアジアに於ける唯一の完全な近代民族國家としてこゝまで發展させてくれた大洋種が、それほど優秀な民種であるかといふにさうではない。

マレイ・ポリネシア人の如き相當のものであるに相違ないが、多くの場合、かれらの奴隷として携帶されたもののやうに想像されるピグミイに至つては、明かに世界の人種の中で血統的にも文化的にも最も劣等なものである。それが中樞にしつかりとした核心があつて、一切のものを攝取包容し、一切のものを消化融合して、渾一體とすることが出來た時に、日本民族のやうな立派なものが出來上るのだ。

歐洲で日本民族に比較すべき混血種

歐洲で日本人に比較すべき、複雜且つ廣汎な混血民族は何かといへば、それはフランス人だ。フランス人は歐洲に於ける白人の三大種族、すなはちチュウトン人（アルプスの北種）・ラテン人（アルプスの南種）・ガリ人（アルプス種）・の三大種族に屬する有ゆる血液を包容するものである上に、アフリカの北部海岸をめぐるハム族及びセム族に屬する有ゆる血液をも包容して居る。それでも廣汎といふ一點になると、まだ日本人には及ばない。何故かといへばフランス人の脈管には赤道を越え、南回歸線を越えた、極界に近い大洋種の血液までは攝取包容されて居ない。その代りスカンヂナヴイア半島を第二の故郷とし、北海・バルト海・の上を飛魚のやうに飛廻つて居たヴアイキングの血は多量に吸收されて居る筈だ。それにも拘らず、フランスがその海洋文化に於いてイギリスにも、日本にも一籌を輸するのは、その北海のヴアイキングが核心となつて、アルプスを境とする南北有らゆる民種の血液を吸收する強い力がないからだ。フランスでは、北方チュウトン系の勢力が、ともすると南方ラテン系の勢力に押され勝ちであり、その點で、フランスは歐洲の支那であるともいへる。

イギリス人も複雜且つ廣汎な混血民族であるが、ケルト人（ガリ系）を除く、他の民族的構成分子はすべて北種のわかれであり、その文化の程度がほゞ匹敵して居たところに、火の出るやうな民族的摩擦があり、その摩擦の結果として現に見るやうな偉大な社會性が生れた。その海洋文化に於いてフランスとの存立競爭に打克つことが出來たのはノルマン人を始めとして、アングル人・デーン人・ジュウト人・その他イギリス人の血統を構成するすべての民種・民族・が北海の波濤

できたへた飛魚であるからだ。イギリス人はその偉大な社會性に於いて日本人に缺如して居るものを持つて居るが、日本人はまた世界に多く比類のない強い全體性を持つて居る。フランス人も支那人も、社會性ではイギリス人と一脈相通ずるところがないではないが、その文化に亞熱帶性の宗教的傾向が著るしく、實際的・現世的・科學的・特徴を缺くところで、日本人の方がむしろイギリス人に近い。

人類の文化史に類例のない民族ラッシュ

一

何處より何處へ流れゆく人の波ぞ。汽車は行くも、歸るも、座席は超滿員、寢臺は一ぱい。食堂は朝飯と晝飯とのけじめなく、晝飯と晩飯との間合がない。內地こそ驛辨で用は足れ、足一たび大陸の地を踏んだが最後、うか〳〵して居れば、一日斷食だ。宿なしの立ん坊だ。行李といふ行李、鞄といふ鞄が皆天津行だ。大連行だ。釜山行だ。さうして北京でも、新京でも、大連でも奉天でも、ハルビンでも、牡丹江でも、四疊半に四人の男が住み、甚しきは二組の夫婦が住んで居る。

アラスカの開けたのは、クロンダイクに金鑛が發見されたからだ。カリフオルニアの開けたのは、サンフランシスコ近くに金鑛が發見されたからだ。南アフリカの開けたのは、ベアル地方に

ダイヤモンド坑が發掘されたからだ。滿洲にも、蒙疆にも、北支にも、まだ金鑛は發見されて居ぬ。ダイヤモンド坑は發掘されて居ぬ。それにも拘らず、日本民族はアラスカの開けた時、カリフォルニアの開けた時、南アフリカの開けた時と同じ熱と力とを以て、大陸へ〳〵と押出して居る。西へ〳〵と走つて居る。そこには曾て北米大陸の大草原を横つた幌馬車の姿は見られない。アラスカの氷原を走つた犬橇の姿は見られない。そこには南滿洲鐵道會社が過去三十年に亙る慘澹たる外交々渉の苦心と無慮七千幾百の貴重なる人命とを犧牲として敷設して置いて呉れた鐵道がある。眞直な鐵道がある。何故眞直な鐵道と特に斷はるか。坦々たる平野を走る鐵道はどこでも眞直でよい筈だ。しかし、それが必ずしもさうでない。ブラジルの鐵道はどうだ。大らかな丘のうねり、あるかなきかの傾斜をサンゴタルド鐵道のやうに曲りくねつて走つて居る。それは鐵道一キロに對して幾何といふ助成金が、政府から下付されるからだ。滿洲にはそんな曲りくねつた鐵道はない。どの道も、どの鐵道も、日本人の心そのまゝに眞直だ。もつと適切にいへばアジアの北種の心そのまゝに眞直だ。サンゴタルド式は、賓・綏・線の冷山・高嶺子・間の分水嶺に一箇所と、京・圖・線の哈不巴嶺に一箇所と、見られるだけだ。この眞直な、實正な鐵道の上を民族ラッシュの波が流れる。大噴火・大洪水・の起る前に、地上の有らゆる生物が、かの永劫の深みから呼びかけられる本能の刺戟につれてその居を移すやうに、どの線路も、どの線路も、突進する民族の行列で超滿員だ。

二

白人歐・米・が、日本民族發展の前路を要塞する爲に豫め構築して置いた堤防が決潰した。この堤防を決潰したものは誰か。この堤防を、決潰したことが善かつたか、惡かつたか、今となつてはそれはもう問題でない。日本民族はその堤防の決潰口から滔々と大陸に流出して居る。

若しこの堤防の破壞工作が或る一部の人々によつて考へられて居るやうに、或る一部階級の無思慮・無分別・から起つたことであり、全國民の力がこの一部階級の驚蹇を制することが出來なかつた爲に起つたことであるならば、かうしたすざましい大氾濫は起らなかつたであらう。起つたにしても決潰口は、自然の作用で直に閉塞されたに相違ない。

堤防が決潰してから今玆に十年に垂んとする歲月が流れて居る。しかも大陸に對する民族ラッ

シュは、年一年とその勢を加へ、さしもの曠野も今やその洪水のもたらした冲積土によつて完全にその質と相とを更めようとしてゐる。

三

今や滿洲の諸都市には到るところ、北米合衆國開發時代の情景が展開して居る。チャムスがそれだ。牡丹江がそれだ。圖們がそれだ。吉林がそれだ。新京の下町にも到るところにその情景は打見られる。道路は掘りかへされ、木石は狼藉し、雨が降れば街路は沼澤と變り、泥濘は少しの誇張もなく脛を沒する。その上を乘越えて騾に曳かせた汚穢そのものゝやうな馬車が駈り、バスが走り、漢系滿人が行き、朝鮮人が行き、タヽアルが行き、白系露人が行き、大和撫子が大陸の風景とあまり調和のよくない日本服に、民族の衿持を懷きつゝ蹣跚として行く。

サンフランシスコの草創時代、シカゴの大火以前、その姿がいまざ〳〵とチャムス・牡丹江・圖們・吉林・の町々に現はれて居る。だがそこにはもう匪賊の影は遠く、合衆國の開發時代に見たやうなパチンコ騒ぎの噂もきかぬ。『シカゴより何のよきものか生れ出づる』といはれた泥濘時代を跳り越えて滿洲の諸都市は今、善きものへの大跳躍にどつた返して居る。一切の不調和、一切の猥雜、一切の混亂、一切の騒音が、ネセサリイ・イヴルとして、世界の植民史を知らぬ半可通の眉を顰めさせる。殊にハルビンの如き美しく整つた都市が、混亂と猥雜とによつて塗潰されて行きつゝあることは、典雅と靜謐とを喜ぶ人々にとり、忍び難い苦痛であるに相違ない。それは單にハルビンの都市美の上にのみ見られるのではない。滿鐵が三十年の苦心によつて築上げて來た、一切の秩序と統制との上にもそれがある。

だが、悲觀してはいけない。飛躍する爲には、十數歩の後退は必要だ。建增する爲には、蘚苔なめらかな庭園の一部が、踏藉されることは避け難い。

四

ブラジル移民が、當初營利會社の牡丹餅で頰桁をたゝくやうな宣傳によつてのみ行はれた爲に、全然大陸の知識を缺き、ジャングルの何ものたるかを知らぬ可憐の農民を誘き出して、南十字星のまたゝく大西洋の彼方に棄てた形となり、怨嗟の聲が、どこのファゼンダにも、幽鬼の哭する